

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—25—

朝倉郡杷木町所在鞍掛・前田・西ノ追遺跡の調査

1993

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—25—

朝倉郡杷木町所在鞍掛・前田・西ノ追遺跡の調査

1993

福岡県教育委員会



(1)鞍掛遺跡俯瞰



(2)西ノ追跡俯瞰

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

今年度の報告書は、昭和61・62年度に発掘調査しました鞍掛遺跡、前田遺跡、西ノ迫遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第25集としてまとめ刊行したものです。本報告書が、文化財愛護思想の普及および研究の一助となれば幸甚に存じます。

なお、発掘調査にあたり多大なご指導、ご協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係された各位に対して深く感謝いたします。

平成5年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例　　言

- 1 本書は、昭和61・62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した杷木町所在の鞍掛遺跡・前田遺跡・西ノ迫遺跡の報告書で、「九州横断自動車道関係文化財報告書」の第25冊目にあたる。
- 2 本書の執筆分担は下記のとおりである。

I	(高橋・佐々木・中間)
II	(佐々木)
III-1	(　々　)
III-2	(高橋・日高)
III-3	(中間)
- 3 現場での遺構の実測は、高橋 章・佐々木隆彦・中間研志・高田一弘・武田光正（現遠賀町教育委員会）・日高正幸（現小石原村教育委員会）・田中康信（現瀬高町教育委員会）・向田雅彦（現島栖市教育委員会）のほか・高瀬セツ子・本石セツ子・渡辺輝子・後藤カミヨ・牟田サエ子・矢野静子の協力を得た。写真撮影は高橋・佐々木・中間、空中写真はフォト・オオツカによる。
- 4 遺物の整理作業は、文化課整理指導員の岩瀬正信の指導のもとに文化課甘木発掘調査事務所で行った。また、遺物の実測は高橋・佐々木・中間と甘木発掘調査事務所の渡辺輝子・大野愛里・高瀬照美が担当した。
- 5 製図作業は日高・豊福弥生・原カヨ子が行った。
- 6 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館参事補佐石丸洋の指導で北岡伸一が行った。
- 7 挿図の方位は、すべて座標北である。
- 8 本書の編集は、鞍掛遺跡を佐々木、前田遺跡を高橋、西ノ迫遺跡を中間が担当した。

本文目次

I 発掘調査の経過.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	7
III 発掘調査の記録	
1 鞍掛遺跡の調査	
1) 遺跡の概要.....	9
2) 遺構と遺物.....	12
(1) 壴穴住居跡.....	12
(2) 土 墳.....	50
(3) 溝状遺構.....	51
(4) その他の遺物.....	57
3) 小 結.....	58
2 前田遺跡の調査	
1) 遺跡の概要.....	59
2) 遺構と遺物.....	59
(1) 壴穴住居跡.....	59
(2) 掘立柱建物.....	65
(3) 土 墳.....	65
(4) 溝状遺構.....	70
(5) 土 層.....	70
3) 小 結.....	84
3 西ノ追遺跡の調査	
1) 遺跡の概要.....	85
2) 弥生時代の遺構と遺物.....	90
(1) 壴穴住居跡.....	90
(2) 環濠.....	95
(3) 陸橋と門柱.....	100
3) 西ノ追1号墳.....	103
4) 歴史時代の遺構と遺物.....	107
5) 小 結.....	115

図版目次

- 巻頭図版 (1) 鞍掛遺跡俯瞰
(2) 西ノ追遺跡俯瞰

鞍掛遺跡

- 図版 1 (1) 鞍掛遺跡俯瞰
図版 2 (1) 鞍掛遺跡竪穴住居群俯瞰
(2) 鞍掛遺跡竪穴住居群
図版 3 (1) 1号竪穴住居跡（東から）
(2) 1号竪穴住居跡カマド出土状態
図版 4 (1) 2号竪穴住居跡（北から）
(2) 2号竪穴住居跡カマド出土状態
図版 5 (1) 3号竪穴住居跡（南から）
(2) 4号・5号竪穴住居跡（南から）
図版 6 (1) 5号竪穴住居跡カマド出土状態
(2) 5号竪穴住居跡カマド状遺構出土状態
図版 7 (1) 6号・7号竪穴住居跡（南から）
(2) 6号竪穴住居跡カマド出土状態
図版 8 (1) 6号竪穴住居跡カマド袖下層遺物出土状態
(2) 7号竪穴住居跡（南から）
図版 9 (1) 7号竪穴住居跡カマド出土状態
(2) 7号竪穴住居跡カマド下層土製品出土状態
図版 10 (1) 8号・18号竪穴住居跡（南から）
(2) 8号竪穴住居跡カマド出土状態
図版 11 (1) 9号竪穴住居跡（南から）
(2) 9号竪穴住居跡カマド出土状態
図版 12 (1) 9号竪穴住居跡カマド完掘状態
(2) 10号竪穴住居跡（南から）
図版 13 (1) 10号竪穴住居跡カマド出土状態
(2) 11号～13号竪穴住居跡（南から）
図版 14 (1) 14号・15号竪穴住居跡（東から）
(2) 14号竪穴住居跡カマド出土状態

- 図版 15 (1) 16号竪穴住居跡（南から）
 (2) 16号竪穴住居跡裡土状態
- 図版 16 (1) 16号竪穴住居跡遺物出土状態
 (2) 17号竪穴住居跡（北から）
- 図版 17 試掘調査、2号・3号・5号・6号竪穴住居跡出土遺物
- 図版 18 6号～8号竪穴住居跡出土遺物
- 図版 19 9号・10号・14号・16号竪穴住居跡、溝3出土遺物

前田遺跡

- 図版 20 発掘調査区全景（空中写真）
- 図版 21 (1) 1号竪穴住居跡（南から）
 (2) 2号竪穴住居跡（北から）
- 図版 22 (1) 3号竪穴住居跡（北から）
 (2) 3号竪穴住居跡下層（北から）
- 図版 23 (1) 3号竪穴住居跡土器出土状態（北から）
 (2) 3号竪穴住居跡土器出土状態（北から）
- 図版 24 (1) 4号竪穴住居跡（北から）
 (2) 1号・2号土壙（南から）
- 図版 25 (1) 1号土壙（南から）
 (2) 2号土壙（南から）
 (3) 3号土壙（北から）
 (4) 4号土壙（北から）
- 図版 26 (1) 5号土壙（北から）
 (2) 6号土壙（西から）
 (3) 7号土壙（西から）
 (4) 8号土壙（西から）
- 図版 27 (1) 東壁土層（西から）
 (2) 東壁土層（西から）
- 図版 28 2号・3号竪穴住居跡、黒褐色土層出土土器
- 図版 29 黒褐色土層出土土器
- 図版 30 黑褐色土層出土土器
- 図版 31 黑褐色土層出土土器

西ノ迫遺跡

- 図版 32 (1) 西ノ迫遺跡遠景（南から・手前は筑後川）
(2) 西ノ迫遺跡遺構全景（上空から）
- 図版 33 (1) そびえ立つ西ノ迫遺跡（南方上空から）
(2) 第1号竪穴住居跡と第1号古墳付近（上空から）
- 図版 34 (1) わらびもえ立つ山上で発掘開始
(2) 古墳の石室が現れた
(3) 環濠跡橋付近で掘りあぐむ
(4) 環濠北東端付近の作業
- 図版 35 (1) 第1号竪穴住居跡（北から）
(2) 第2号・3号竪穴住居跡（北から）
- 図版 36 (1) 環濠中央部の門柱跡と第5号土壙付近（上空から）
(2) 環濠内土器出土状態（北東から）
- 図版 37 (1) 環濠内土器出土状態（西から）
(2) 環濠北東側（南西から）
(3) 環濠中央部（北東から）
- 図版 38 (1) 第1号墳全景（南から）
(2) 第1号墳石室（西から）
- 図版 39 (1) 第1号土壙（南東から）
(2) 第2号土壙（北から）
(3) 第3号土壙（東から）
- 図版 40 (1) 第3号土壙（北から）
(2) 第4号土壙（北から）
- 図版 41 (1) 第4号土壙断面（環濠を切っている・西から）
(2) 第5号土壙（南西から）
- 図版 42 (1) 第6号土壙（北から）
(2) 第7号土壙（西から）
- 図版 43 (1) 左 環濠内出土甕
(2) 右 環濠内出土小型甕
(3) 左上 文化講演会「倭國大亂」
(4) 右上 热弁をふるう水野正好教授
(5) 左下 同会場の出土品展示
- 図版 44 (1) 文化講演会の後、みんなで西ノ迫へ登る
(2) 現地説明会（陸橋付近）

- (3) 現地説明会（環濠西半）
 - (4) 現地説明会（第1号住居跡）
- 図版 45 (1) のろし体験：準備完了
 (2) のろし体験：着火
 (3) のろし体験：杷木神籠石・役場裏からも発煙
 (4) のろし体験：「見える、見える」
- 図版 46 NHK収録時 のろし実験（草刈り・火起こし）
- 図版 47 (1) 西ノ追ののろしが上がる
 (2) 西ノ追ののろし（高山から）
 (3) 西ノ追（右）と高山（左）（杷木神籠石上から）
 (4) 南側平地から望む西ノ追遺跡

挿図目次

本文対照頁

第 1 図 九州横断自動車道路線図.....	2
第 2 図 各遺跡の位置図（1/5,000）.....	4
第 3 図 各遺跡と周辺の主要遺跡分布地図.....	8

鞍掛遺跡

第 4 図 遺跡周辺地形図（1/2,000）.....	10
第 5 図 試掘調査出土遺物実測図（1/3）.....	11
第 6 図 1号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）.....	13
第 7 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）.....	14
第 8 図 2号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）.....	15
第 9 図 2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）.....	16
第 10 図 2号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）.....	16
第 11 図 3号竪穴住居跡実測図（1/60）.....	16
第 12 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）.....	17
第 13 図 4号・5号竪穴住居跡・カマド状造構実測図（1/60・1/30）.....	19
第 14 図 4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）.....	20
第 15 図 4号竪穴住居跡出土土製品実測図（1/2）.....	20

第 16 図	5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	21
第 17 図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第 18 図	5号竪穴住居跡出土土製品実測図 (1/2)	24
第 19 図	6号・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第 20 図	6号竪穴住居跡カマド・両袖下層出土遺物実測図 (1/30)	26
第 21 図	6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第 22 図	6号竪穴住居跡出土土製品・鉄器実測図 (1/2)	28
第 23 図	7号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	29
第 24 図	7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	30
第 25 図	7号竪穴住居跡出土土製品実測図 (1/2)	30
第 26 図	8号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	32
第 27 図	8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第 28 図	8号竪穴住居跡出土土製品・鉄器実測図 (1/2)	34
第 29 図	9号竪穴住居跡・カマド・カマド下層実測図 (1/60・1/30)	36
第 30 図	9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	37
第 31 図	10号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	39
第 32 図	10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	40
第 33 図	10号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	41
第 34 図	11~13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第 35 図	13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	43
第 36 図	14号・15号竪穴住居跡・カマド・2号土壙実測図 (1/60・1/30)	44
第 37 図	14号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)	46
第 38 図	14号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3)	47
第 39 図	15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	48
第 40 図	16号竪穴住居跡・土層図実測図 (1/60)	48
第 41 図	16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	49
第 42 図	17号竪穴住居跡実測図 (1/60)	49
第 43 図	1号土壙実測図 (1/40)	50
第 44 図	1号・2号土壙出土土器実測図 (1/3)	51
第 45 図	溝3土層実測図 (1/60)	52
第 46 図	溝1出土土器実測図 (1/3)	53
第 47 図	溝2・3出土土器実測図その1 (1/3)	54
第 48 図	溝3出土土器実測図その2 (1/3)	55

第 49 図 溝 4・6・8 出土土器実測図 (1/3)	57
第 50 図 P-4・5・8・10 出土土器実測図 (1/3)	57

前田遺跡

第 51 図 遺跡周辺地形図 ((1/2,000))	60
第 52 図 前田遺跡遺構配置図 (1/400)	折込み
第 53 図 1・2号竪穴住居跡 (1/60)	61
第 54 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	62
第 55 図 2号竪穴住居跡出土土器・土玉実測図 (1/4・1/2)	62
第 56 図 3号・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	63
第 57 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	64
第 58 図 4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	65
第 59 図 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	66
第 60 図 1号・2号土壤跡実測図 (1/40)	67
第 61 図 3号~8号土壤跡実測図 (1/40)	69
第 62 図 東壁・南壁土層実測図 (1/100)	71
第 63 図 黒褐色土層出土土器実測図① (1/4)	73
第 64 図 黒褐色土層出土土器実測図② (1/4)	74
第 65 図 黒褐色土層出土土器実測図③ (1/4)	75
第 66 図 暗褐色土層出土土器実測図① (1/3)	77
第 67 図 暗褐色土層出土土器実測図② (1/3)	78
第 68 図 暗褐色土層出土土器実測図③ (1/6)	80
第 69 図 暗褐色土層出土土器実測図④ (1/3)	81
第 70 図 暗褐色土層出土土器実測図⑤ (1/3)	82
第 71 図 暗褐色土層出土土器実測図⑥ (1/3)	83
第 72 図 1. 2号土壙、2. 黒褐色土、3. 暗褐色土出土砾石・土錐 (1/2)	84

西ノ追遺跡

第 73 図 西ノ追遺跡から筑後平野東半部への眺望	86
第 74 図 西ノ追遺跡周辺地形図 (1/2,000)	87
第 75 図 西ノ追遺跡地形測量図 (1/600)	88
第 76 図 西ノ追遺跡遺構配置図 (1/400)	89
第 77 図 第1号竪穴住居跡実測図 (1/40)	91

第 78 図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)	92
第 79 図	2号・3号竪穴住居跡実測図 (1/40)	94
第 80 図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)	95
第 81 図	環濠各部断面実測図 (いずれも左方が内側) (1/60)	96
第 82 図	環濠内出土土器実測図 (1/4)	97
第 83 図	環濠内出土石器実測図 (1/2)	99
第 84 図	環濠隣接部と門柱跡実測図 (1/80)	101
第 85 図	西ノ追1号墳石室実測図その1 (1/40)	102
第 86 図	西ノ追1号墳石室実測図その2 (1/40)	103
第 87 図	西ノ追1号墳墳丘断面実測図 (1/60)	105
第 88 図	1号・2号土壙実測図 (1/40)	108
第 89 図	3号・4号土壙実測図 (1/40)	109
第 90 図	5号土壙実測図 (1/40)	110
第 91 図	6号土壙実測図 (1/40)	111
第 92 図	7号土壙実測図 (1/40)	112
第 93 図	4号土壙(1)、5号土壙(2)、その他出土の歴史時代土器実測図 (1/3)	113
第 94 図	P-1、表土中出土遺物実測図 (1/4・1/2)	114
第 95 図	表土中出土石器実測図 (2/3)	115
第 96 図	白岩遺跡の環濠	117
第 97 図	字土城西両台遺跡の環濠	118
第 98 図	断面V字溝 (前期後葉)	120
第 99 図	西ノ追遺跡のイメージ	125

表 目 次

鞍掛遺跡

第 1 表	土玉計測表 (1/40)	31
西ノ追遺跡		
第 2 表	環濠(溝)の機能による遺地	120
第 3 表	「V字溝は伝播した」	121

付 図

鞍掛遺跡遺構配置図 (1/200)

I 発掘調査の経過

九州横断自動車道杷木インター・チェンジ部分と国道386号線からインターチェンジに係る進入路部分では、用地が解決した段階で試掘調査を実施し4箇所から遺跡が確認された。遺跡はそれぞれ鞍掛遺跡が杷木インターA地点、前田遺跡が杷木インターB地点、西の追遺跡が杷木インターC地点、クリナラ遺跡が杷木インターD地点に相当する。

今年度掲載する遺跡は、鞍掛遺跡・前田遺跡・西ノ追遺跡で、以下遺跡ごとに調査経過を述べる。

鞍掛遺跡の調査経過

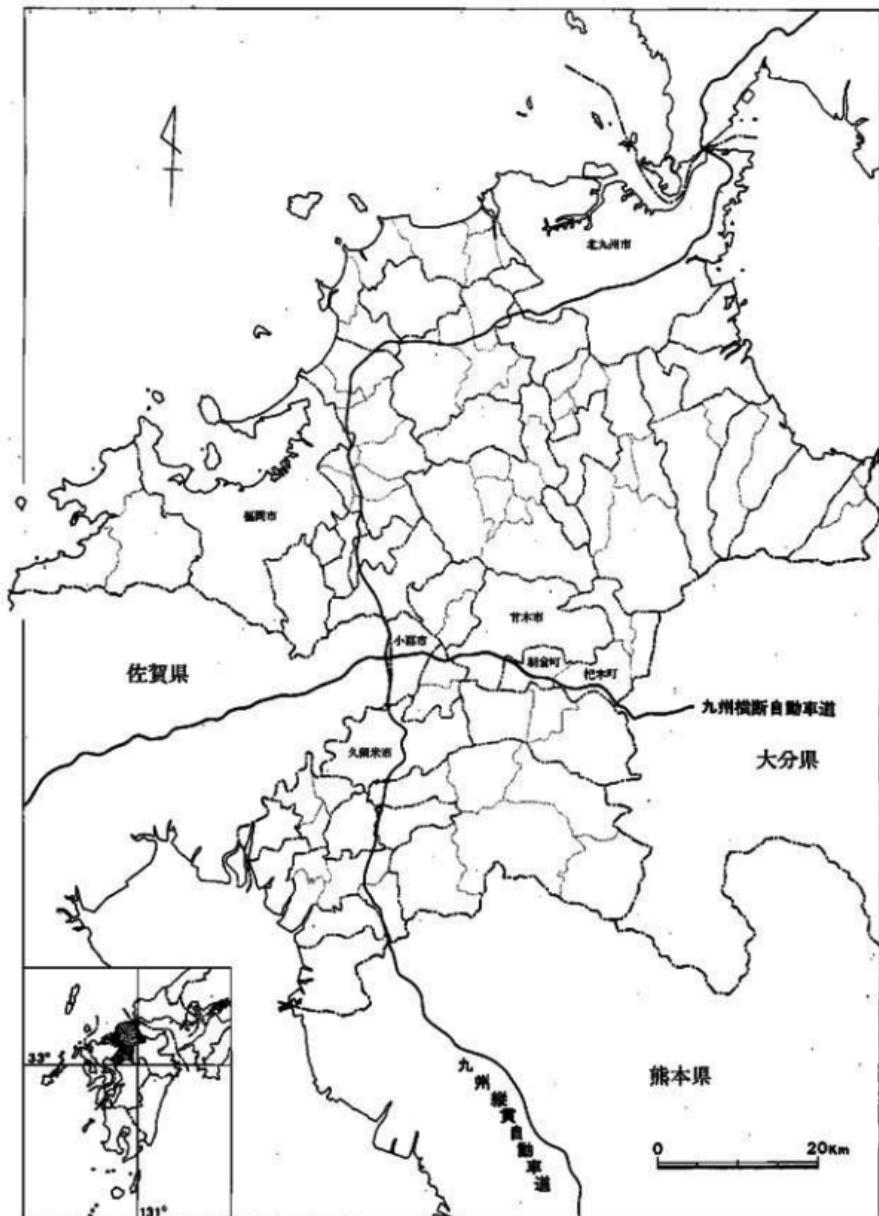
鞍掛遺跡の調査は、昭和61年6月30日から始め8月20日の約2ヶ月間実施した。発掘調査面積は6,450m²であるが、調査時点では発掘用地内には一部未買収地があり、その部分については調査は不可能であったが、重機による表土剥ぎの結果周辺には遺構は存在しておらず、問題は生じなかった。

表土を剥ぎ取った時点で堆土量が多く、調査区域内では処理が困難であるため、鞍掛遺跡と前田遺跡との間約100mに遺跡が所在しておらず、当該地点を堆土置き場とし、ダンプによる搬出方法をとった。しかし、この区域は北側の丘陵の麓に当たり湧水が多く、それに追い討ちをかけるように季節的に梅雨の末期に当たったことから、連日降雨に悩まされ調査の進捗状況は必ずしも順調ではなかった。

調査区の現況は水田で、国道386号線に向かって緩い傾斜をなし、東側にも若干低くなっている。現況図で見る限りでは西側に行くに従って標高が高くなり、調査区の周辺では約2.0m強の比高差がある。このことから、調査区域内は中位段丘上内の微高地の縁辺部に当たっているようだ。

遺構検出が終了し各々の竪穴住居の調査途上で、遺物の取り上げと住居の号数を確定するため1/200の平板測量を実施し、各住居の掘下げと平板測量とを並行しながら調査を進めた。その結果、古墳時代後期の竪穴住居跡18軒、竪穴住居群を囲繞する溝状造構の他、住居群の東側に自然の流路が南北に走る。その他、ピット群は存在するものの、掘立柱建物のような規則的な柱穴は検出されていない。

以上のように鞍掛遺跡は、雨季の真っ只中から調査を開始したため、調査は雨との戦いであった。泥に塗れて調査に参加された作業員と時として援助してくれた職員達の温情で8月20日に鞍掛遺跡の発掘調査は無事終了した。



第1図 九州横断自動車道路線図

前田遺跡の調査経過

真夏の暑さがやっと過ぎ去った9月29日から杷木インターB地点の表土除去作業に着手した。表土下の遺構面はかなり深く、多量の土砂を除去するのに日時を費し、結局発掘作業に取り掛かったのは10月13日である。

徐々に土砂を除去する途中、表土下約1.5m程で暗褐色土に達した。この層はかなりの堆積をしており、発掘区東側でまとまった状態で須恵器、土師器が多量に発見されたため一部遺構の確認を行ったが、結局ピット数個を検出したのみで、おもな遺構は確認されなかった。そしてさらに土砂を除去した結果、発掘区の北側は山裾となり、遺構面はその山裾から南へ緩く傾斜しており、南側では表土から約3m強の深さで、弥生時代の住居跡、獨立柱建物跡、土壙、ピット等が確認された。

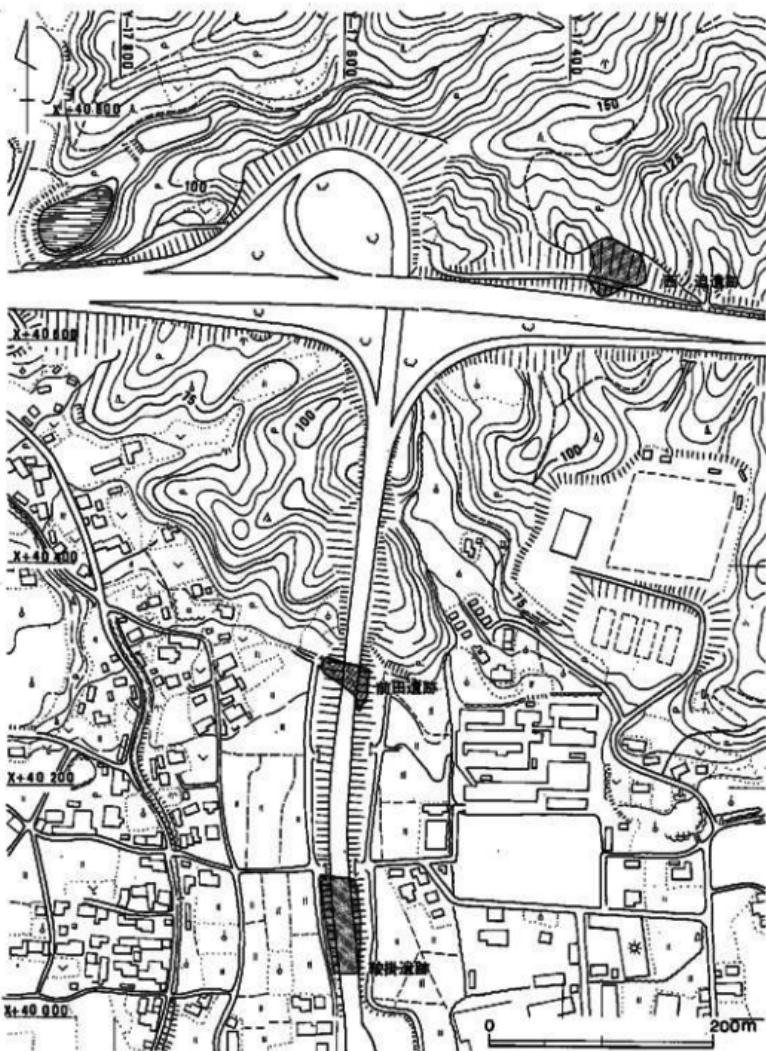
調査に着手してから間もなく第40地点（志波桑ノ本遺跡）において緊急に作業を進めなければならず、10月23日から10月31日までの間一時作業を中断した。再び11月1日より作業員60名で遺構検出に精を出した。発掘区の西半部はピットのみで主な遺構は検出されなかつた。また南側は表土から約3mも掘り進んでいるため湧水が激しく、側溝からの排水作業は毎日の日課となつた。

11月は晴天に恵まれ、調査もほぼ3分の2を終了したため記録作製の準備に取りかかり、11月25日は各班の作業員を動員して空中写真撮影のため遺構面の清掃を行つた。その後実測図の作製を継続する一方、住居跡、土壙、溝等の補足調査等を実施し、12月2日にすべての作業を終了した。

西ノ迫遺跡の調査経過

杷木インター・チェンジの本線部分及び進入路部分については、当初、遺跡調査予定地点としては取り上げていなかつた。西ノ迫遺跡についても、昭和62年早春に現地踏査をして、古墳の石室の石が露出していることから、本調査の必要ありと判断された次第である。この東西両隣の尾根については人力によるトレンチ掘りを行い、全く遺構・遺物を検出することができなかつた。両方ともひどいやせ尾根であったせいもあるが、西ノ迫遺跡と類似する遺構が全く周辺に無かつたことは、かえって当遺跡の独自性を強調するに意味があつた。

調査は、昭和62年4月22日～5月29日までであったが、当遺跡の重要性を確認するために補足的な実測作業もその後実施した。当初、破壊された小古墳1基だけと考えて調査に入ったが、弥生時代後期の環濠を持った高地性集落という思いがけない成果により、調査後まで波及することとなつた。研究者の見学も多く、新聞発表に際しては佐原真・小田富士雄両氏に御教示いただいた。その後、8月30日（日）には水野正好氏に御依頼して、杷木町・杷木町教育委員会と共に文化講演会を町体育館で開催し、講演後に現地と高山・杷木神籠石・日永遺跡を結ん



第2図 各遺跡の位置図(1/5,000)

で烽火の実験を行い、約400名の参加者を得た。その後もNHKテレビの取材に応じて、現地作業員続出の出演と、再度の烽火の実験を行い収録していただいた。それらと平行して保存の協議を継続したが、既に路線の変更は困難な状況であったため、十分な記録保存と、模型作製という形で後世に残すこととなった。また、地元杷木中学校の秋の運動会では「西ノ迫物語」のアトラクションも出され、町をあげての話題となつた。

なお、鞍掛遺跡、前田遺跡、西ノ迫遺跡の調査関係者は、下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	杉田 美昭	庶務	
次長	菱刈 庄二	文化課庶務係長	平 聖峰
総務部長	安元 富次	同 事務主査	長谷川伸弘
管理課長	森 宏之	同 主任主事	川村喜一郎
管理課長代理	佐伯 直		

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	風間 徹	調査	
副所長	西田 功(事務)	文化課調査班総括	柳田 康雄
副所長	中村 義治(技術)	同 技術主査	井上 裕弘
庶務課長	徳永 登	同 技術主査	高橋 章
用地課長	松尾 伸男	同 主任技師	佐々木隆彦
工務課長	後藤二郎彦	同 主任技師	中間 研志
小郡工事区工事長	友田 義則	同 主任技師	小池 史哲
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	同 技師	伊崎 俊秋
朝倉工事区工事長	上野 満	同 文化財専門員	小田 和利
杷木工事区工事長	小沢 公共	同 臨時職員	木村幾太郎
		同 調査補助員	日高 正幸
		同	高田 一弘
		同	武田 光正
		同	佐土原選男

福岡県教育委員会

総括			
教育長	友野 隆	同	平島 文博
教育次長	竹井 宏	同	向田 雅彦
指導第二部長	瀬上 雄幸	同	田中 康信
文化課長	窪田 康徳	同杷木発掘事務所	山下 瑞恵
文化課長補佐	平 聖峰		
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	※は各遺跡の調査担当者	
文化課参事補佐	栗原 和彦		
文化課参事補佐	柳田 康雄		

鞍掛遺跡・前田遺跡・西ノ追遺跡の発掘調査に参加された方々

井手役人	安部亀善	鳥居貞美	丸山啓子	山口由美子	和田誠子
谷口晶子	安高マキ子	井手美貴枝	田中伊津子	因間美枝子	石橋丸子
足立イツエ	安部恵美子	坂本ヨリ子	岩下幸子	鳥居アイ子	財津キヨカ
日吉ツヤ子	日吉キヨノ	日野智恵子	梶原トミエ	田中静夫	伸山宗利
石井律子	伊藤千代香	熊谷ヨリ子	武藤ヒデ子	高倉美智子	津村カズエ
塚本ヤエ子	日吉スミ子	山本チサヨ	青柳美雪	秋吉初代	藤本和子
友納 浩	山下けさ江	井手和枝	井手照子	満生アヤ子	日野マツ子
様村スズ子	井上武雄	小川人巳	梶原俊幸	林 ツユカ	奈須道子
佐藤扶美子	塚本潔子	時川千代子	石井末子	塚本トシ枝	伊藤夏子
小川貞子	藤本公子	野田ミエ	山本フミ子	梶原アヤ子	伊藤ミネヨ
梶原ハヤ子	梶原マツエ	田中サツキ	原田ヨネ		
実測班					
高瀬セツ子	本石セツ子	渡辺輝子	後藤カミヨ	幸田サエ子	矢野静子

II 遺跡の位置と環境

鞍掛遺跡、前田遺跡、西ノ追遺跡の3遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字寒水にあり、字名はそれぞれ鞍掛、前田、クリナラ、尾追にあたる。

鞍掛・前田遺跡は鳥屋山（標高645.8m）を山頂とする山並みから南側に派生する米山（標高590.9m）の南山麓に位置し、筑後川によって形成された低位～中位段丘上にある。米山周辺は筑後川に注ぎ込むように幾つかの狭隘な谷が南北に刻まれている。

遺跡の周囲には筑後川によって形成された河岸段丘が山沿いに走り、段丘上には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が分布しているものの、未調査の遺跡が多くその実態は不明な点が多い。とくに町役場を中心とした段丘上には弥生時代の土器が散布しており、かなりの規模の集落が予想されるが、当時における周囲の生産基盤は低く、数本の谷水田や筑後川と山塊との狭隘な耕地が形成された地域で、必ずしも好条件を具備した地域とは考えられない。

しかし、九州横断自動車道用地内で調査した朝倉町の外之隈墳墓群からは銅鏡3面、装身具、鉄製品が出土し、当該地区が筑後川に接した山塊の斜面に形成され、しかも農耕基盤の脆弱性を考え合わせると、この地域の集団は筑後川の水利権を掌握し、これを強力な副次的な生産手段としていた集団が存在したことが推測される。

九州横断道の発掘調査から朝倉地域に比較して杷木地域は、遺跡が希薄で規模も小さいことが分かっている。このことは前述したように生産基盤の狭隘さに因るものであるが、今回報告した前田遺跡の弥生時代の集落にしろ、鞍掛遺跡の古墳時代の集落は然したる規模ではない。しかし、昭和62年に調査した西ノ追遺跡は、北部九州では数少ない高地性の小規模な集落であるが、環濠を巡らすなど極めて画期的な発見であった。時期は弥生時代の後期後半に比定されており、これに伴う母集団が筑後川の河岸段丘上に形成されていることが想定されると同時に、弥生時代後期のこの地域の社会情勢が一時に緊迫していたことの現れで、地形的に見ても筑後川を挟んで対峙する耳納連山が聳えたり、平野が狭まるとともに、後に杷木の神籠石などのような朝鮮式山城が設営されるなど、この地域は防衛の要衝となっていたことは明らかで、弥生時代社会の緊張状態を知る上でもこの地域は重要視される。今後は西ノ追遺跡の基盤となつた集落の調査に期待したい。

九州横断道路関係で調査した周辺の遺跡は、大谷遺跡、笹原遺跡、夕月・天園遺跡、上池田遺跡、畠田遺跡、楠田遺跡、小党原遺跡、二十谷遺跡、陣内遺跡、上野原遺跡などがあり、今後逐一報告書が刊行され、杷木町の遺跡の内容が徐々にではあるが解明されるであろう。



第3図 各遺跡と周辺の主要道路分布地図

1. 鶴林遺跡 2. 前田遺跡 3. 高ノ須遺跡 4. 山ノ神遺跡 5. 山田古墳群 6. 長岡遺跡 7. 今松遺跡 8. 上ノ森遺跡 9. 萩原山遺跡 10. 梅畠遺跡
 11. 大谷遺跡 12. 本塚古墳 13. 外之馬遺跡 14. 佐木官衙遺跡 15. 中野高遺跡 16. 宝持台ノ木遺跡 17. 宝持岡木遺跡 18. 江南遺跡 19. 大谷遺跡
 20. 箱根遺跡 21. 夕行ノ木遺跡 22. 上足利遺跡 23. 鶴田遺跡 24. 桜田遺跡 25. 小笠原遺跡 26. 二十寺遺跡 27. 佐木神龜石 28. 佐木内遺跡
 29. 上野原遺跡 30. 神山岩野遺跡 31. 村山段々遺跡 32. 北光遺跡 33. 田島柄遺跡 34. 沼井遺跡 35. 日永遺跡 36. 驹生古墳 37. 日岡古墳
 38. 月岡古墳 39. 山田長田古墳群

III 発掘調査の記録

1 鞍掛遺跡の調査

1 遺跡の概要

鞍掛遺跡は、前述したように筑後川の北側に形成された中位段丘上に営まれた古墳時代後期の集落跡で、調査した面積は6450m²である。

遺跡は、九州横断自動車道の杷木インターの進入道路部分に当たり、昭和61年4月の試掘調査では、長さ110mにわたり縄文時代の土器片・磨製石斧・土師器片・青磁片などが出土したことから、縄文時代と古墳時代及び歴史時代の遺構の分布が予想された。当該地の現地表の標高は46.2m~48.0mの範囲に含まれ、北側丘陵の麓で調査した前田遺跡（鞍掛遺跡から直線距離にして200m）の標高は51.0m前後で、北に向かって高位を示す。

本調査での遺構内容は、古墳時代後期の竪穴住居群が大半で、砂層の地山面から掘り込んでおり、地山面の標高は北側で47.50m前後、南側では46.0mを測り、調査区内（長さ110m）での南北の比高差は1.50m前後で筑後川に向かって緩斜面をなす。

検出した古墳時代後期の竪穴住居は、総数18軒を数えるが、調査した部分が集落の東端部に相当し、集落の全容は把握出来ていない。また、竪穴住居群の東側には、南北に延びる溝状遺構が弧状に走り、その一部が集落を囲繞する形で掘られている。この溝状遺構が集落形成当初から掘られていないことは、竪穴住居との重複があり、調査時点で雨天の後かなりの浸水があったことから、集落の形成後ある時点で住居群を囲繞する形で溝を掘り、排水溝の役割を果していたと推測される。

溝内とその周辺はかなりの地層の乱れが認められ、ある時期に溝の流水が氾濫したことを物語っていた。また、竪穴住居の中には火災に遭遇したものもあり、必ずしも平穡無事な集落ではなかつたらしい。

個別竪穴住居では、すべてに造り付けのカマドを有しており、カマドの付設方向も北側・西側・南側と三者三様の在り方を示すが、同方向のカマドを持つ竪穴住居にも重複関係が認められることから、必ずしもカマドの付設方位では同時併存の区別はできない。また、カマドが完全な保存状態で検出された竪穴住居もあり、通常カマドは自然崩壊するか故意に破壊される例が多いことからも、水害に因る短期間の埋没を強く感じさせる。

さらに、ひとつのカマド内から祭祀具が数多く出土したことも注目されるとともに、カマド内で小動物の骨片が出土したことでも注意を払わなければならぬ。

これらの住居の中で、7号竪穴住居は、削平が激しく不明瞭であるが細い溝が囲繞しながら南側へ延びており、周辺の遺構との新旧関係では古い時期の竪穴住居で、当該住居が特別な意味合いを有しているのか、単なる排水状の施設なのか明確ではないが、住居内のカマドから多くの祭祀具が出土している事実があり注意を引く。

敷掛道路



第4図 道路周辺地形図(1/2,000)

試掘調査出土遺物

土 器（第5図）

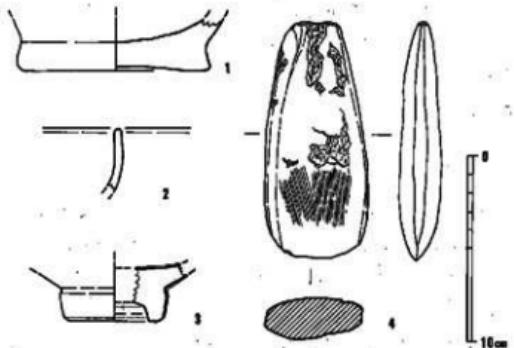
1は第10トレンチから出土した縄文晩期頃の壺の底部片である。胎土は縄文土器特有の粗い胎土を有し、長石・石英・雲母などの細砂粒を多量に含む。色調は橙褐色を呈す。底部径は9.75cmを測る。

2も第10トレンチから出土した土師器の瓶の小破片である。

3は第3トレンチの包含層から出土した青磁の底部片で、器盤が厚く高台部分が高くつくられる。疊付き部は整美に面取りし、釉を搔き取り露胎をなす。胎土は精製され、砂粒は殆ど含まれない。釉調は混濁青灰色を呈する。高台外面は釉が部分的に厚く、全体に施釉は厚い。内外面には貫入が認められる。復原高台径5.4cmを測る。

石 器（図版17、第5図）

4は第7トレンチの地山直上の黒色包含層の最下層から出土した磨製石斧で完形品である。部分的に表面が剥落しているが、整美なつくりである。石材は蛇紋岩の質の悪い石材を使用している。刃部は鋭く研がれ、全長12.7cmを測る。縄文晩期頃の所産であろう。



第5図 試掘調査出土遺物実測図(1/3)

2 造構と遺物

(1) 壺穴住居跡

1号壺穴住居跡（図版3-(1)・(2)、第6図）

調査区の南側、壺穴住居群を囲繞する溝状遺構3の北側で検出した壺穴住居で、住居と溝3との距離は約1.0mしか離れておらず、住居と溝3が同時併存であったか否かは疑問が残る。住居の西側は調査区外のため完掘していない。

平面形状は方形であろう。住居の規模は東壁のみ計測でき一辺が4.0mを測る。壁高は遺存状態の良いところで約20cmで、南側の壁は調査途中で降雨のため崩壊した。支柱穴ははっきりせず西側に2本のピットがあるが、いずれも浅く支柱とはなり得ない。因に柱穴間の距離は2.20mである。床面は砂層のためか硬く締まっていない。床面の下層は北側と東側に溝状の掘り込みがある。

カマドは住居の北壁沿いに付設し、カマドの袖部は明瞭な粘土は使用しておらず、灰褐色の砂質土に若干の灰色粘土を混ぜた土で構築している。カマド内には径が50cmの火床があり、内部には灰と炭化粒が堆積し明瞭な焼痕は認められない。また、カマドの左袖の傍からは1個の川原石を検出したが、カマドに使用したものであろう。

出土遺物は少なく、土器器の壺と壺の小破片がある。

出土遺物

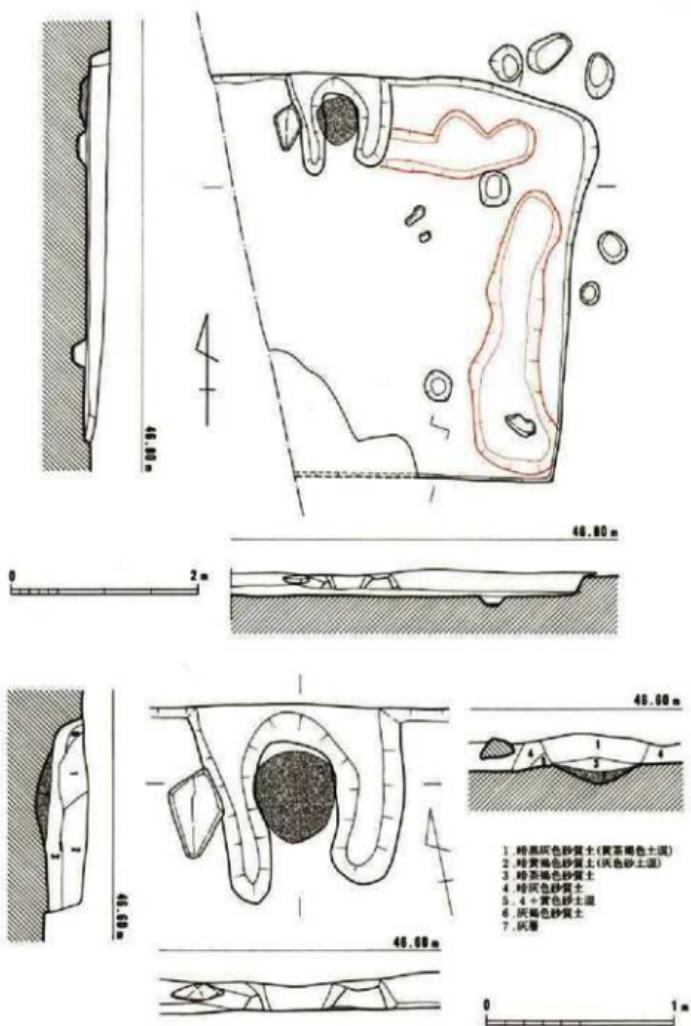
土器（第7図）

土器器 1は住居の覆土中から出土した小型の壺の小破片で復原実測である。鏡く外反する口縁部を有し、肩部は殆ど張らない。調整は外面に荒いハケが残り、内面は横ナデと雜なヘラ削りを施す。外面に二次火熱を受け黒茶色に変色する。復原口径16.0cmを測る。

2は口縁部が内傾するタイプの壺身で、一般に「須恵器模倣土器」といわれている土器である。覆土中から出土した小破片で、口縁部はやや長めにつくられ、蓋受部は明瞭である。このタイプの土器は総じて胎土が精製され、砂粒を余り含まない。色調は淡い橙色を呈する。

2号壺穴住居跡（図版4-(1)・(2)、第8図）

1号壺穴住居の12.0m北側で検出した壺穴住居である。他の住居との重複はなく、平面形状が長方形に近い。住居の規模は東・西辺が3.30m、南・北辺が4.20・4.10m、壁高は5.0cmを



第6図 1号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

軒掛遺跡

測り、やや小形の住居で遺存状態は頗る悪い。床面積は 13.2m^2 である。支柱穴はA・B・Dが規則的に配置されているが、他の1本が検出できていない。しかも、柱の深さは浅い。柱穴の位置としてはCが適切な場所であるが、他の3本が見当たらない。因に各柱間はA-B間が 1.95m 、A-D間が 2.90m を測る。床面の下層は、壁に沿って深さ 10.0cm 、幅が 50.0cm から 90.0cm の浅い掘り込みが巡り、竪穴住居の掘削時に掘り込んだもので、床面の中央部分は台状地山を残している。

カマドは南壁の中央部に付設するが、検出した竪穴住居群の中でカマドを南側に設置する住居はこの1軒のみで、出土土器から見ても併存住居が多く存在していることから、時期差に寄るものでもない。遺存状態は極めて悪く、カマドのプランが不明瞭であるが、実測図の土層断面で観察すると左右の $2 \sim 4 \cdot 7 \cdot 8$ 層が袖の部分に相当する。袖の土質は1号住居と同様砂質土に若干の灰色粘土を混入させた粘着性の少ない土を使用している。

カマド内には川原石を支脚として利用し、それを挟んだ前後には弱い焼痕が認められた。おそらく奥の焼度は煙道に繋がる基底部分で、そのため僅かに凸状を呈しているのであろう。

住居からの出土遺物は少なく、土器は図示不能な土師器の小片と須恵器の壊蓋の破片がある。また、覆土中から弥生時代中期の柱状片刃石斧(石鑿)が出土したが、遺跡内に弥生時代の遺構は確認されていないし、弥生時代の土器も少量出土しているに過ぎない。しかし、出土した石器を観察すると磨耗した痕跡は無く、少なくとも他からの流れてきた遺物とは考え難い。理解に苦慮するところである。

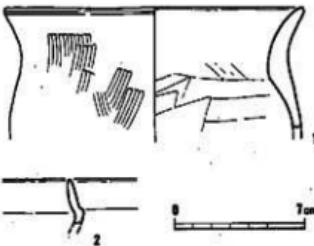
出土遺物

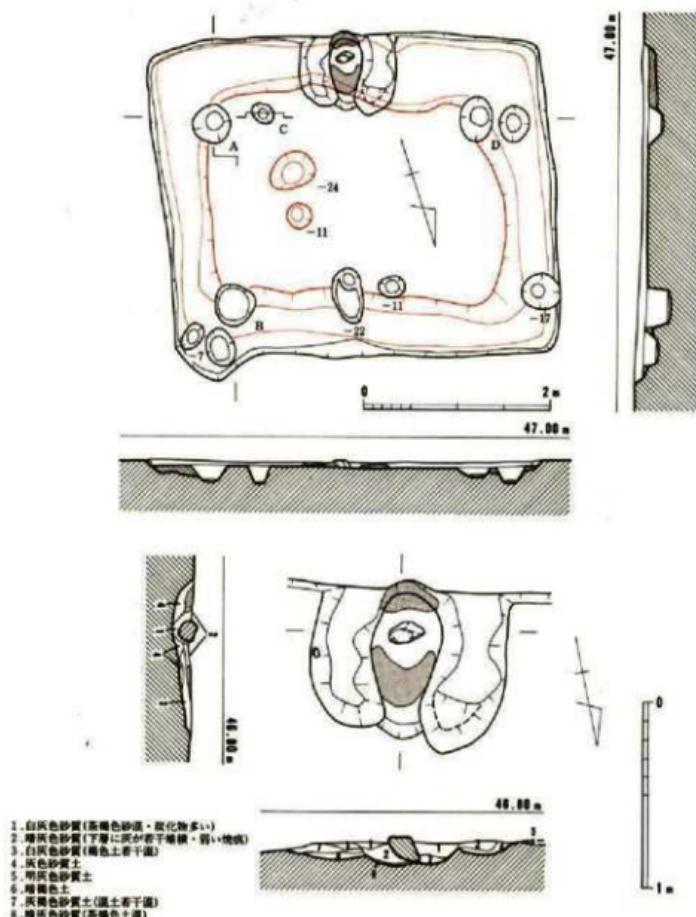
土器(第9図)

須恵器 揭載可能な土器は須恵器の壊蓋が1点あるに過ぎない。胎土は砂粒を含みやや想いが、焼成は堅固で灰紫色を呈する。口縁部を約1/2欠損するが、復原口径 13.2cm 、器高 3.5cm を測る。外面天井部分には部分的に灰をかぶる。床面からの出土で、6世紀後半頃の所産である。

石器(第10図)

覆土中から出土した小型の柱状片刃石斧がある。粘板岩の石材を使用した整美なつくりで、





第8図 2号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

鞍掛遺跡

頭部は整った面取りをし、刃部は銛利に仕上げる。全長9.60cm、幅2.0cm、厚さ1.20cmを測り全面が平滑でつくりは良い。明灰色の色調を呈する。



第9図 2号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/3)

3号堅穴住居跡 (図版5-(1)、第11図)

2号堅穴住居跡の北西側5.0mのところで検出した堅穴住居跡で、溝2と重複し溝より新しい。溝2はおそらく7号堅穴住居を囲繞するようになされた溝7と一緒に溝と考えられるが、途中でとぎれている。

住居の形態は方形を呈しているが、北側の壁は殆ど残っていない。規模は東・西壁辺が3.25m・2.65m、南・北壁辺は3.40m・3.20m、壁高は遺存状態の良好なところで10.0cm前後を測り、やや歪な形状をしている。床面積は9.66m²である。支柱は配置状況から床面内のEを除くA-Fが考えられるが、いずれも深さが10.0cm前後と浅く不明瞭である。柱間ではA-C、D-Fであろう。因にA-Cの柱間は1.75m、A-Dは1.80m、C-Fは2.20m、D-Fは1.95mを測る。

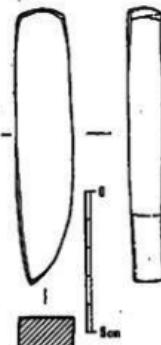
カマドは北壁沿いに付設していたと考えられるが、袖は殆ど残っていない。

遺物の出土状態は掲載した遺物のすべてが床面またはカマドからの出土である。器種は土師器の壺・高坏、須恵器の壺身があるが、高坏の4~6は同一個体の可能性が強い。

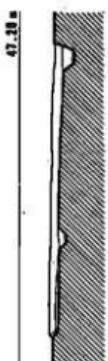
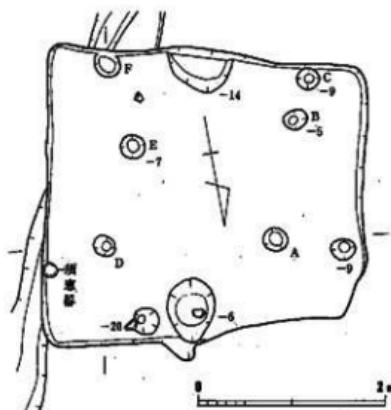
出土遺物

土 器(図版17,第12図)

土師器 壺は1~3がある。1はカマドの右傍から出土したやや大型の壺で、



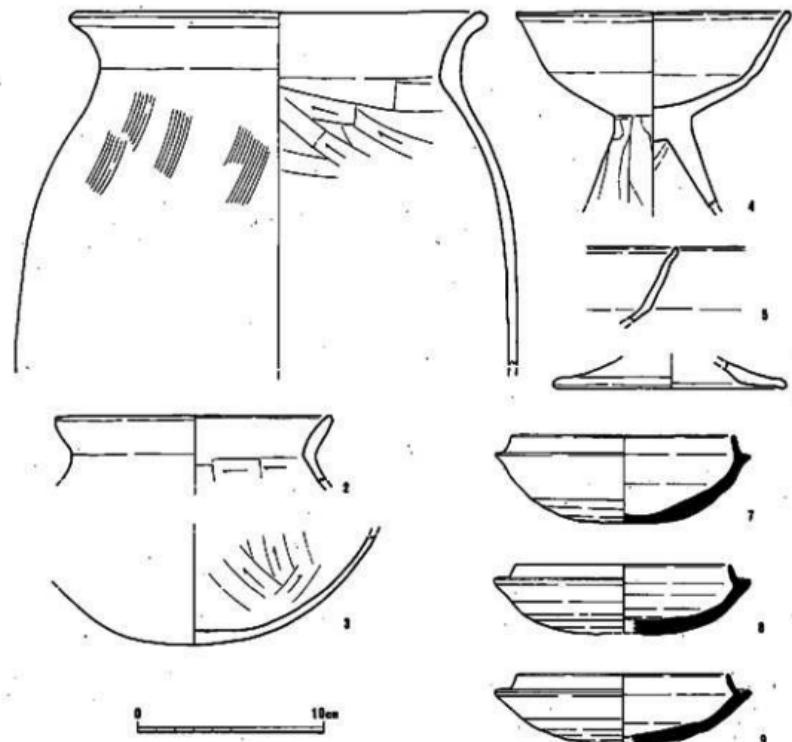
第10図
2号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第11図 3号堅穴住居跡実測図(1/60)

脚部下半を欠損する。この時期特有の緩く外反する口縁に張りの少ない脚部を有す。調整は粗いハケとヘラ削りで仕上げる。出土場所と脚部下半の欠失から、当該時期の住居によく見受けられる壺などの置台と考えられる。口径21.4cmを測る。2・3はカマド内から出土した壺の小破片で、1よりも器壁は薄くつくられる。两者とも二次火熱を受け橙褐色に変色する。2の復原口径14.6cmである。

4～6は高壺の復原実測図で3個体とも同一個体と考えられる。壺部はやや深くつくられ、脚部はスカート状に開き、裾部は強く開脚する。調整は壺部が横ナデ、脚部外面は縱方向のヘラ削り、内面は横ナデで仕上げる。器壁は薄く精製品である。復原口径14.4cm、裾部復原径12.0



第12図 3号竖穴住居出土土器実測図(1/3)

軌跡遺跡

cmを測る。淡い橙色を呈する。

須恵器 7～9の坏身がある。同タイプ同時期の坏身で、7が他の2点に比較してやや器高が高く口縁部の立上がりが鋭い。7は完形品で、8・9は復原実測で前者は1/2・後者は1/4ほど残存する。出土場所は7・8が床面から、9は覆土中からの出土である。法量は7が口径11.7cm、器高4.7cm、8は口径11.4cm、器高3.6cm、9は口径11.2cm、器高3.7cmを測る。

4号竪穴住居跡（図版5-1(2)、第13図）

当該住居が検出された周辺はわりと遺構の調査状況が看られる。竪穴住居の重複関係は5号竪穴住居より古く、溝2より新しい。住居の平面形態は方形である。規模は東・西壁辺が3.55m・3.75m、南・北壁辺が3.60m・4.05m、壁高は北側で20cm弱である。南側の壁は地形が南側に傾斜している関係上流れたためか殆ど遺存していない。復原した床面積は14.32m²を測る。支柱穴は不明瞭で、敢えて取りあげれば北壁隅のピットがあるが構造上問題がある。

カマドは北壁中央部に設置されているが、5号住居に破壊され、カマド周辺に若干の焼土と炭化物が認められた他、カマド内の径35cmの火床が5号住居の床面に僅かに遺存していたに過ぎない。

住居からの出土遺物は土師器の壺、須恵器の坏壠の小破片があるが、坏壠は5号住居に伴う遺物の可能性がある。また、覆土中やカマドが付設されていた周辺などから小形の不明焼土塊が出土しており、この類の遺物は他の住居、特にカマド内やその周辺からも数多く出土している。

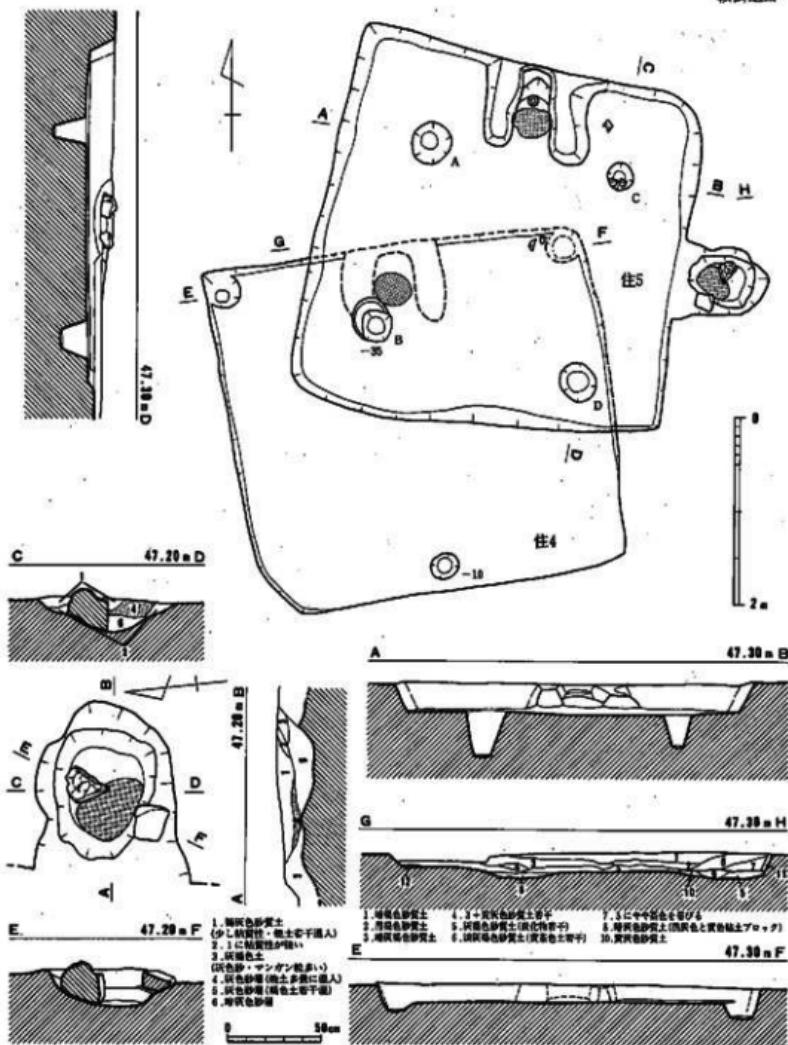
出土遺物

土器（第14図）

土師器 1～3は壺の破片で、いずれも覆土中からの出土である。1は緩く外反する口縁部を有し、頸部内面のヘラ削りと横ナデの稜線が不明瞭である。外面はやや粗いハケで仕上げる。器壁が厚くつくられ、煮炊きに使用された土器であろう。復原口径23.0cmである。2は口縁部が長い特徴を有す壺で「く」字状に外反させる。3は器壁の厚い壺で頸部以下を欠損する。口縁は「ぐ」字状に外反するものの短くつくられ、肩部の張りは少ない。胎土には細砂粒を多量に含み粗い。覆土の上層から出土した。

須恵器 4の坏壠の小破片があるが、5号竪穴住居出土の14の須恵器の坏壠に酷似しており、5号住居の流れ込みと考えた方が良い。

破壊跡



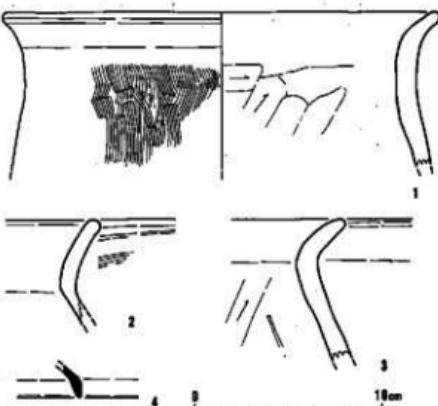
第13図 4号・5号竪穴住居跡・カマド状造構実測図(1/60・1/30)

軸掛遺跡

不明土製品（第15図）

土製品には1～4がある。形は定型化したものは無く、ある種の製品として認められる遺物ではない。しかも、すべてが焼成されており、単なる粘土塊でもない。この種の遺物を土器製作時における「削りカス」との考え方がある。確かに焼土塊を観察すると一方が面をなし鋭利なもので削られたような痕跡もあるが、単なる小土塊のような形状もあり一様ではない。掲載した1～4の内、明瞭な面を有するのは2・3で、

このうちの3は一方の面が平滑となる。出土した4個体の胎土は酷似しており、表面を多く含み非常に精製されている。上記の考え方方に別すれば、精製土器か土製模造鏡のような祭祀具の原材料の残りカスとも考えられる。出土場所は、1・2・4が覆土中から出土し、3は床面下層から出土した。

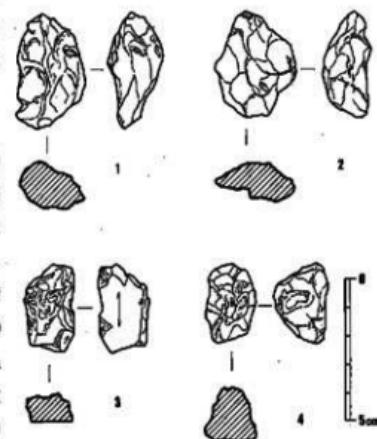


第14図 4号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)

5号竪穴住居跡(四版5-(2)-6-(1)-(2)、第13・16図)

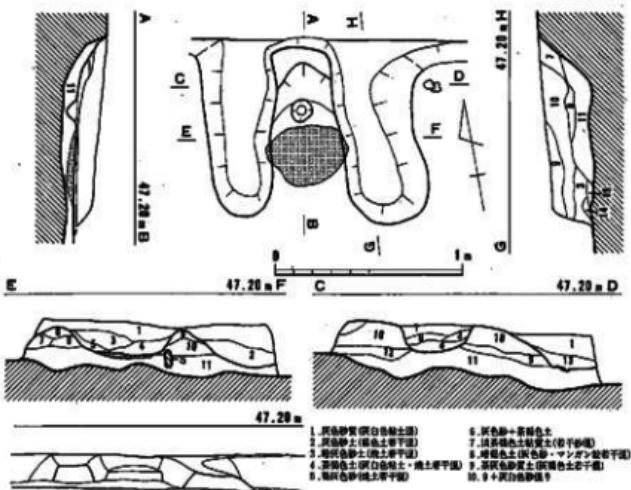
4・6号竪穴住居跡と重複した住居で、新旧關係は5号→4号・6号住居の順で、4号と6号は明確ではない。住居の平面形態は方形であるが、西壁辺がやや長く若干歪である。規模は東・西壁辺が3.50m・3.90m、南・北壁辺は4.00m・3.70m、壁高は深い箇所で30cm前後、南側では5.0cmと浅い。住居の床面積は13.28m²を測る。支柱穴はA-Dの4本で規則的に掘られている。各々の柱間はA-Dの4本で規則的に掘られている。各々の柱間はA-B・A-Cが2.05m、B-Dが2.25m、C-Dが2.20mを測る。床面は砂質層のわりには硬く踏み締められている。

カマドは北壁の中央に付設しているが、当該住居のみ東側の壁の外側に別のカマド状遺構を伴っている。まず住居内のカマドから説明すると、カマドの両袖は明瞭な粘土は使用しておら



第15図 4号竖穴住居跡出土土製品実測図(1/2)

ず、砂質土と灰色粘土とを混在させ整体をつくっている。図示した土層図で見るところC-D線の9・10・12層とE-F線の6・7・8・9・10層が袖の部分に当たる。下層の11層は住居を掘削する時点での掘り込み面で、茶灰色砂質土で埋土している。右袖



第16図 5号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

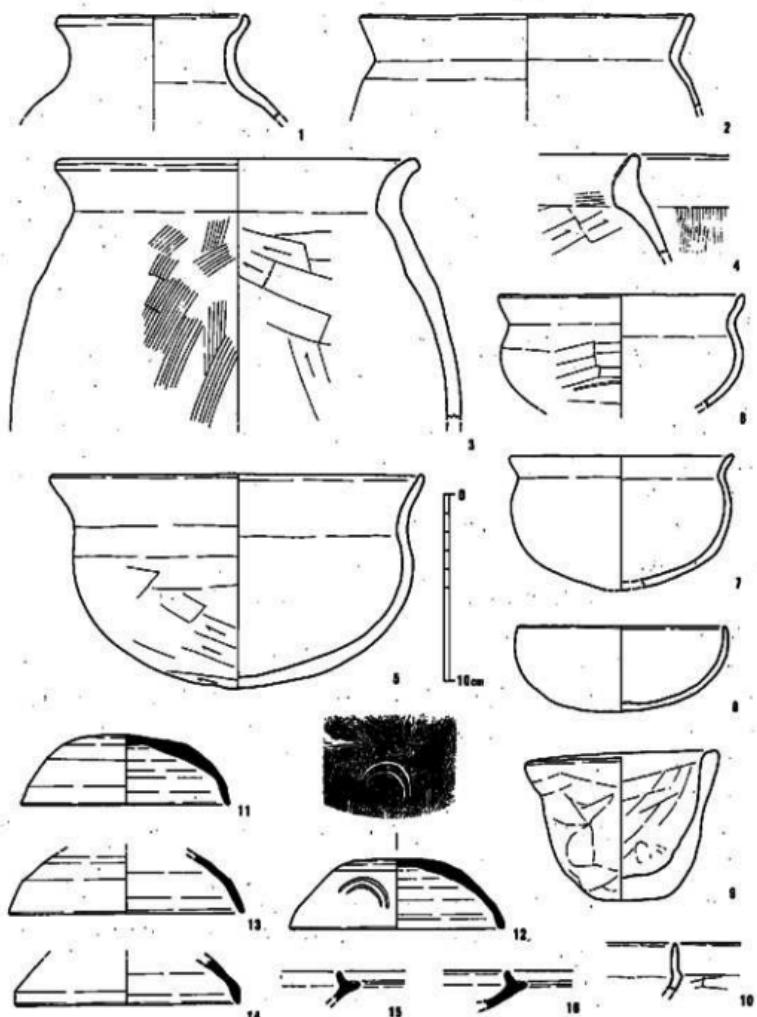
の10-11層間に自然石を立てており、推測を深めるとカマド構築時の目安としたことも考えられる。カマド内には梢円形の火床が残っており、中には焼土と灰が薄く堆積していた。また、中央部分には支脚の抜去痕が残っていた。

東側のカマド状造構は竪穴住居のプランの外側に付設され、発掘時点では住居とは無関係の造構と考えていたが、図示した土層図で見る限りでは竪穴住居の壁の掘り込み面とカマド状造構の掘り込み面(A-B線の第5層)が一連の層位をなし、当該住居に付設された造構であることが判明した。

カマド状造構は不正円形の掘り鉢状の穴を掘り、その中に焼痕の認められる花崗岩の石塊と半裁した川原石を置いていた。その周辺には焼土が堆積し火床を形成し、その上層には焼土が僅かに混在した褐色砂質土が堆積していた。しかも、カマド状造構の南側には1個の川原石があり、この石も造構の一部に使用されていたことが考えられる。何れにしても通常のカマドとは異なった使用目的があったと推測される。当該造構内からは、須恵器の坏蓋が出土している。

遺物の出土状態は覆土中と床面上から出土したが、北側カマド周辺で多く出土し、支柱穴内からも完形品が出土している。器種は土師器の壺・甕・精製の鉢・粗製の小型鉢・椀、坏身、須恵器の坏蓋・坏身の他、不明土製品がある。

裝飾遺跡



第17圖 5號整穴住居跡出土土器實測圖(1/3)

出土遺物

土器(図版17、第17図)

土師器 1は壺であるが、この時期の土師器の壺は極めて稀である。口縁部を僅かに内湾させ、肩部は張りを有す。調整は磨耗してはっきりしない。胎土は精製され、淡橙色を呈する。復原口径9.8cmを測る。カマド右傍から出土した。

壺は2~4の3タイプがある。2は「く」字状に外反する口縁を有する壺で、器壁を薄く仕上げている。復原口径17.7cmで、胎土は精製され、淡橙色を呈する。3は器壁の厚い壺で、口縁部を反り気味に外反させる。調整は粗いハケとヘラ削りで仕上げる。胎土もやや粗く、橙褐色を呈する。復原口径18.8cmを測る。4は短い口縁部を厚くつくり、内面はヘラで削り稜線を明瞭にする。外面は非常に粗いハケで仕上げる。黒灰色を呈する。

5~7・9は鉢形土器である。9を除くこの種の鉢も稀で一見古式土師器の感を受ける精製品である。大小の2タイプがある。5はやや大型の鉢の完形成で口縁を長くつくる。腹部は扁平球状で底部は尖り気味である。口径19.6cm、器高11.3cmを測り、支柱穴内から出土した。6・7は小型の鉢でいずれも器壁を薄くつくる。口縁部は短く、6は内湾気味に、7は反り気味につくる。前者はカマドの右傍から出土し復原口径13.0cm、後者は復原口径11.8cmで床面から出土した。9は小型の粗製の鉢で、手捏土器風である。口径9.9cm、器高7.6cmを測る。床面から出土した。

8は焼で1/2が残存する。この土器も精製品で器壁を薄くつくる。復原口径11.0cm、器高4.5cmを測り、カマド右傍の床の下層から出土した。

10はカマド右袖内から出土した壺身の小片である。

須恵器 11~14は壺蓋で、11は住居の東側のカマド状造構内から出土した壺蓋で完形成である。天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ、口径11.0cm、器高3.75cmを測る。二次火熱を受け赤茶灰色に変色する。12はカマド右傍から出土したほぼ完形の壺蓋で、体部は直線的で口唇部は肥厚する。体部外面には二重の山形状のヘラ記号を刻む。口径11.2cm、器高3.7cmで、黒灰色を呈する。13・14は小破片で、前者は東側のカマド状造構の傍から出土した。13は復原口径12.5cm、14の復原口径は11.8cmを測る。

15・16は壺身の小片である。いずれも覆土からの出土である。

不明土製品(第18図)

当該住居からは焼土塊が6点出土している。既に胎土は精製され、雲母が多く含む。色調も同一で淡い赤黄色を呈する。焼成も堅固である。1はカマド内から出土したもので、断面が割りカスのような形状をなす。2は覆土中からの出土で、ところどころに砂粒と雲母が付着する。

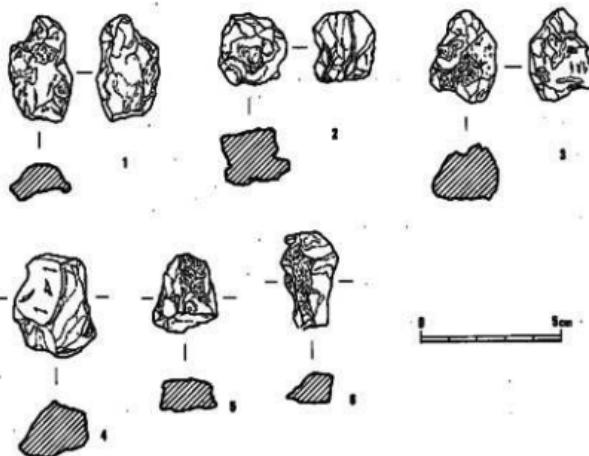
鞍掛遺跡

また、一方の面には植物繊維状の圧痕が残る。

3はカマドの壁体内から出土した。4はカマド右付近から出土し、一方の面が

凹面をなし平滑である。また、胎土は灰白色であるが全体に淡赤色の化粧土が付着する。5・

6は1つの面に砂粒と雲母が多く付着する。

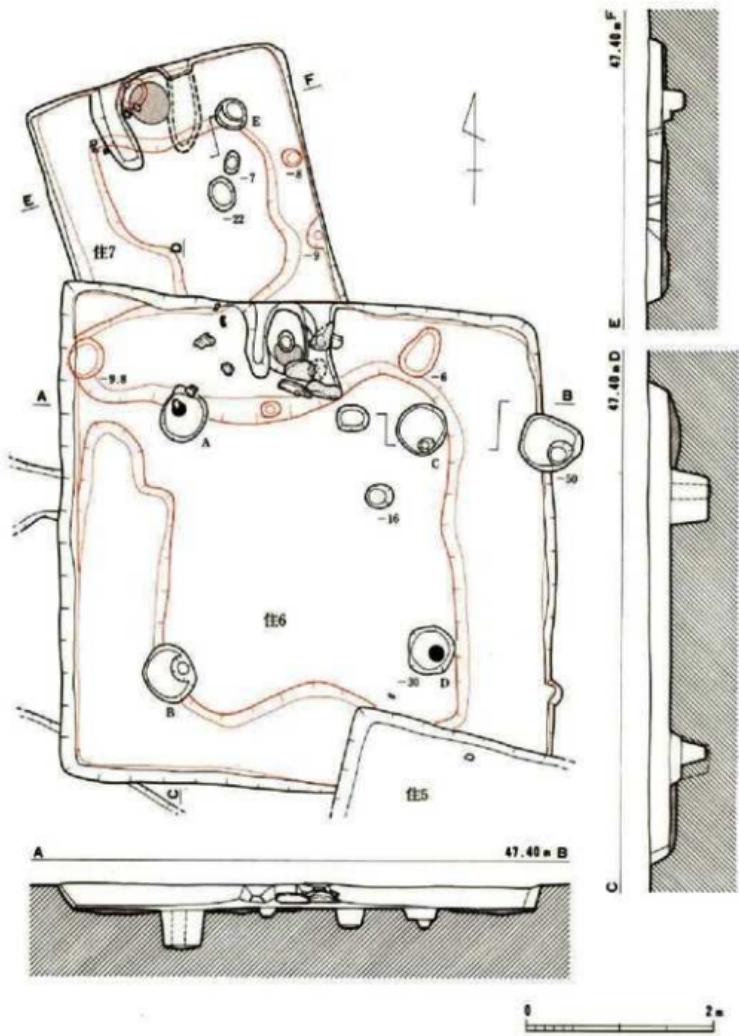


第18図 5号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)

6号竪穴住居跡(図版7-(1)・(2)、8-(1)、第19・20図)

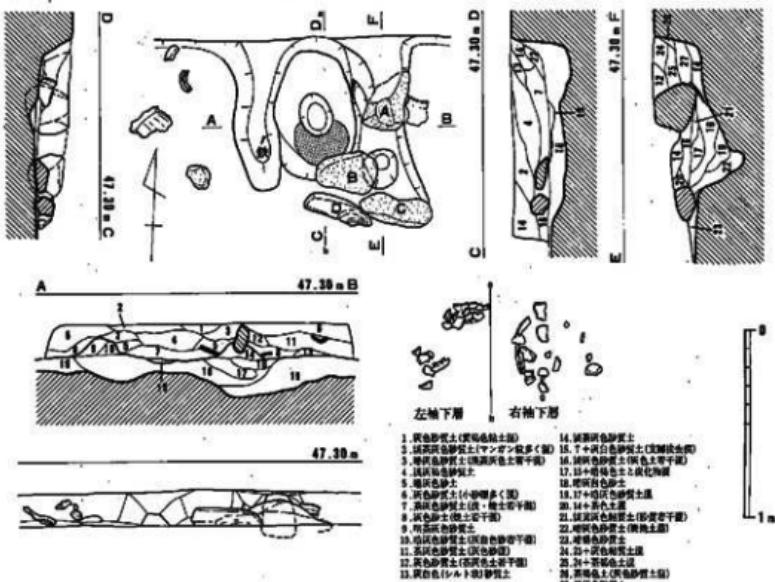
調査した範囲内で最大規模を有す竪穴住居跡で、3軒の住居と溝7とが重複関係にある。新旧関係は5号→6号→7号・12号住居、6号→溝7の順である。住居の平面形状は方形を呈し、規模は5号住居と重複した部分を復原すれば、東・西壁辺が5.05m、南・北壁辺は5.25m・5.10m、壁高は20cm強を測る。床面積は25.09m²である。支柱はA-Dの4本で、住居の規模に比例して掘方も大きい。各柱間はA-Bが2.75m、A-Cが2.56m、B-Dが2.70m、C-Dが2.20mを測り、C-D間が短い。床面下の住居の壁沿いには、住居の掘削時に掘られた幅1.00m前後の浅い掘り込みを巡らし、その部分は貼り床となる。床面の中央部分は地山をそのまま床面とする。

カマドは北壁の中央部分に設置し、右側の袖はかなり擾乱され、花崗岩(A~C)と山石(D)が散在していた。花崗岩は強い熱を受けていたせいか風化が激しく、原形を留めていない石もあった。図示したA~Dの内元位置を保っているのはAのみで、この石は袖の補強に使われたと考えられる。Bは倒壊しているが袖の下層にピットが掘られており、本来はこのピット内に立てられA同様補強材としての用途があったものと推察される。Cは袖の先端にあり完全に床面下に埋められていた。Dは異なる石材であるが何処に使用されていたか不明である。



第19図 6号・7号竪穴住居路実測図(1/60)

鞍掛遺跡



第20図 6号竪穴住居跡カマド・両袖下層出土遺物実測図(1/30)

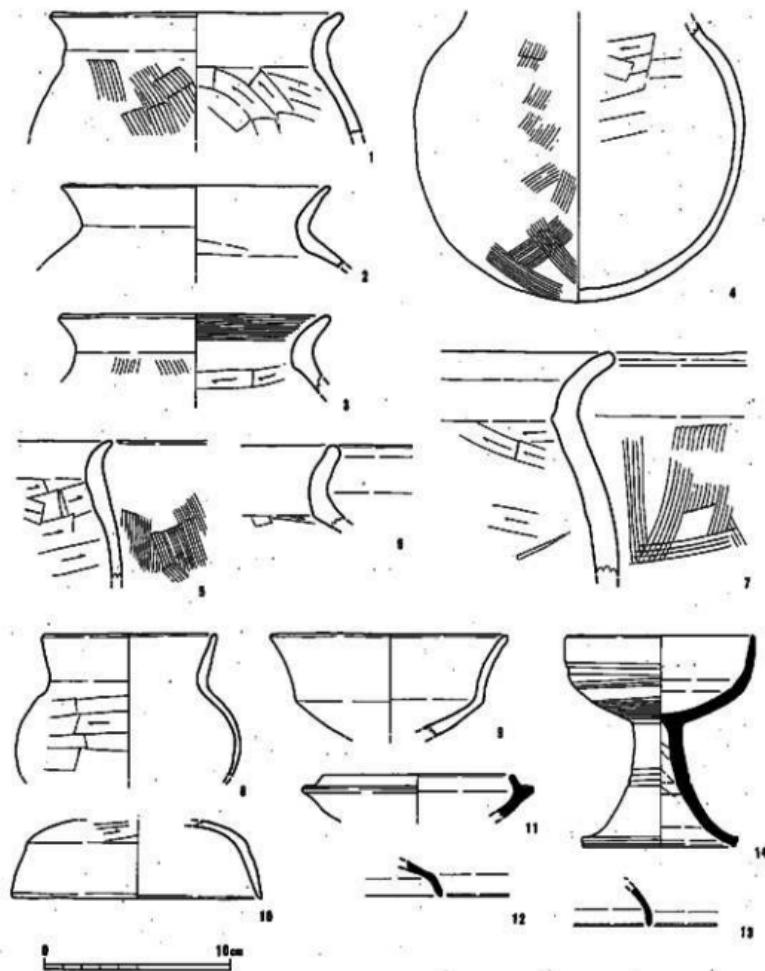
しかし、左側の袖は全く石の補強材は使っていない。一方の袖にのみ補強材を使用することの意義が理解できないが、考えられる理由としてはカマドの補修の可能性がある。袖は他のカマド同様明瞭な粘土は使っておらず、砂質土に若干の灰色粘土を混在させた土質で構築する。カマド内の中央には23.0cm×18.0cmの支脚の抜去痕がある。おそらく川原石を支脚として使用していたのであろう。

カマド内からの出土遺物は土師器の高壺の破片があり、右袖内からは小動物の骨（鳥骨？）が出土した。カマドで焼いて食していたのであろう。カマドの袖下層からは土師器の壺・壺破片の他、石塊が出土した。カマドの基礎の補強材としたものであろう。住居からの出土遺物は土師器の壺・小型壺・高壺・壺・須恵器の壺身・壺蓋・壺破片の他、不明土製品、鐵器がある。

出土遺物

土 器 (図版17-18、第21図)

土師器 壺は1~7がある。1は反り気味に上方に外反する壺で、3・6も同タイプである。



第21图 6号竖穴住居出土土器实测图(1/3)

鞍折遺跡

調整は外面に粗いハケを使用し、内面はヘラで削る。1の復原口径は15.4cmを測り、カマド袖内下層から出土した。2は頸部が縮まり、上方に外反する口縁部を有し、肩部は強く張る。復原口径14.2cmで、1と同様カマド袖の下層から出土。3はカマドの右傍から出土し、復原口径は14.0cmを測る。4は口縁部を欠失する。肩部から胴部にかけては球形をなし、1/2が残存する。調整はハケとヘラ削りで仕上げるが、形態的に他の壺と異なる。カマド袖内と下層から出土した破片が接合した。5は口縁部を僅かに外反させ、肩部から胴部にかけては直線的である。7は器壁の厚いや大振りの壺である。

8は小型の壺で底部を消失する。口縁部は若干内湾させ、器壁は薄くつくる。胴部は扁平球状をなし、胴部外面にはヘラ削りが残る。口径は9.2cmを測り、精製品である。Aの支柱穴から出土した。

9はカマド内から出土した高壺の壺部片で、1/2が残存する。口縁部を長くつくり、壺部は深い。器壁は薄く、精製された高壺である。復原口径12.4cmである。

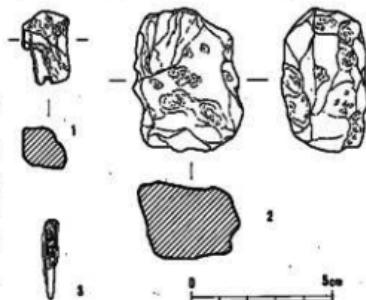
10はカマドの袖下層から出土した壺の破片で、底部にヘラ削り痕が残る。復原口径13.4cmを測る。

須恵器 11は壺身の復原実測である。口唇部から体部にかけては厚くつくられ、復原口径10cmである。12・13は壺蓋の小破片で、覆土中から出土した。

14は高壺で口縁部のみ1/2欠損する。床面からの出土である。壺部の中央には凹線が巡り、底部外面にはカキ目を施す。脚の柱状部は細く、中心部には2条の凹線が巡る。裾部は緩く開脚し、端部は肥厚させ凹線が巡る。内面には絞り痕が残る。復原口径9.8cm、裾部径8.9cm、器高10.3cmを測る。

不明土製品（第22図）

1はカマド袖下層から出土した不明土製品である。胎土は他のものと同様極めて精製され、硬く焼けている。2は支柱穴内から出土した。長方形を呈し、長さ5.0cm、幅は3.6cm、厚さは2.8cmを測り、この種の遺物としては大きい方である。胎土は他と同一であるが焼きが甘く、灰白色を呈する。



第22図 6号竖穴住居跡出土土製品・鉄器
実測図(1/2)

鉄器（図版18、第22図）

3はカマドの検出面の左袖上から出土した鉄錆の基部分で先端部を消失する。基部は尖り、部分的に木質が残る。カマド上部が破壊された段階での流れ込みの可能性が強い。

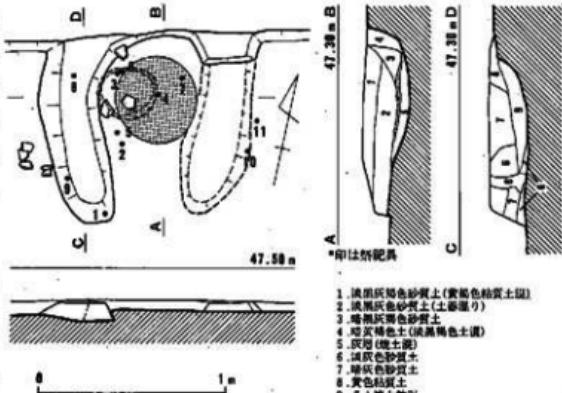
7号竪穴住居跡（図版8-(2), 9-(1)・(2)、第19・23図）

6号竪穴住居に切られて検出した竪穴住居跡で、約2/3が遺存している。住居の周囲には幅の広い箇所で70cm、狭い箇所で30cmの浅い方形の溝状遺構が廻続し、その先端は南西側の発掘区外に延びる。この溝は重複するすべての住居より古い。住居と溝の位置関係は方形の溝の対角線状と住居の主軸がほぼ一致している。溝の深さが4.0~5.0cmと浅くかなりの削平を受けていると考えられる。

住居の平面形状は方形であろう。規模は北壁辺が計測でき2.80m、壁高は15.0cm前後を測り小形の竪穴住居である。支柱穴はEの1本を検出したが、他の支柱穴は検出できていない。壁沿いの床面は、6号住居と同様住居の掘削時に浅く掘り下げ、その部分は貼り床とする。

カマドは北壁に設置し、袖は暗灰色砂質土に若干の灰色粘土を加え、部分的に黄色粘土を使用していた。右袖は大半が破壊されていた。カマドの床面には径が40cmの火床が認められ、中には壺の小破片が僅かに残っていた。

また、カマド内、袖内、周辺の一定のレベルから土製の勾玉・小玉・小型の焼土塊が出士した。出土レベルは床面上か床面下にあり、特定の場所、例えばカマド内などには限定されない。このためカマドを設置する範囲内に祭祀具を撒いた後にカマドを構築したと推測される。



第23図 7号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

出土遺物は、祭祀具・焼土塊の他に土師器の壺・椀、須恵器の坏身片があるが住居に共伴する土器か否かは不明。

出土遺物

土器（第24図）

土師器 1~3は壺の小破片である。1の壺は短い口縁部を上方に外反させ、肩部は強く張る。しかも器壁を厚くつくる。調整は口縁が横ナデ、外面がハケ、内面はヘラで削る。胎土は

鞍掛遺跡

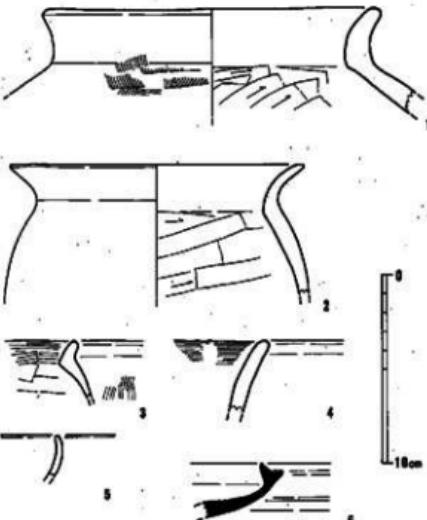
やや粗く、復原口径17.5cmである。

覆土中からの出土である。2はカマド右袖から出土した小型の壺の小片である。「く」字状に外反する口縁部にやや張る肩部を有す。肩部から胴部にかけては器壁が厚い。復原口径15.8cmを測る。3は短い口縁で外反度の緩い小型の壺である。

4は瓶の口縁部片と思われるが小片のため不明瞭である。

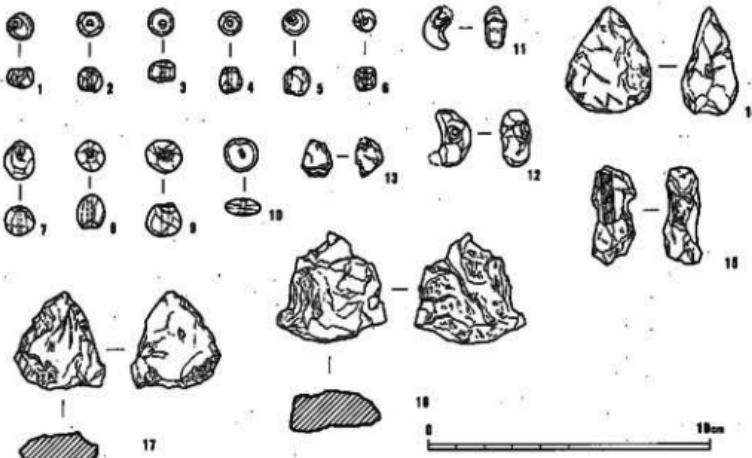
5は碗の小破片で、精製品であるが小片で不明瞭である。

須恵器 6は須恵器の坏身の小破片で、カマドの左袖内から出土したが、混入の可能性がある。



土製品(図版18、第25図)

第24図 7号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第25図 7号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)

土製品には土玉・勾玉などの祭祀具の他、不明土製品がある。すべてカマドを中心に出土している。各々の土玉は形状が一様ではなく、扁平なもの、球状なもの、算盤玉状のものなどがあり、孔は雑に穿っている。また、13の様な未製品とおぼしき小粘土塊もある。

勾玉は11・12の2点がある。11は取り上げ番号NO 3でカマド内の下層から出土した。極めて小型の勾玉で、頭部を欠損している。12は取り上げ番号

NO 1で左袖内の先端から出土した。11に比較してやや大きく尾部を欠く。両者の胎土は土玉と同一の粘土を使用している。

不明土製品は14~17があるが、すべてカマドとその周辺から出土している。14は形状が三角形を呈し、胎土は極めて精製され、焼成も堅固である。長さは3.6cmを測る。15は不整形な焼土塊で、一面に幅4.0mmの薙の圧痕が付着する。胎土・焼成は14と酷似する。16はカマドの袖内から出土した不明土製品で、胎土に砂粒と雲母を多く含む。赤灰色を呈する。17もカマド袖内から出土した三角形の形状の土製品で、胎土に多くの雲母を含んでいる。

8号堅穴住居跡（図版10-(1)・(2)、第26図）

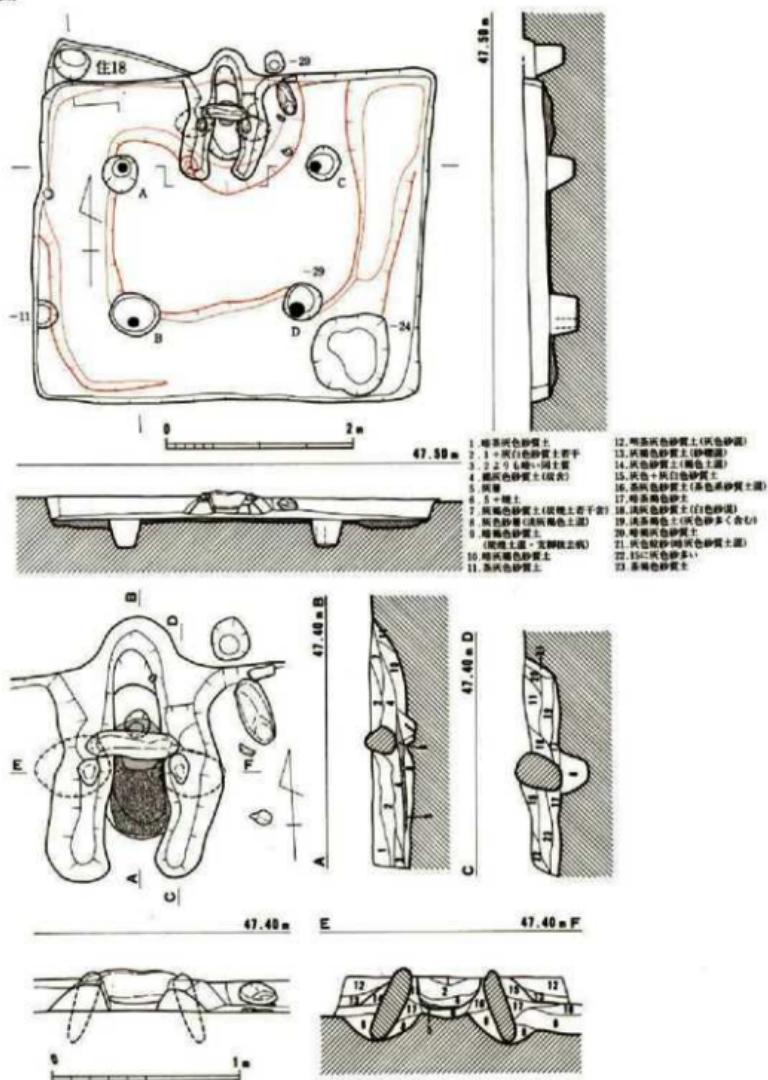
6号堅穴住居跡の北東隅で検出した住居跡で、18号堅穴住居と溝2（溝7と同一の溝）と重複しこれより新しい。平面形態は方形を呈し、住居の規模は東・西壁辺が3.45m・3.30m、南・北壁辺は4.10m・4.20m、壁高は20cm~25cmを測る。床面積は13.45m²である。支柱穴はA-Dで、各柱間はA-Bが1.65m、A-Cが2.05m、B-Dが1.75m、C-Dが1.55mを測り、やや不規則な配置である。南東隅には深さ24cmの不整円形の屋内土壇が掘られており、屋内土壇を具備している住居はこの1軒のみである。床面の下層は中央部分を除いて住居の掘削時に浅く帶状に掘られている。

北側の壁には袖の長い「U」字状のカマドが設置され、奥壁は住居のプランに対して突出し上部に煙り出しがあったことが推測される。その右側には小ピットがあるが、煙り出しを挟んで対峙する場所には無い。左右の袖の中央には川原石を埋め込み、その頭部が僅かに露呈している。その傍には長い川原石がカマドの火床の面にまで落ち込んでおり、袖内の両方の埋め石の上に橋渡しをし、カマド内に埋め込んでいたと考えられる。図示した断面図で見ると、カ

第1表 土玉計測表 (単位cm)

No	長径	短径	厚さ	胎土	焼成	出土場所	取上場所
1	0.9	0.9	0.65	精製	良好	袖基部	No. 10
2	0.9	0.8	0.8	*	*	袖下層	No. 8
3	0.9	0.9	0.8	*	*	袖下層	No. 9
4	0.8	0.8	0.9	*	*	右袖下層	No. 11
5	0.9	0.85	1.0	*	*	カマド内	No. 6
6	0.8	0.7	0.8	*	*	カマド袖内	不明
7	1.3	1.05	1.0	*	*	カマド内	No. 4
8	1.1	1.0	1.1	*	*	カマド下層	No. 7
9	1.2	1.03	1.1	*	*	カマド下層	No. 2
10	1.2	1.1	0.6	*	*	カマド袖内	不明

軒掛遺跡



第26図 8号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

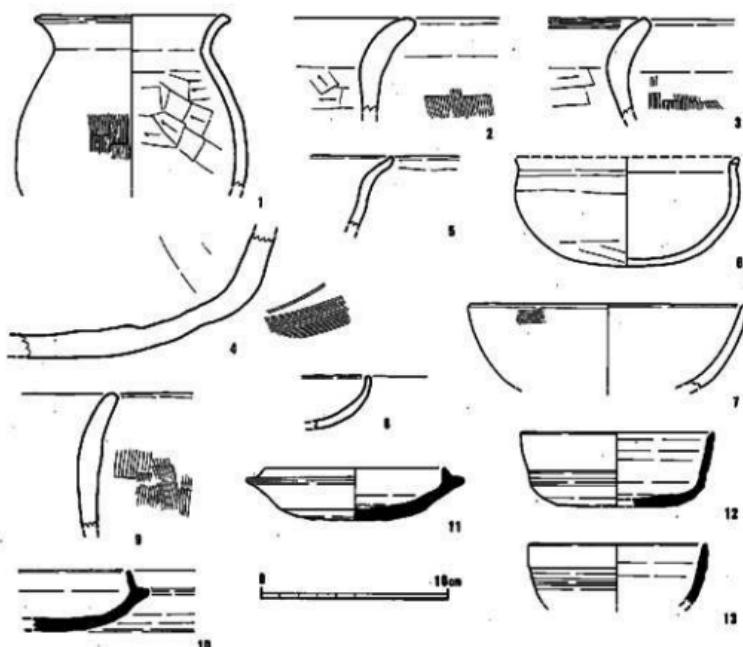
マドの構築以前に川原石を埋め込むためのピットを掘り、それに沿って8層の灰色砂質土、17層の暗茶褐色砂土を床面下に積上げ14層～16層の若干粘質性のある灰色砂質土で袖の部分を構築している。カマド内の最終使用面には薄く灰と焼土が堆積し、火床を形成している。火床の下層には川原石を使ったとみられる支脚の抜去痕がある。また、カマドの右傍には梢円形の川原石があるが、これもカマドに使用されていた石の可能性がある。

出土遺物は土器類の甕・碗・瓶、須恵器の坏身の他、不明石器、不明土製品、鉄器、小動物の骨片（カマド左袖出土）などがある。

出土遺物

土 器（図版18、第27図）

土器 1～5は甕の破片である。1はやや小型の甕で、1/4が残存する。口縁は反り気味



第27図 8号竪穴住居出土土器実測図(1/3)

駆掛遺跡

に外反し脇部の張りは鈍い。外面に細かいハケ、内面は粗くヘラで削る。復原口径9.6cmを測り、二次火熱のためか黒褐色を呈する。2・3は同様な型の破片で、器壁は厚く口縁の外反度は鈍い。4はカマドの右側から出土した壺の底部片で、器壁を厚くつくり煮炊きに使用したためか外面に焦が付着する。5は器壁の薄い小型の土器で、鉢の破片の可能性もある。

6は短い口縁部を有す鉢で、口唇部を欠損する。脇部は扁平な半円球を呈し、器壁の薄い精製品である。調整は脇部外面がナデ、底部はヘラで削る。淡橙色を呈する。

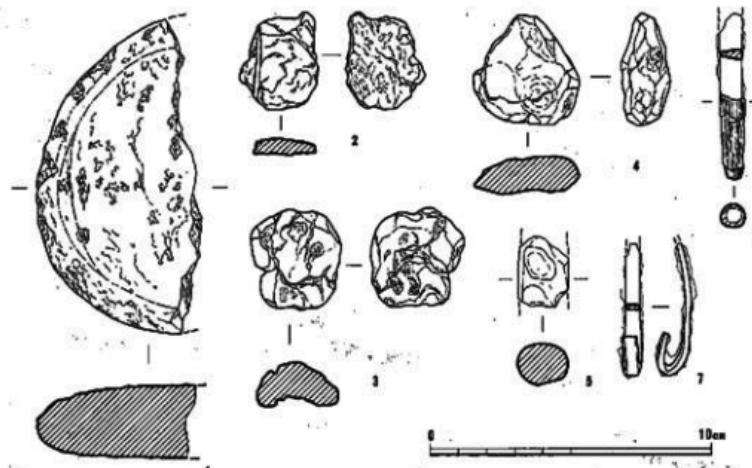
7・8は碗の破片で、7は深く、8は浅くつくる。共に精製された粘土を使用している。7は復原口径14.8cmでカマドの右側から出土した。8は北西の床面から出土した。

9は瓶の小破片であろう。外面にハケ目が見られる。

須恵器 10・11は蓋受のある坏身で、10は破片であるが11より一型式古い。11は住居の覆土上層から出土した土器で、12・13の壺とセットになり坏蓋の可能性もある。いずれも覆土の上層から出土しており、流れ込みの可能性が強い。11の口径9.4cm、器高2.8cmを測る。12は復原口径10.2cm、13は復原口径9.4cmを測る。

石 器（図版18、第28図）

1は住居の覆土中から出土した花崗岩の石材を使用した不明石器で、約1/2が欠失している。全面が風化し表面の凹凸が著しい。使用痕は表裏と側面に痕跡があるが何に使用したかはつき



第28図 8号竪穴住居跡出土石器・土製品・鉄器実測図(1/2)

りしない。部分的に二次火熱を受け淡く変色している。

不明土製品（図版18、第28図）

不明土製品は2～5がある。2は扁平な形状を呈し、胎土は精製され雲母を多く含む。一方の面には砂圧痕が残る。カマド左傍から出土した。3は断面凸レンズ状の不明土製品で、精製された粘土であるが、焼成が甘く灰黒褐色を呈する。4はカマドの煙道近くで出土した土製品で形状が三角形を呈する。二次火熱を受けているためか脆く表面がざらついている。5は断面が精円形（1.8cm×1.4cm）を呈する小片で、一方の端部が凹面をなす。用途は不明である。

鉄器（図版18、第28図）

鉄器は2点あるが、いずれも覆土中からの出土である。6は鐵錆の破片と思われ、切先部を欠損する。茎部には長さ3.0cmほど木質が残っている。木質部分の断面形は円形で、その先端は三角形を呈するが、この部分は刃部を研ぎ出していないことから鎌とした。茎の先端は細くしかも面を取る。現存長5.9cmである。7は何かの締め金具と考えられるがはっきりしない。現存では一方の先端を「U」字状に折り曲げ、もう一方は折れている。現存長は4.7cm、幅は5.5mm、厚さ2.0mmを測る。

9号竪穴住居跡（図版11-(1)・(2)、12-(1)、第29図）

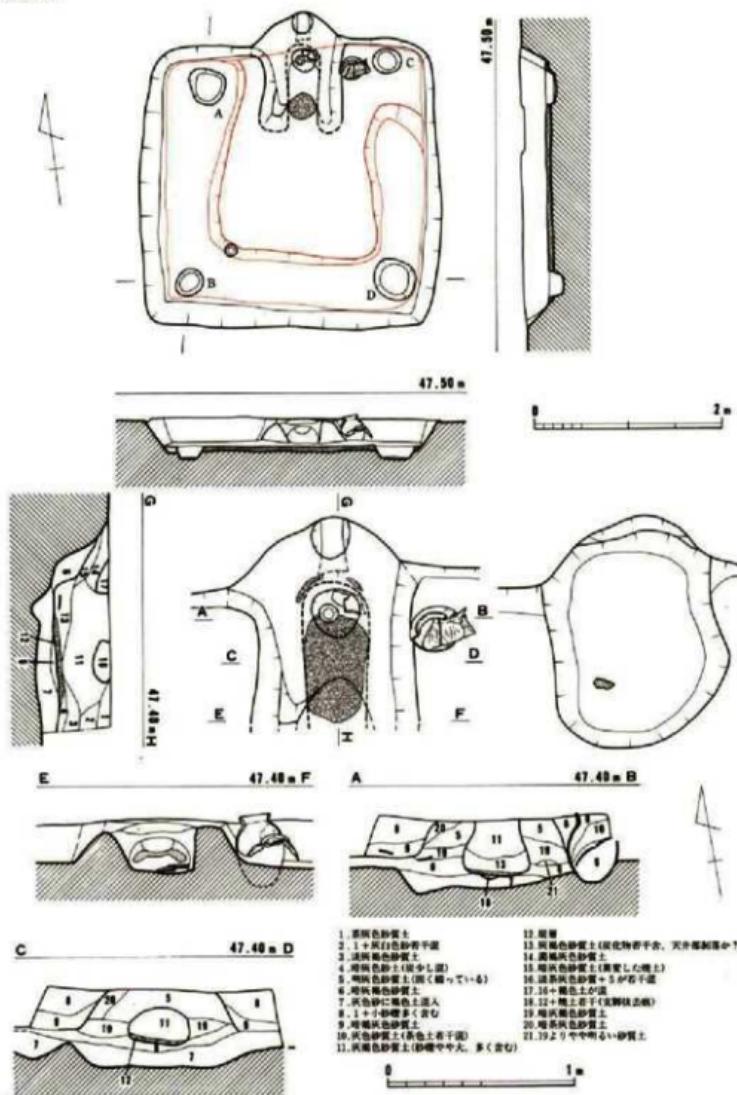
集落を囲繞する溝状遺構の範囲内の北側で検出した竪穴住居で、10号竪穴住居と並列した形で掘られ、その間隔は1.0mほどで同時併存は考えられない。住居の平面形態は隅丸方形で、規模は東・西壁辺2.95m・2.80m、南・北壁辺2.95m・2.85m、壁高は30cm前後を測る。住居の床面積は7.55m²である。

支柱穴は住居の隅に配置されたA-Dが相当すると考えられるがいずれも浅い。各々の柱間はA-Bが2.10m、A-Cが1.95m、B-Dが2.20m、C-Dが2.30mを測る。床面の下層は、北側を除いて幅55cm～80cm、深さ7.0cm前後で「コ」状に浅く掘られ、その部分は貼り床とする。

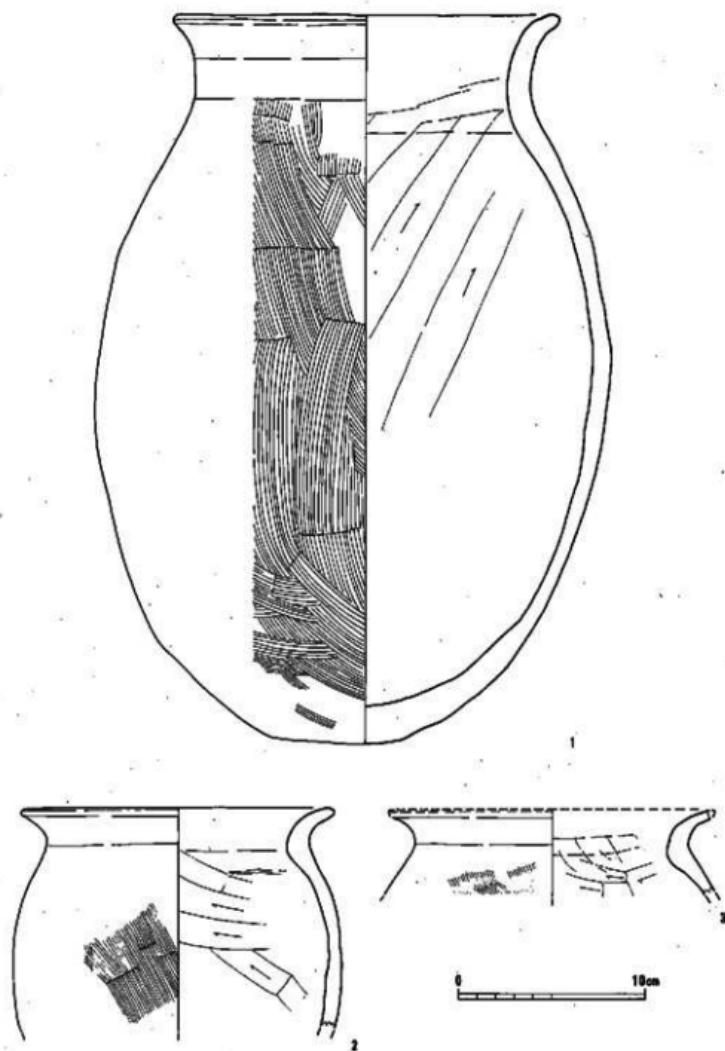
カマドは北壁の中央部分に住居の壁から突出する形で設置されている。当該住居のカマドは、天井の前面と上部を除いて完全な形で埋没し、旧状が極めて良好な状態で遺存していた。平面形状では突出部に径が20cmの煙道が掘られ、天井部の中央には径25cmの煮沸用の窓を掛ける孔が開けられている。現存でのカマドの長さは1.10mを測るが、発掘時点ではカマドの範囲を誤認し、袖の先端を若干削平してしまった。断面形状は薄鉢形を呈すると考えられる。

カマドの空洞部分の形状は精円形を呈し中には砂が埋まっており、おそらく洪水によって埋没したと考えられる。袖と天井部分の土質は明灰色・暗灰色・暗茶灰色砂質土で構築され、カマ

軌跡遺跡



第29図 9号竪穴住居跡・カマド・カマド下層実測図(1/60・1/30)



第30图 9号竖穴住居出土土器实测图(1/3)

軒掛遺跡

ドのベースは6層の暗茶灰色砂質土である。図示した5層部分は硬く締まっていたが、焼痕は不明瞭である。内部の床面には広い範囲で灰層があり、明確な焼痕の火床は無い。また、天井中央部の孔の真下の床面には径が10cmの支脚の抜去痕がある。その傍にはカマドで使用された壺の破片が残っていた。

カマドの奥の煙道は床面より約18cm高所から斜め方向に穿たれており、煙道の長さは30.0cm、入り口部分の幅は15.0cm、出口部分は12.0cmを測る。煙道の入り口部分には明瞭な焼痕が認められた。

カマドの下層は不整形な掘り込みがあり、中には灰色砂と褐色土で埋めていた。おそらく、住居の掘削時に掘り込んで大方のプランを決めた後にカマドを構築したことが推測される。また、カマドの右傍には完形の壺を埋め込んでおり、水壺か食料の一時貯蔵壺として使用していたのであろう。

住居内からの出土遺物は以外に少なく、土師器の壺が出土しているに過ぎない。

出土遺物

土 壷 (図版19、第30図)

土師器 1はカマドの右傍に埋められていた完形品の壺で、前述したように水壺か一時的な食料貯蔵壺であろう。口縁部は鋭く外反し、頸部はやや長めにつくられている。肩部の張りは純く長い胴部をなす。全体に器壁は厚く、特に底部付近は厚い。調整は外面が粗いハケで、内面は上半にヘラ削りが残るが、胴下半は何故か摩滅している。胎土は砂粒を多く含みやや粗い粘土を使用している。口径は20.0cm、器高は38.8cmを測る。2はやや小型の壺の破片で、胴下半を欠損する。口縁は鋭く反り気味に外反し、胴部は僅かに張る。外面のハケは部分的に残るのみである。残存は1/4で、復原口径16.0cmを測る。住居の覆土中からの出土である。3は外反度が鋭い壺の口縁部片である。復原口径17.0cmを測る。

10号堅穴住居跡 (図版12-(2)、13-(1)、第31図)

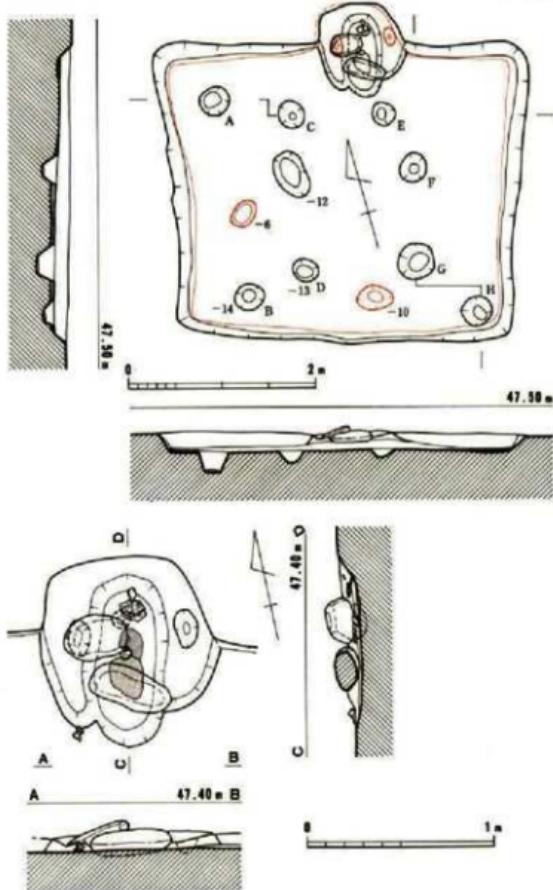
9号堅穴住居の東側で検出した堅穴住居跡で、他の遺構との重複は無い。住居の平面形態は方形に近いが、西側の壁がややせり出し歪である。規模は東・西壁辺が3.05m・3.00m、南・北壁辺が3.55m・4.00m、壁高は15cm前後を測る。床面積は10.13m²である。

支柱穴は床面上で検出したA-Fの配置状況で見ると、C-Eでは柱間が狭過ぎ、しかも浅いため支柱にはなり得ない。A-B-Hの配置では規則性があり北東隅の1本が検出できていないが、9号堅穴住居の支柱穴の配置列から妥当性があるようく看取できる。因にA-Bの柱間は2.15m、B-Hは2.50mを測る。床面の下層は図示できない程度の凹凸があり、僅かに貼

り床を施す。

カマドは北壁に設置するが遺存状態は良くない。カマドは約1/2が壁から突出する。袖の中央には20cm×13cmのピットが掘られており、B号竪穴住居と同様袖内に川原石を立てていたことが分かり、カマド上に転倒している2個の川原石がそれに相当すると考えられる。カマドの床面は梢円形に浅く掘り窪められ、前面に不整形な火床が残っていた。それに接するように黄色粘土が出土し、支脚のベースになっていたことが推測される。また、カマドの奥の小ピットは下層で検出したものである。

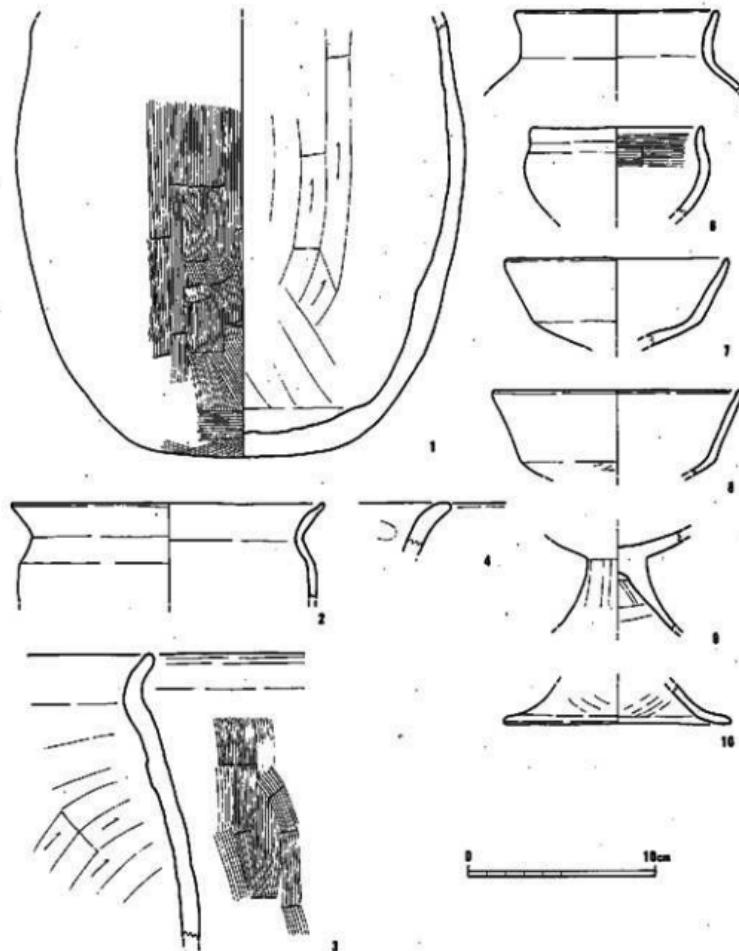
出土遺物の多くはカマド内とその周辺から出土し、器種は土師器の壺・壺・鉢・高坏の他、鐵器がある。



第31図 10号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)

出土 遺 物

土 器 (第32図)



第32圖 10號竪穴住居跡出土土器實測圖(1/3)

土師器 壺は1～4がある。1は肩部上半を欠失するややつくりの粗い壺で、器壁も厚くつくる。底部は大きく安定感がある。二次火熱を受け、煮沸用に使用した壺であろう。2は「く」字状に口縁部を外反させ、肩部に稜を有す壺で、器壁を薄くつくる。1/6の残存で復原口径16.4cmを測る。カマドの左側から出土した。3はカマド内から出土した短い口縁部に張りの鈍い脚部の壺で、二次火熱を受けている。4は床面の下層から出土した口縁部片である。

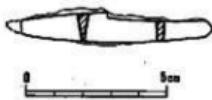
5はこの時期にしては珍しい器形で、一見壺形土器のように見える。頸部は直に伸び、口縁部は僅かに外反する。しかも、肩部は張り、おそらく球形の脚部を有すであろう。復原口径10.6cmを測り、カマドの左側から出土した。

6は短い口縁部を有す小型の鉢形土器で1/4残存する。内面肩部を中心に横ハケが残る。復原口径9.0cmを測り、住居の北西床面から出土した。

7～10は高壺の破片で、この中には同一個体が含まれるが接合しない。おそらく、8～10は同一個体であろう。調整は壺部は横ナデ、脚部は縱方向のヘラ削り、内面は絞り痕が残る。いずれの壺部も深くつくられる。7は復原口径11.8cm、カマド内から出土した。8は復原口径13.2cmを測る。9・10の脚部は短くしかも大きく開脚し、脚部は更に開く。9はカマドの傍から出土。10の脚部径は11.8cmを測る。カマドの左側から出土した。

鉄器（図版19、第33図）

住居の床面下層から出土した現存長6.8cmの刀子がある。切先部を欠損するほかは遺存している。茎部は断面が長方形を呈し、長さ3.7cmを測る。関は背部分につける。刃部は長く使用したためか研ぎ減りしている。



第33図 10号竪穴住居跡出土
鉄器実測図(1/2)

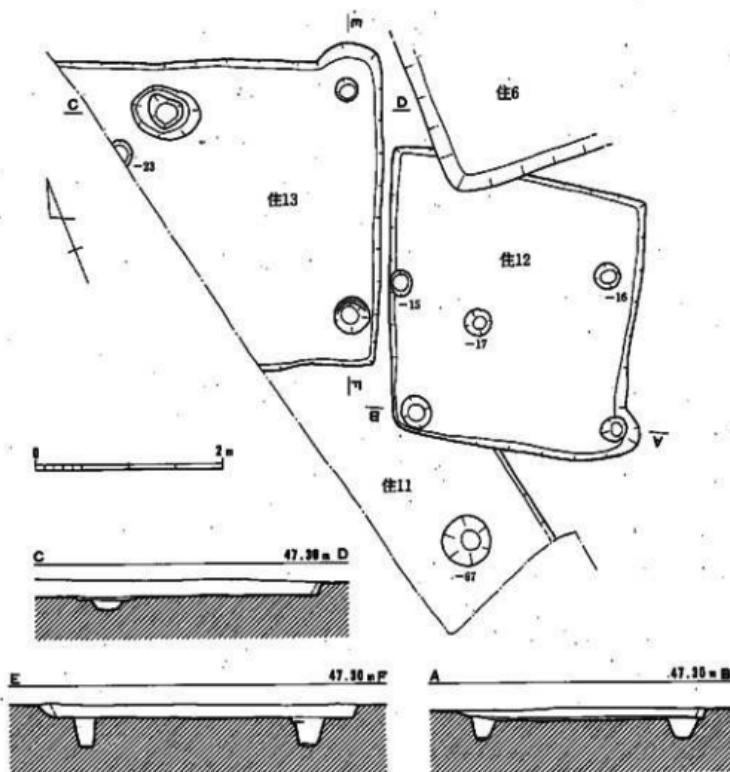
11号竪穴住居跡（図版13-(2)、第34図）

調査区の西側で検出した竪穴住居跡で、大半が調査区外のため詳細は不明である。重複関係は12号・13号住居より古い。床面上には支柱穴と考えられる深さ67.0cmの1本の柱穴がある。出土遺物は高壺の小破片があるが図示していない。

12号竪穴住居跡（図版13-(2)、第34図）

6号住居と11号住居との重複がある。新旧関係では11号住居より新しく、6号住居より古い。平面形態は方形で、規模は東・西壁辺2.70m・3.00m、南・北壁辺が2.55m・2.75m、壁高10cm前後を測る。床面積は6.80m²である。支柱穴はA-Bラインで図示した柱穴が考えられるが対峙する2本の柱が検出できていない。因に2の柱間は2.15mである。その他カマドなどは見当たらず、図示可能な出土遺物も無く時期が不明である。

軒括遺跡



第34図 11号～13号竪穴住居跡実測図(1/60)

13号竪穴住居跡（図版13-(2)、第34図）

11号竪穴住居を切って検出した住居で、約1/3が調査区外のため完掘できていない。平面形状や規模は不明で、東壁辺が計測可能で3.30m、壁高は15.0cmを測る。支柱穴は図示したE-Fラインの2本が検出できた。柱間は2.40mである。カマドは調査区内には遺存せず、西壁か南壁に付設していると考えられる。北壁沿いの2段掘りのピットは屋内土壙の可能性がある。

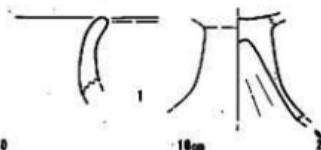
出土遺物は土師器の壺の小片と高壺の脚部片がある。

出土遺物

土器（第35図）

土器番 1は壺の口縁部の小破片で、口縁の外反度は鈍い。胎土は砂粒が多い。褐色を呈する。

2は住居の覆土中から出土した高壺の脚部片で、胎土には若干の砂粒を含むが精製された粘土を使用する。色調は肌色を呈する。



第35図 13号堅穴住居跡出土土器実測図(1/3)

14号・15号堅穴住居跡（図版14-(1)・(2)、第36図）

2軒の堅穴住居は完全に重複し、15号住居の内容は殆ど把握できないため一緒に説明する。集落を囲繞する溝状造構の範囲内の最も北側で検出した堅穴住居である。北側を蛇行する溝1との距離は1.50m～3.00mを測り、住居の北側は意識的に突出した形を呈し、14号住居を意識した掘削方法をとる。当該住居と重複する造構は、15号堅穴住居と2号土壙があるが、15号堅穴住居跡は北側の一部分を除いて完全に重複しており、調査時点では把握していなかった。床面まで掘り下げた段階で、北側壁の中央部分に焼土が散在しており、この部分で破壊されたカマドを検出し15号住居の存在を確認した。また、2号土壙も殆どが14号堅穴住居で破壊されていた。

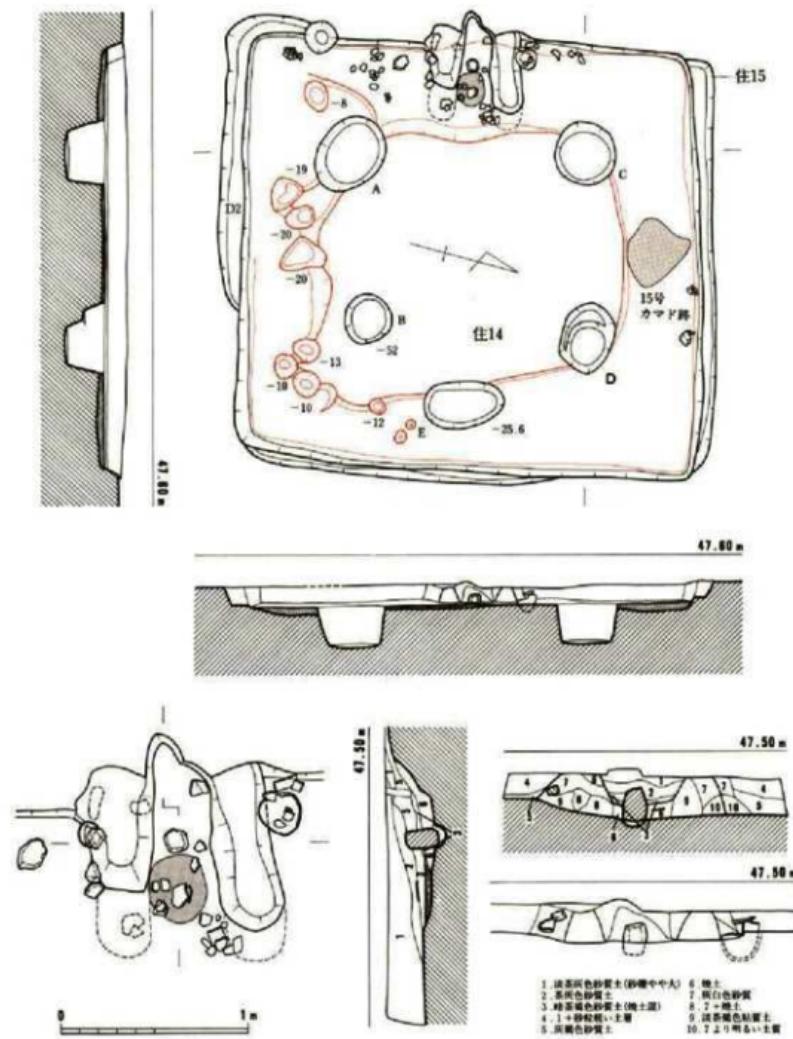
14号住居の平面形状は方形を呈し、規模は東・西壁辺4.90m・4.70m、南・北壁辺4.30m・4.50m、壁高は20cm前後を測り、調査区内で検出した住居で61号住居に次ぐ規模を有す。5号は北壁で4.30m、壁高16.0cmで14号住居より浅い。14号の床面積は20.94m²である。支柱穴はA-Dが配置され、柱の掘方まで掘ったため柱痕を捉えていないが、掘方の中心部の各柱間はA-Bが1.80m、A-Cは2.50m、B-Dが2.35m、C-Dが2.05mを測り、各々柱間に差異がある。特にA-B間は短い。また、西側の壁沿いには指円形のピットが掘られているが、屋内土壙かはたまた住居の出入口の施設なのはっきりしない。

14号住居の床面上には15号住居の支柱穴が全く見られないことから、何らかの理由で同一柱穴を利用した住居の建て直しを図ったことが考えられる。その時点でカマドの付設場所を北側から西側に変えた可能性がある。

住居の床面の下層は周囲の壁に沿って0.7m～1.0mの幅で浅く溝状に掘り、中央部分は地山（砂質）のままである。溝状に掘削した部分は黄色の粘土ブロックを混入した土質で貼り床を施す。

カマドは前述したように、15号住居のカマドは新しい住居に破壊され北側の床面上に焼土・炭化物が60cm四方に散在していた。14号住居のカマドは西側壁の中央に設置され、カマドの袖

駿掛遺跡



第36図 14号・15号竪穴住居跡・カマド、2号土壤実測図(1/60・1/30)

と埋造部分は壁の外側に突出している。カマドの袖は図示した6~10の砂質と茶褐色粘質土で構成されているが、左側の袖は不明瞭なため掘り過ぎた。内部床面には35cm×30cmの火床が残り、その奥には自然石を使用した支脚が埋め込まれていた。横断面で図示した床面の3・6層の下層が最終床面で、本来の床面はその下層の6層である。支脚の下は浅い掘り込みがあり、粘土が焼土化していた。また、カマド内からは小動物の骨（鳥骨？）の小片が出土した。さらに右傍からは、9号竪穴住居と同様、埋め壺が出土し、その周辺には土器が散在していた。床面から炭化物が多く検出されたことから、火災に遭遇した住居と考えられる。

出土遺物は土師器の壺・鉢・脚台付小型壺・椀・須恵器の壺蓋・坏身の他、繩の羽口片が出土しており、当該住居の住人は小鐵冶に関係していたと推測される。

出土遺物

土 器（図版19、第37・38図）

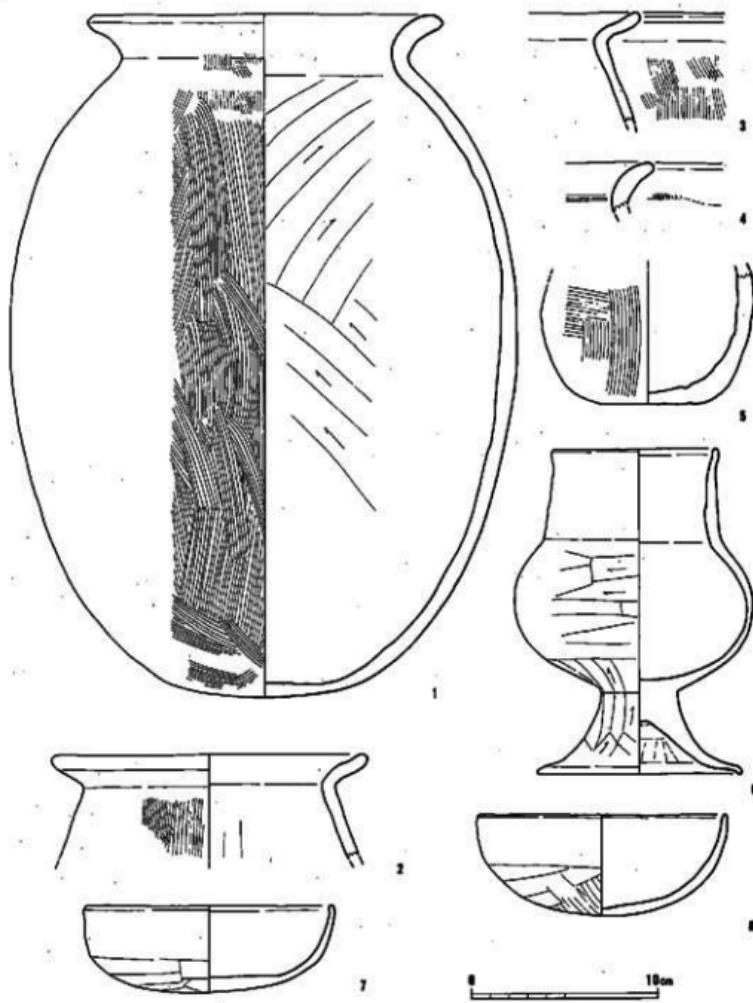
土師器 壺は1~4と9がある。1は住居の床面から出土した壺で、1/2が残存する。口縁部は鋭く反り気味に外反し、肩部は張るが、胴部は張りは鈍く長胴をなす。調整はハケとヘラ削りを施すが、内面底部付近はナデている。復原口径18.0cm、器高36.2cmを測る。2は3と同タイプの壺で、同一個体の可能性もある。「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部は撫で肩である。胴部以下は消失するが、おそらく下脛の胴部を有すであろう。復原口径16.4cmである。9はカマドの右傍に埋め壺として使用したもので、胴部上半を欠損している。調整は内外面にヘラ削りの痕跡が残る。底部は大きく平底状である。

5は器壁の厚い鉢形土器か小型の壺であろう。胎土は砂粒を多く含み不良。内面は著しく摩滅している。暗褐色を呈し二次火熱を受けている。

6は脚台付小型壺で極めて稀な器種である。口唇部を僅かに内湾させ、頭部から口縁部にかけては若干内傾する。肩部から胴部にかけては扁平な球状を呈する。脚台は壺のプロポーションに対して均整の取れたもので、据部は大きく開き、端部は内傾させる。調整は口縁から頭部にかけては横ナデ、胴部外面は横方向のヘラ削り、胴部下半から脚部にかけては縱方向のヘラ削りで仕上げる。胎土は精製された粘土を使用し、つくりの良質な土器である。口径は8.6cm、裾部径10.9cm、器高17.2cmを測る。住居の南西隅の床面上から出土した。

椀は7・8・10・11がある。7は2/3残存する椀で、やや扁平なつくりである。器壁は薄く、つくりは良好である。内面にはヘラ磨き、外面にはヘラ削りが残る。口径13.0cm、器高4.6cmを測り、カマドの左側から出土した。8は7より器高の高い椀で完形品である。外面底部には擦過状の削り痕が残る。カマドの左袖傍から出土した。口径13.0cm、器高5.3cmを測り、精製品である。10はカマドの右袖傍から出土した椀で、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削りで仕上げる。

核掛造跡

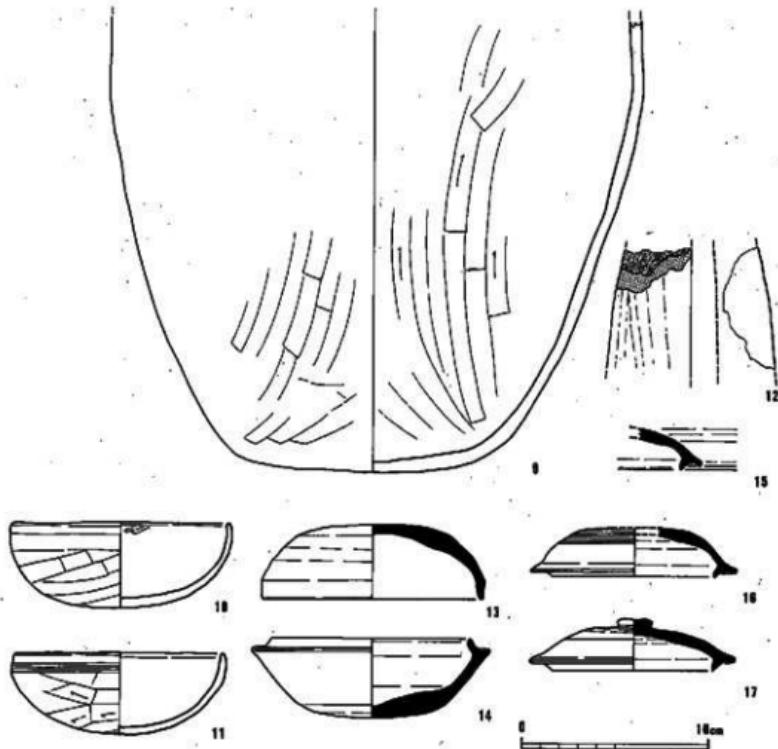


第37図 14号竪穴住居出土土器実測図 その1 (1/3)

口径11.6cm、器高4.6cmを測る精製品である。11は10と同タイプの碗で口縁下には4条の沈線を巡らす。調整はヘラ削りとナデで仕上げる。法量は口径11.0cm、器高4.3cmで、カマドの左側から出土した精製品である。

12は縁の羽口片で、先端部分である。小片のため詳細は不明であるが、先端は非常に強く焼け灰白色に変色している。胎土は砂粒が多く、しかも雲母を多量に含んでいる。

頬窓器 坏蓋にはタイプの異なる身受けの返りを有し摘みを持つ蓋とそうでない2種類があり、両者は時期も異なるが出土した場所は13がカマド袖内で完形品であり、15~17はカマド周辺の床面から出土しており両者とも当該住居に共伴すると考えざるをえず、13・14は住居の建



第38図 14号竪穴住居跡出土土器実測図 その2 (1/3)

駆掛遺跡

て直し前に使用していた土器を新しい住居でも使っていたと考えたい。13の口径は11.8cmを測る。15はカマドの右側から出土。16は天井部にカキ目状の調整が施され、摘みが付くか否かははっきりしない。外面には灰かぶりが見られる。口径8.6cmである。カマド左側から出土した。17はカマド右側で出土した扁平な摘みを有す見受けの返りのある坏蓋の完形品である。口径8.4cm、器高2.7cmを測る。

坏身はカマド内から出土した14がある。1/2が残存する。前面に二次火熱を受け赤紫灰色を呈している。復原口径10.4cm、器高4.2cmである。



第39図 15号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/3)

出 土 遺 物

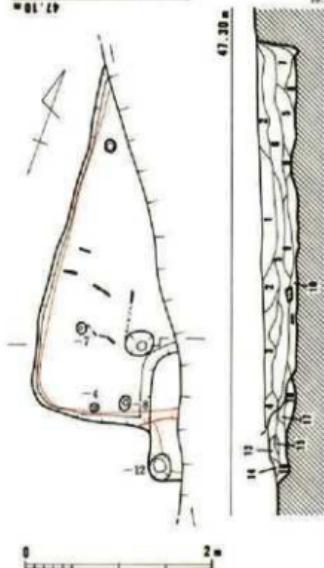
土 器 (第39図)

土師器 15号住居の出土遺物は図示したものが1点のみである。口縁部の張りは非常に鈍く、肩部から胴部にかけても直線的である。



16号竪穴住居跡 (図版15-(1)-(2)、第40図)

竪穴住居群を囲繞する溝1・3が合流する部分で溝状遺構に切られた状態で検出した住居である。遺存部分は約1/3程度で詳細は不明であるが、壁高は25cmを測る。溝との接点部分の土層図では、緩やかなレンズ状堆積を示し、大半が砂質土で埋まっていた。住居の床面上には細い炭化材が見られ消失住居の可能性がある。また、南側壁には奥行き65cm、深さ10cmの造り出し部があり、その隅には深さ12cmのビットを掘っている。それに続く床面には奥行き70cm、高さ10cmの張り出し部をつくり、階段を形成している。土層図の16層には黄褐色粘土を敷いていることから、おそらく住居の出入り口と考えられる。その左隅にもビットを配しており、出入り口の上部構造の支柱穴であろう。



第40図 16号竪穴住居跡・土層図実測図(1/60)

軒掛遺跡

出土遺物は土師器の鉢・高坏・碗があるが、2・3は溝1の底に住居のカマドの痕跡が若干残っており、この周辺から出土した。

出土遺物

土器（図版19、第41図）

土師器 1は長い口縁部を有し、胴部との境には後をなす鉢があるが、形状では坏とした方が適切かもしれない。調整は横ナデとヘラ削りで仕上げ、器壁を薄くつくる精製品である。ほぼ完形品で口径12.0cm、器高5.1cmを測る。住居の北西隅の床面からの出土で、橙色の色調を有す。

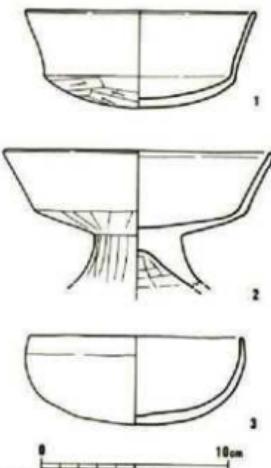
2は脚下部を欠損する高坏である。坏部はやや浅くつくり、現存での脚から大きく開脚するタイプであろう。調整は坏部内面から外面にかけては横ナデ、底部外側と脚部は縱方向のヘラ削りで仕上げる。脚内面もヘラで削る。口径は14.0cmを測り、カマド付近で伏せた状態で出土したことから、カマドの支脚に転用された可能性がある。

3は2の高坏の傍から出土した碗の完形品である。胎土は精製され、つくりの良質な土器で口径11.3cm、器高4.6cmを測る。淡橙色の色調を有す。

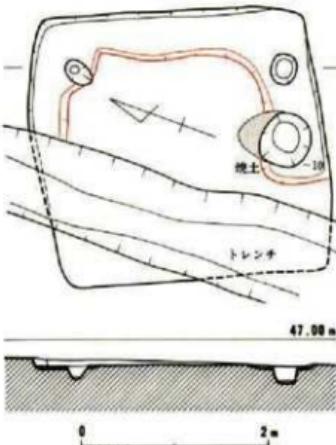
17号竪穴住居跡（図版16-(2)、第42図）

環濠内の南東側、2号竪穴住居の東側で検出した小形の住居跡で遺存状態は極めて悪い。また、試掘調査時のトレンチで一部を破壊している。平面形態は方形を呈し、規模は東・西壁辺2.80m・2.70m、南・北壁辺2.75m・2.85mを測る。復原した床面積は8.21m²である。支柱穴は断面図のA-Bライン上にある2本の柱穴が相当するが、他の2本はトレンチで消滅している。2本の柱間は2.25mである。

カマドは南側の壁沿いに設置していたが、ビッ



第41図 16号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/3)



第42図 17号竪穴住居跡実測図(1/60)

鞍掛遺跡

トにより破壊されている。ピットの傍には火床が確認された。

出土遺物は土師器の小片があるが、図示可能な土器はない。

(2) 土 壤

1号土壤(第43図)

環溝内の東側、16号

竪穴住居の南側で検出

した土壙で、平面形状

は北東側が突出し、やや

亜な方形を呈する。規

模は東・西辺が2.60m、

2.10m、南・北辺が

1.75m・1.85m、深さ

は15cm弱である。西側

の壁沿いには梢円形の

土壙状の畝り込みがあ

り、その規模は長軸

1.55m、短軸55cm前後、

深さは23cmである。土

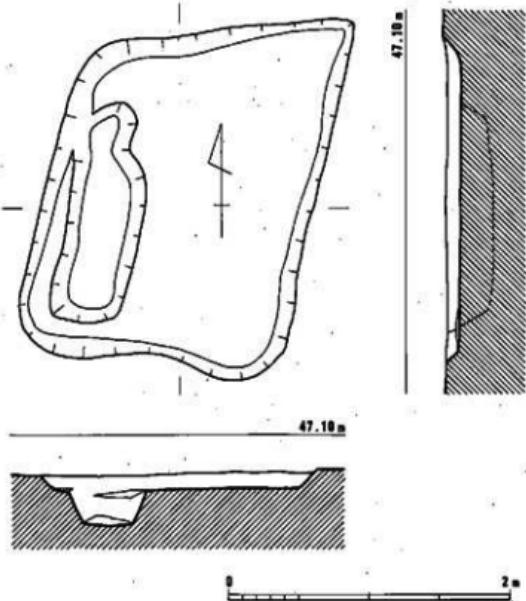
壙の用途ははっきりし

ない。

出土遺物は土師器の

壺の小片、須恵器の坏

身がある。



第43図 1号土壤実測図(1/40)

出 土 遺 物

土 壈 (第44図)

土師器 壺は1・2がある。同様なタイプの壺の口縁部片であるが、1の方が器壁は薄く、2は頸部内面の稜線が明瞭である。胎土も同様でやや粗く、色調も同じく橙褐色を呈する。

須恵器 3・4は坏身の破片である。口縁部の立ち上がりと形態上では3が新相を呈し、4が古い感を受ける。3は外面に灰かぶりが見られる。復原口径は11.0cmを測る。

2号土壙（第36図）

14号竪穴住居と殆どが重複しているため、詳細は全く不明である。出土遺物は土師器の壺と碗の破片があるに過ぎない。

出土遺物

土 壁（第44図）

土師器 5 の壺の破片がある。胴部上半以下を欠損する。口縁部は鋭く反り気味に外反し、肩部はやや張り気味である。調整はハケとヘラ削りで仕上げるが、頸部内面にはハケが若干残る。復原口径17.4cmを測る。

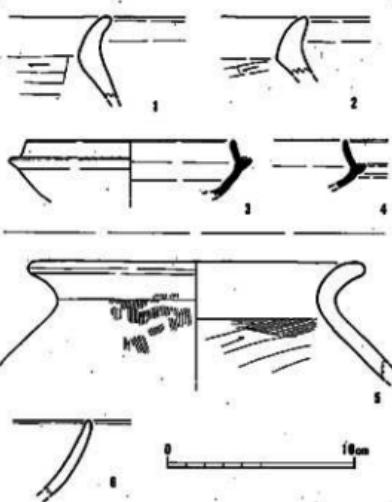
6 は碗の小片で、胎土は精製され、淡い橙色を呈する。

(3) 溝状遺構（付図）

調査区内での溝状遺構は1～8条の名称を付与したが、溝1と溝3は図示した土層断面図で見る限り新旧関係があり、溝3が溝1より新しいことが分かる。しかし、溝3・溝4は明確な新旧関係は不明で、同時併存の可能性もある。溝2と溝7も同一の溝で、溝5・溝6も各溝に繋がっているので、この項では溝状遺構として一括して説明する。

溝1は調査区内で「L」字状に住居群の北側を巡り、検出した長さ7.5m、幅1.0m前後の細い溝5と直結している。この溝5は明らかに溝1に流れ込む形に掘られている。また、溝1は住居群の東側で溝3と合流し、前述したように新旧関係はあるものの、その先が住居群の南側を弧状に延びる溝3に繋がるのか、溝4に繋がるのか分からぬ。もし溝1が溝4に繋がるのであれば住居群を囲繞する形はとらないが、溝1と溝3（南側部分）が繋がるのであれば完全に囲繞する。また、溝3のみで見ると集落のスペースは北側に更に拡大するが、溝1・3・5・6に囲まれた部分には遺構が全く認められないため、この考え方には賛成できない。底面の比高差では溝3の北側と溝4では1.00m以上の差があり、流水は南側に流れていたことが分かる。

各溝から出土した遺物では、時期の異なる土器が出土しており、出土状態は必ずしも下層に古い土器が出土してはおらず、新旧の土器が渾然一体となって検出された。このことから、各々



第44図 1号(1-4), 2号(5・6)
土壙出土土器実測図(1/3)

軌跡

の溝はかなりの長い期間使用されており、しかも数度となく掘り返しが行われたため、新旧の出土遺物が渾然一体となって出土したと推察される。

図示した土層図では内側の掘り込み部分は明瞭

に残っているが、外側の部分は壁の立ち上がりが穢やかで、流水に流されたことが考えられ、溝内に堆積した土質も砂質土が殆どであることからも理解できる。

これらのことから総合的に判断すると、すべての溝状遺構は若干の掘削した時期差はあるものの、殆どが同時期に機能していたと理解される。

出土遺物

溝1の土器(図版、第46図)

土器 壺は1・2の小破片がある。1は鋭く反りながら外反する口縁部片で、約1/6が残存する。復原口径21.4cmを測る。2の壺は口縁内面に逆「く」字状の線刻を刻み、器壁を厚くつくる。

3は壺の破片で口唇部を僅かに内窵させる。調整は内面がナデ、外面は口縁が横ナデ、底部はヘラで削る。

4・5は高壺の脚部片である。4は精製した粘土を使用したつくりの良好な高壺で、壺部の接合部から大きく開脚する。調整は脚部外面が縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。5の高壺の脚部はスカート状に開脚し、4の高壺とはタイプが異なり、器壁は厚く胎土もやや劣る。

6・7は瓶の把手部分で、両者とも挿入タイプのものである。断面では6が扁平につくり、7は丸くつくる。

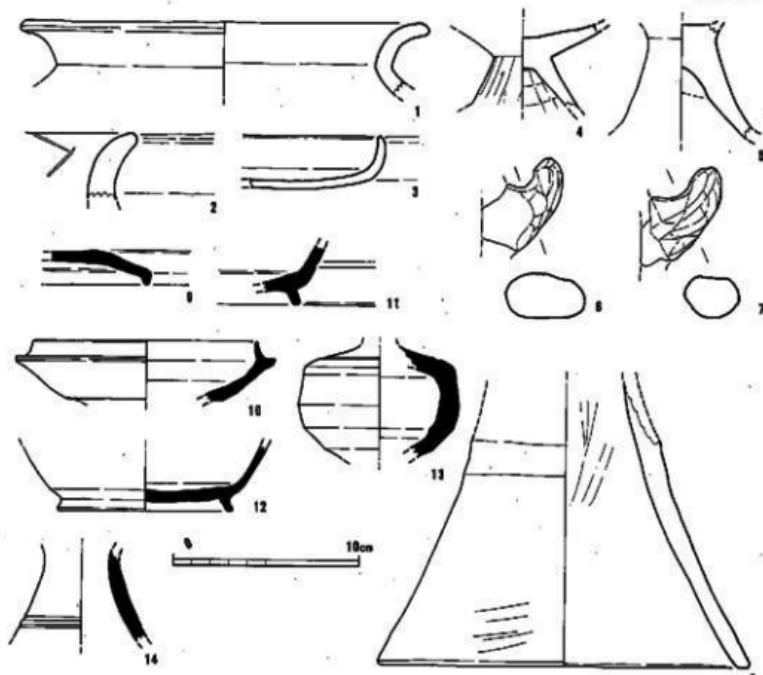
8は唯一の弥生時代の土器で、後期後半から終末頃にかけての器台の破片である。調節には不鮮明な凸帯状の高まりがある。調整は壺部外面叩きが僅かに残る。胎土は砂粒を多く含み不良である。復原口径19.9cmを測る。

須恵器 9は壺蓋で摘みの付くタイプである。口唇部が喙状を呈する。天井部は回転ヘラ削りで仕上げる。

10は壺身片で1/6程残存する。復原口径12.0cmを測る。焼成は堅固で、淡紫灰色を呈する。



第45図 溝3 土層図(1/60)



第46図 溝1出土土器実測図(1/3)

11・12は高台付柄の破片で、11は胴部下年に沈線が巡る。12は口縁部を欠く。底部と胴部の境は明瞭である。復原底部径9.2cmを測る。

13は壺の胴部片で頸部と底部を欠損する。破片のため孔の部分は残っていない。肩部には沈線が巡る。胴部は荒いへラ削り跡が残る。

14は高壺の脚部片で2条の沈線が巡っている。

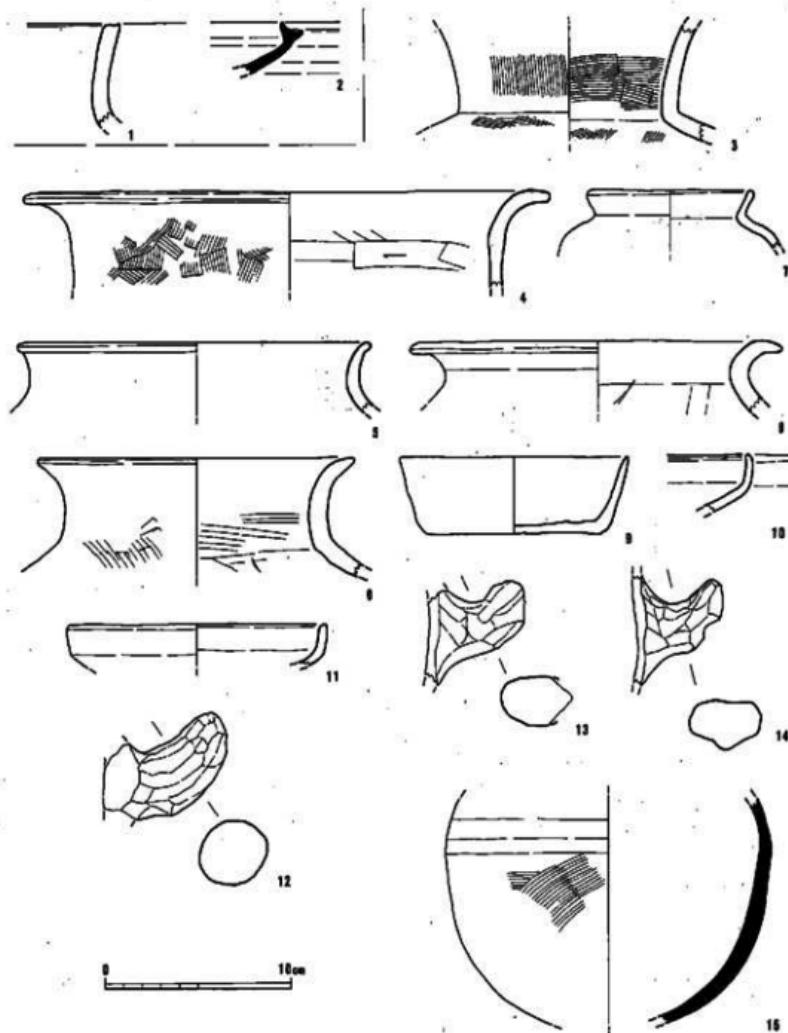
溝2の土器（第47図）

土師器 壺（壺？）の口縁部片がある。口唇部が僅かに凹状をなす。横ナデで仕上げ、淡い褐色を呈する。

須恵器 壺身の小片がある。口縁部から蓋受部はやや厚くつくられる。

溝3の土器（図版、第47・48図）

裝飾遺跡



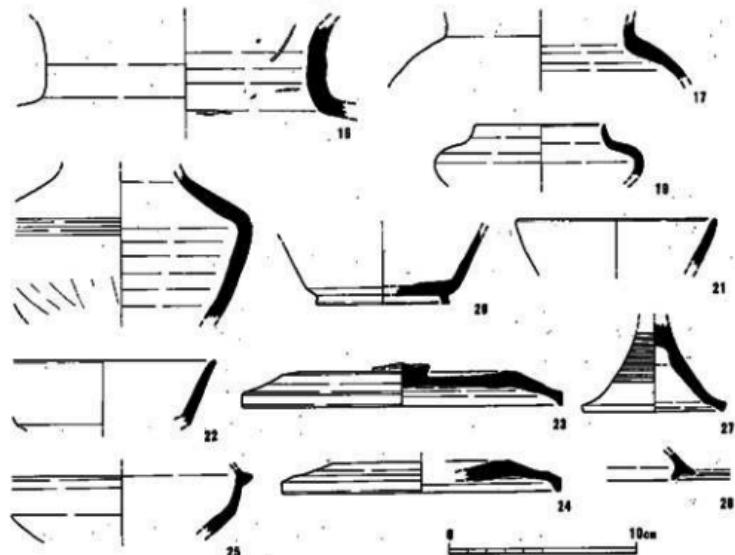
第47図 溝2・3出土土器実測図 その1 (1/3)

弥生式土器・土師器 壺は3・6があるが、3は弥生時代後期の二重口縁壺の肩部片である。内外面にハケ調整が見られる。溝の北側の上層から出土しており、おそらく前田遺跡から流れてきた土器であろう。6は頸部から口縁部にかけて反り気味に外反する壺の口縁部片である。内外面に荒いハケが残る。復原口径16.8cmを測る。

壺は4・5・7・8がある。4は鋭く反りながら外反する口縁を有す壺の口縁部片で、調整はハケとヘラ削りで仕上げる。上層からの出土で、復原口径28.0cmを測る。5は一見壺の形状を有す。口唇部を僅かに肥厚させる。復原口径18.0cmで、上層から出土した。7は小型の壺である。「く」の字状に外反する口縁を有す。肩部は鋭く張る。復原口径8.6cmを測り、溝の上層から出土した。8は鋭く外側に反った口縁部片で、復原口径19.6cmを測る。

9~11は壺である。9は深めの壺で復原実測である。口縁から体部にかけては直線的につくる。復原口径11.7cmを測る。10・11は同タイプの壺である。口縁部は上方に延び体部はやや深めにつくる。いずれも小破片である。11は溝の上層から出土し、復原口径13.8cmを測る。

12~14は瓶の把手である。12は挿入式で断面が円形を呈する。13・14は貼り付けタイプの把手で断面が扁平である。



第48図 溝3出土土器実測図 その2 (1/3)

散逸遺跡

須恵器 壺は15~17がある。15の壺は似非土師須恵器の類で、製作技法は土師器であるが焼成は須恵器である。肩部片で肩部上半と底部を欠損する。調整は肩部にハケを残す。上層から出土。16は頸部片である。回転ナデで仕上げ、肩部内面はあて具痕が残る。紫灰色を呈する。17は肩部の破片で外面に灰かぶりが見られる。暗灰色を呈する。上層から出土した。

18・19は壺である。18は頸部上半と底部を欠く。肩部から肩部の縁は丸みを持ち、その部分に2条の凹線を巡らし、肩部はすぼまる。調整は内面が横ナデ、外面は回転ナデとヘラ削りで仕上げ、黒灰色を呈する。19は短頸壺の破片で、肩部下半を欠失する。口縁は内傾し、肩部から肩部にかけては大きく膨らみ肩平となる。淡灰色を呈し、復原口径6.8cmを測る。

20~22は高台付壺の破片で、20の高台は低く底部と体部の接線は明瞭である。底部外面はヘラ削り、他はナデ仕上げである。復原高台径6.9cmで、灰色を呈する。21は口縁を僅かに内寄せ、復原口径10.7cmを測る。黒灰色を呈する。22は口縁部を若干外反させる壺である。底部を欠くが20と肩タイプである。復原口径11.8cmを測る。

23・24・26は壊壺である。23・24は口唇部が屈折し体部から天井部の境は明瞭である。天井部には扁平な摘みが付く。前者はほぼ完形品で、口縁径17.0cm、器高2.3cmを測る。溝の上層から出土した。24は摘み部を欠損し、焼き歪みがある。1/3残存し、復原口径15.0cmである。26は身受けの辺りを有する壺の小片である。

壊身は25の小破片がある。口縁と底部を欠く。受部径14.0cmを測り、黒灰色を呈する。

27は高壺の脚部片で、復原実測である。外面にはカキ目が残り、外面全体に灰かぶりが認められる。裾部径7.4cmを測る。

溝4の土器（第49図）

土師器 溝4からは図示可能な土器は少ない。僅かに1の壺の口縁部片と2の瓶の把手があるのみである。2は貼り付け把手で、断面形状が不正梢円形を呈する。

溝5の土器（第49図）

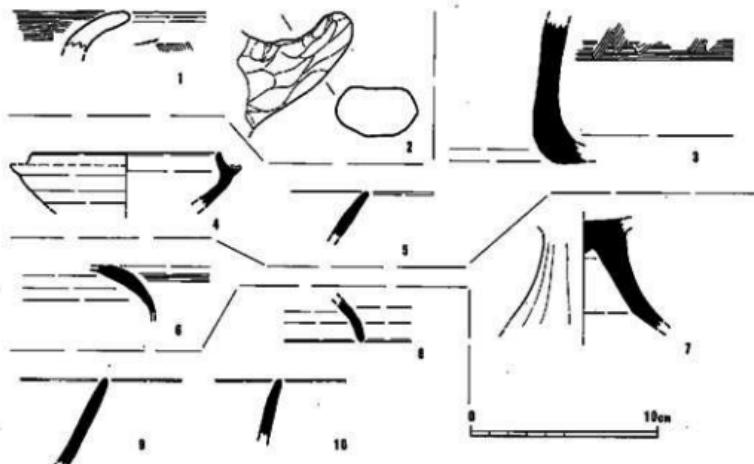
須恵器 溝5の出土土器も少なく、3の壺の頸部片と4の壊身片及び5の高台壊壺と思われる口縁部の小片がある。3の壺は器壁の厚さからやや大型である。外面にはカキ目と波状文が若干残る。灰色を呈する。4の復原口径は10.1cmを測る。青灰色を呈する。

溝7の土器（第49図）

溝7は前述したように7号堅穴住居を囲繞する形で検出した遺構で、溝2と連続性があると察せられる。事実出土した土器は溝2の出土土器と同一時期の土器である。

土師器 7の高壺の脚部片がある。外面は縱方向のヘラ削りで仕上げる。やや器壁は厚く、

破損痕跡



第49図 溝4(1・2), 溝6(3・5), 溝7(6・7), 溝8(8・10)
出土土器実測図(1/3)

橙色を呈する。

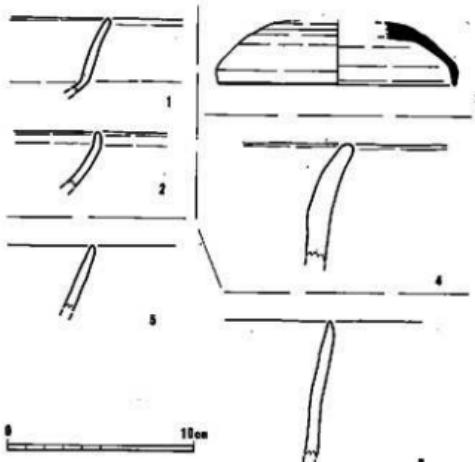
須恵器 壕蓋の小片がある。体部と天井部の境めには細い沈線が巡る。紫灰色を呈する。

溝8の土器（第49図）

溝8は発掘区の北西隅で検出し
た落ち込みで北側に延びる。性格
は不明である。ここからは少量の
土器が出土している。

須恵器 8は壺蓋の小破片であ
る。9・10は高台壺輪の口縁部片
であろう。9は白灰色、10は黒灰
色を呈する。

(4) その他の遺物（第50図）



第50図 P4(1・2), P5(3), P8(4), P10(5・6)
出土土器実測図(1/3)

駿掛遺跡

各ピットから出土した遺物が若干ある。(ピット番号は付図参照) 1・2はP-4から出土した土師器の破片で、1は高坏の口縁部片である。胎土は精製され、橙褐色を呈する。2は碗の口縁部片であろう。3はP-5から出土した須恵器の坏蓋の破片である。復原口径12.6cmを測る。4はP-8から出土した土師器の破片で形状から瓶の可能性が強い。5・6はP-10から出土した土師器の小片であるが、器種ははつきりしない。6は瓶かもしれない。

3 小 結

杷木町において筑後川の段丘上の調査は始めてであり、段丘上での周辺遺跡の実態は殆ど捉えられていない。今回の調査はその一部分を垣間みたに過ぎず、今後周辺遺跡の発掘調査に期待したい。

駿掛遺跡は、前述したように筑後川の北岸に形成された中位段丘上に占地した古墳時代後期から終末にかけての集落跡である。進入路内ののみの調査であるため、検出した箇所は集落の東端で、集落の全容はこの度の調査では捉えることができなかつた。しかし、集落のおおまかな実態は把握できたといえよう。以下、その解明事項を箇条書きにまとめることとする。

- 1 竪穴住居跡は総数18軒を検出したが、すべてがカマドを付設した住居で、集落の時期は6世紀後半から7世紀前半頃にかけて営まれていた。
- 2 集落全体は環溝集落の様相を示し、この溝が集落設営当初から囲繞していたのではないことは、16号竪穴住居が溝に切られていることからも分かる。
- 3 環溝は防禦的な機能を果していたのではなく、当該地が背後に丘陵を控えていることもあって雨季には湧水が多く、単なる排水施設と考えた方が妥当である。想像を逞しくすれば溝の内側に簡易な土手状の高まりを設けていたことが推考される。
- 4 個別竪穴住居では、小形の住居が多く、その中にあって6号と14号は規模が突出している。時期は14号住居が新相を示しているが、中核的な役割を果たしていたと考えられる。特に14号からは縄羽口片が出土していることが注目される。また、14号から出土した須恵器のセット関係であるが、IV型式(坏蓋と坏身)V型式(坏蓋)とが明らかに共伴していることである。前者はカマド内とカマド袖から出土し、後者は床面からの出土である。新しい時期まで古い器種を使用していたことになる。
- 5 カマドの祭祀具は7号住居のみから集中して出土したことでも注目される。また、9号住居のカマドが完存していたことで構造が判明したと共に、些細なことであるが、カマド内から小動物の骨(図版18)が出土したことで、動物を捕獲しカマドで焼いて食していたことが判明した。

図 版

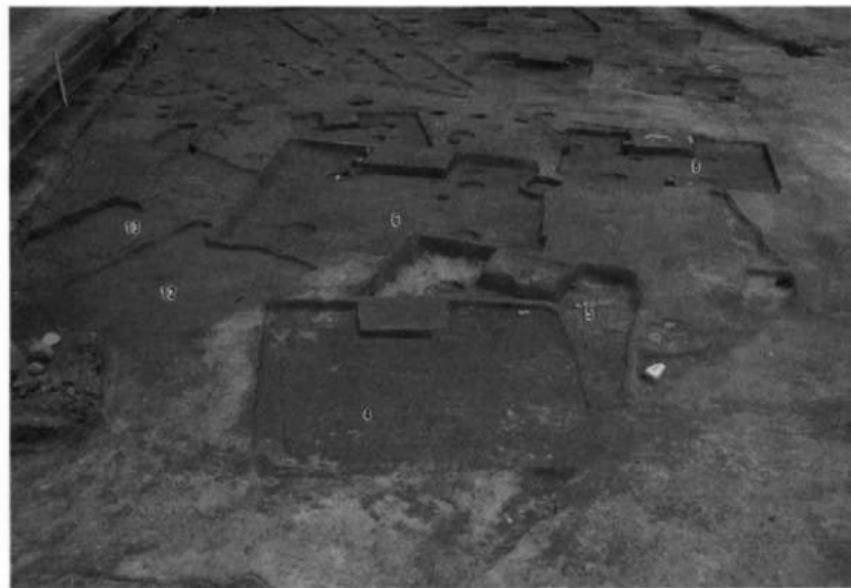


鞍掛追跡俯瞰

图版 2



(1) 梭掛遺跡堅穴住居群俯瞰



(2) 梭掛遺跡堅穴住居群



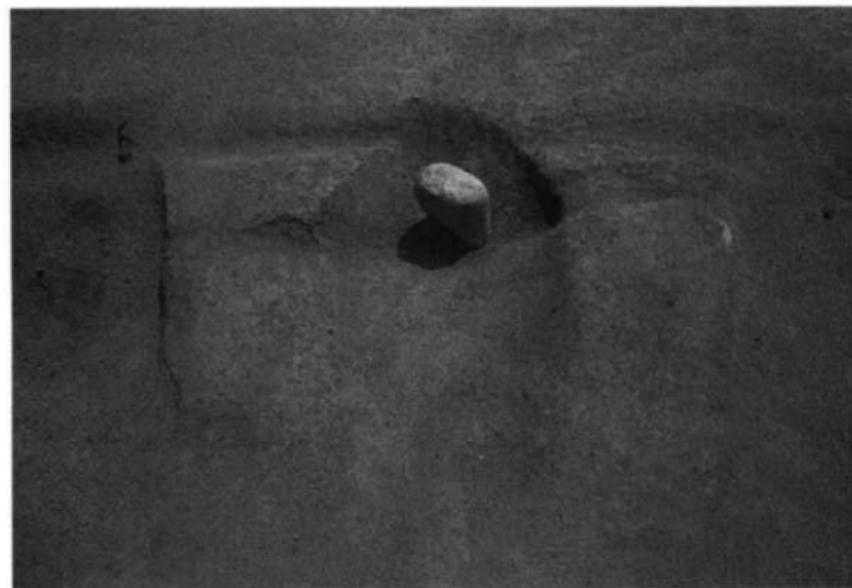
(1) 1号整穴住居跡(東から)



(2) 1号整穴住居跡カマド出土状態



(1) 2号堅穴住居跡(北から)



(2) 2号堅穴住居跡カマド出土状態



(1) 3号・4号・5号竪穴住居跡(南から)



(2) 4号・5号竪穴住居跡(南から)



(1) 5号墳穴住居跡カマド出土状態



(2) 5号墳穴住居跡カマド状遺構出土状態



(1) 6号・7号竪穴住居跡(雨から)



(2) 6号竪穴住居跡カマド出土状態



(1) 6号堅穴住居跡カマド抽下層遺物出土状態



(2) 7号堅穴住居跡(南から)



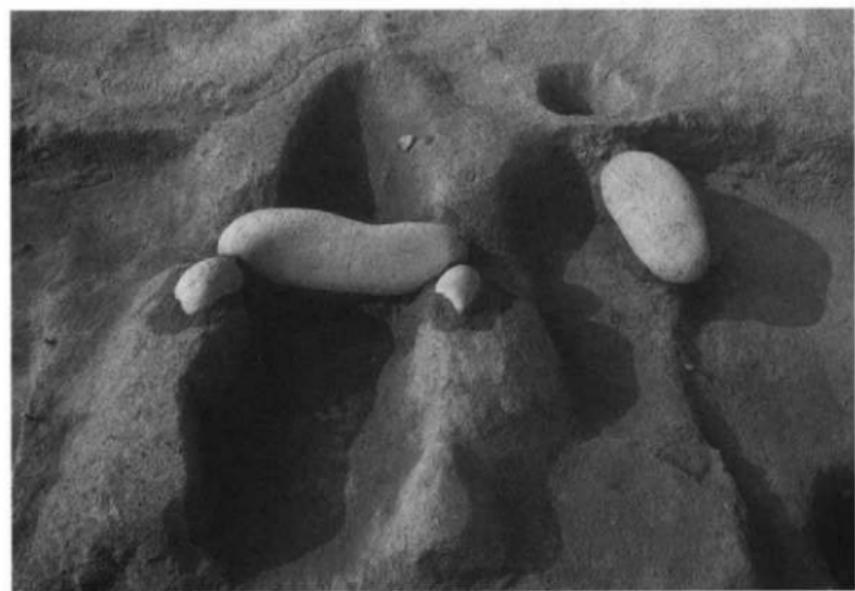
(1) 7号堅穴住居跡カマド出土状態



(2) 7号堅穴住居跡カマド下層土製品出土状態



(1) 8号・18号整穴住居跡(雨から)



(2) 8号整穴住居跡カマド出土状態



(1) 9号堅穴住居跡(南から)



(2) 9号堅穴住居跡カマド出土状態



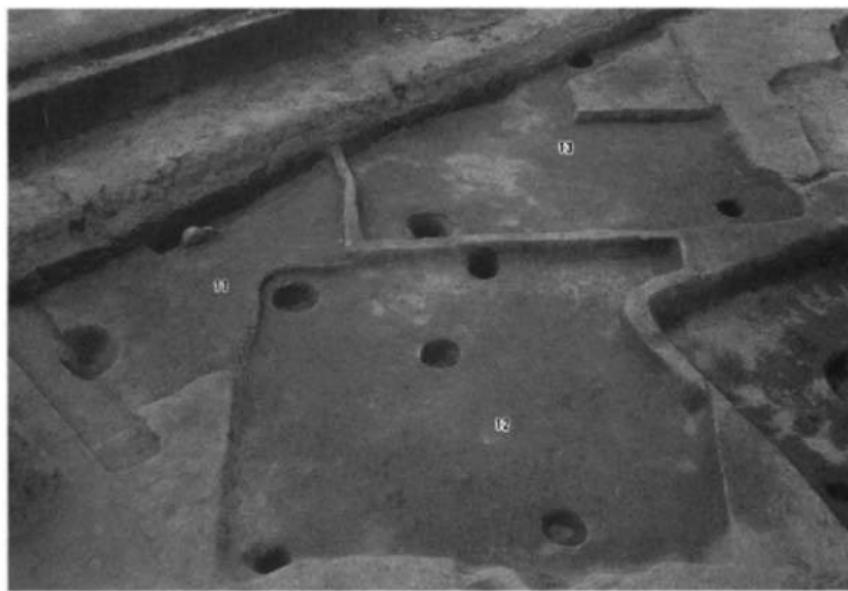
(1)9号堅穴住居跡カマド完掘状態



(2)10号堅穴住居跡(南から)



(1)10号竪穴住居路カマド出土状態



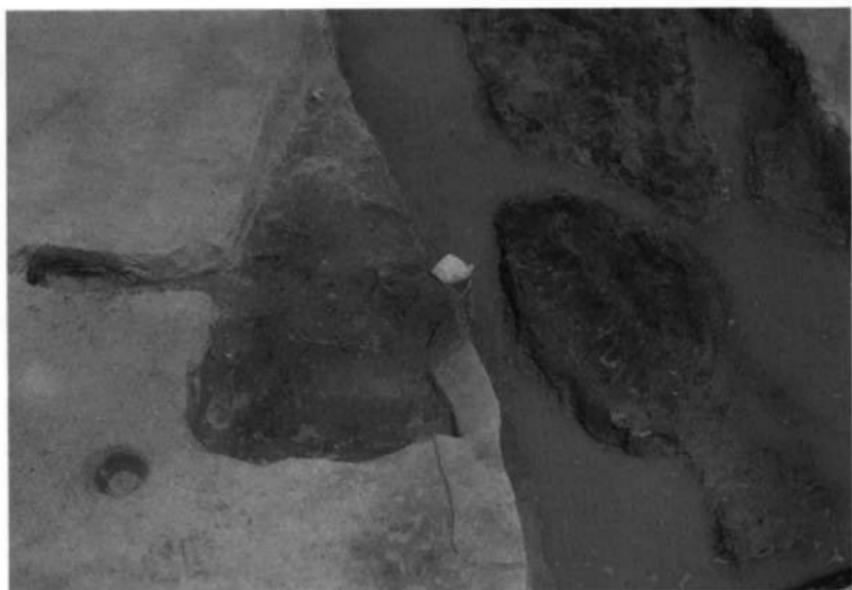
(2)11号～13号竪穴住居路(南から)



(1)14号・15号竪穴住居跡(東から)



(2)14号竪穴住居跡カマド出土状態



(1)16号竪穴住居跡(南から)



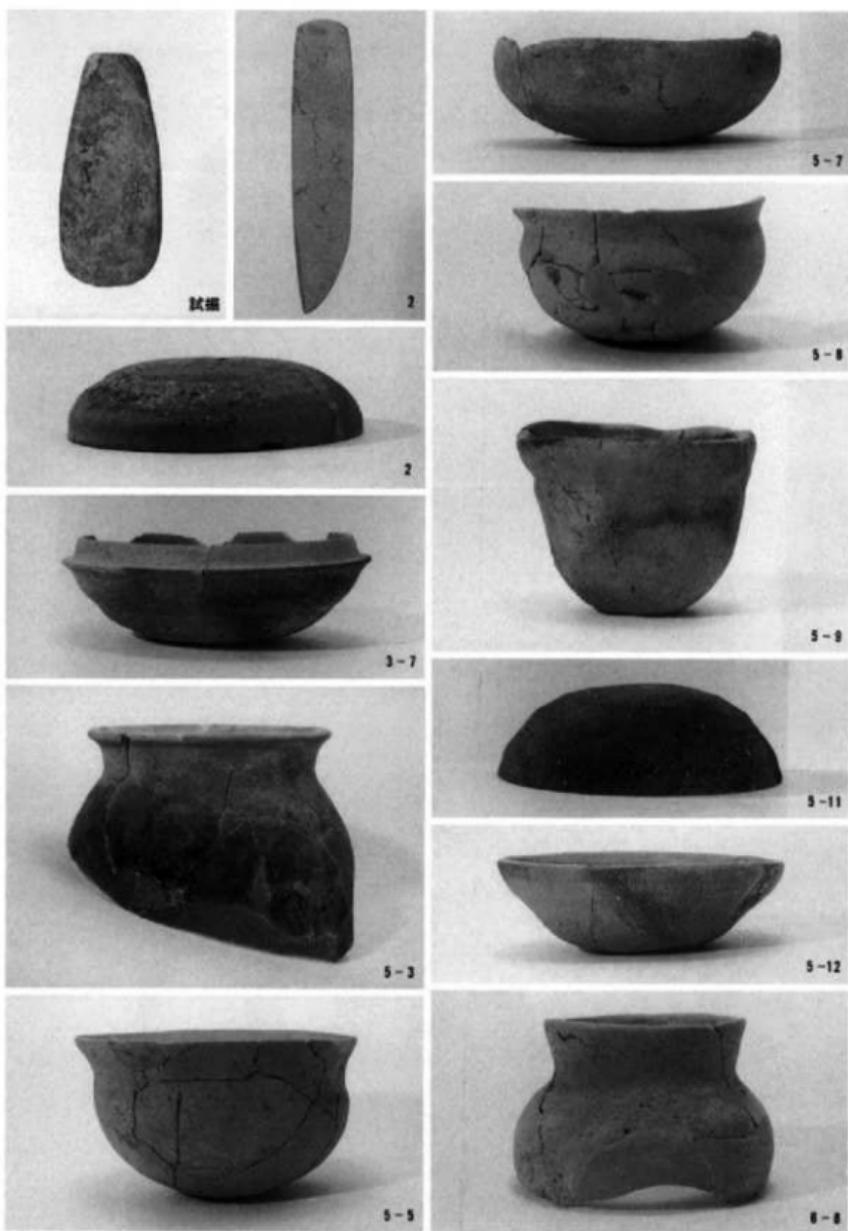
(2)16号竪穴住居跡埋上状態



(1)16号竪穴住居跡遺物出土状態



(2)17号竪穴住居跡(北から)



試掘調査、2号・3号・5号・6号竪穴住居跡出土物



8-9



8-11



8-14



8-12



8



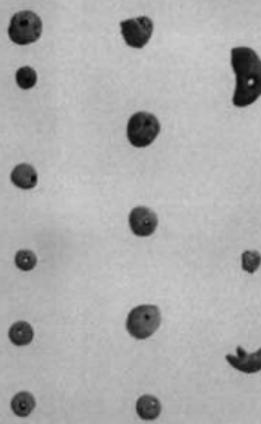
8



8-3



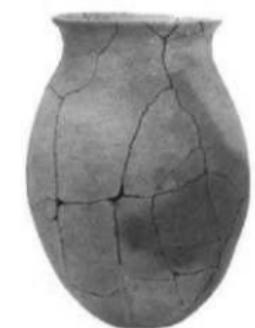
8-4



8



8-6・7



9-1



14-7



14-10



14-16



10



14-17



14-1



16-1



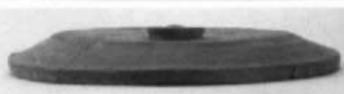
16-2



14-8



16-3



16-4

III 発掘調査の記録

2 前田遺跡の調査

1. 遺跡の概要

筑後川の北側約720mに位置する前田遺跡は、北に米山（標高590mほどの山が遠なる）を背にした山裾部にある。遺跡周辺部は從来よりいくつかの群集墳の存在が知られていたが、弥生時代の聚落の発見は少なく、以前に朝倉高等学校史学部による調査が見られる程度であった。

本跡は横断工事区把木インターにあたり、発掘調査地A～C点のB地点にあたる。調査地は山裾部を境とし、試掘調査で造構を確認している箇所を中心とする約5,000m²について発掘調査を実施した。造構検出面（詳細は後述）は北側から南側へゆるく傾斜し、発掘区東半部に住居跡4軒、掘立柱建物3棟、土壙8基、溝等を検出した。また造構面検出の段階で、暗褐色土、黒褐色土からかなりの土器片が出土した。造構は認められず、土器が須恵器、土師器であることなどから山頂部に墳墓・聚落等の造構が想定される。

2. 造構と遺物

(1) 壁穴住居跡

発掘区東半部に4軒の壁穴住居跡を検出し、北側から1～4号とした。

1号壁穴住居跡（図版21、第53図）

発掘区の東半部北寄りに検出した。住居跡等の検出状況からみて、造構面の削平が著しいことが判る。平面形は南北長4.9m、東西長4.0mで略方形をなす。壁高は北側が僅かに残っており約10cmを計測し、南壁および東・西壁は5～10cmである。主柱穴はP₁～P₂の二本を考えられ、東、西壁に建てられている。柱穴の掘方は円形で径約35cm、床面からの深さ20～30cmである。焼土等の痕跡は見られず、南壁寄りに壺片とミニチュア土器各1点が出土した。床面積約16.6m²を測る。

出土遺物

土器（第54図）

1はミニチュア土器で復原口径3.5cm、底径3.5cm、器高3.4cmを測る。底部は厚く作られ、口縁端部を内側に揃いでいるため口縁外側に指揮え圧痕が残る。内面は工具状のヘラカキで未調整である。外体部はナデ調整。胎土に雲母角閃石を含み、淡褐色を呈し、焼成は硬質である。2は口縁部を欠損する壺である。復原底径5.0cm、残存高14.5cmを測る。内部調整は横方向の刷毛目であるが、体部の径が最大となる部分は縦方向に指揮え圧痕が認められる。外体部は刷毛目、底部はナデ調整で、体部の一部に煤の付着がある。胎土には石英、雲母片を含む。

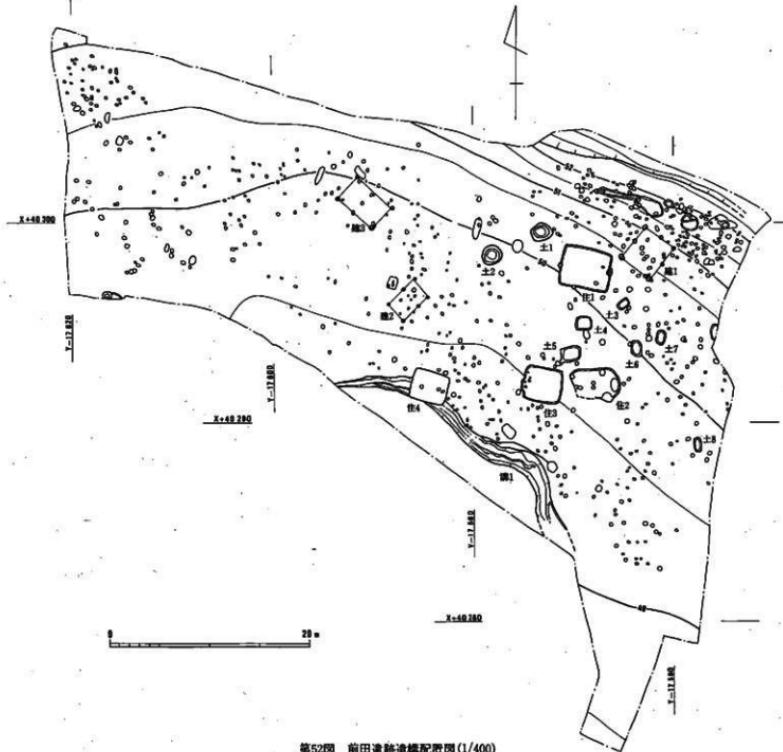
2号壁穴住居跡（図版21、第53図）

発掘区東半部には中央に検出した住居跡である。南壁は削平が著しいため検出できなかつ

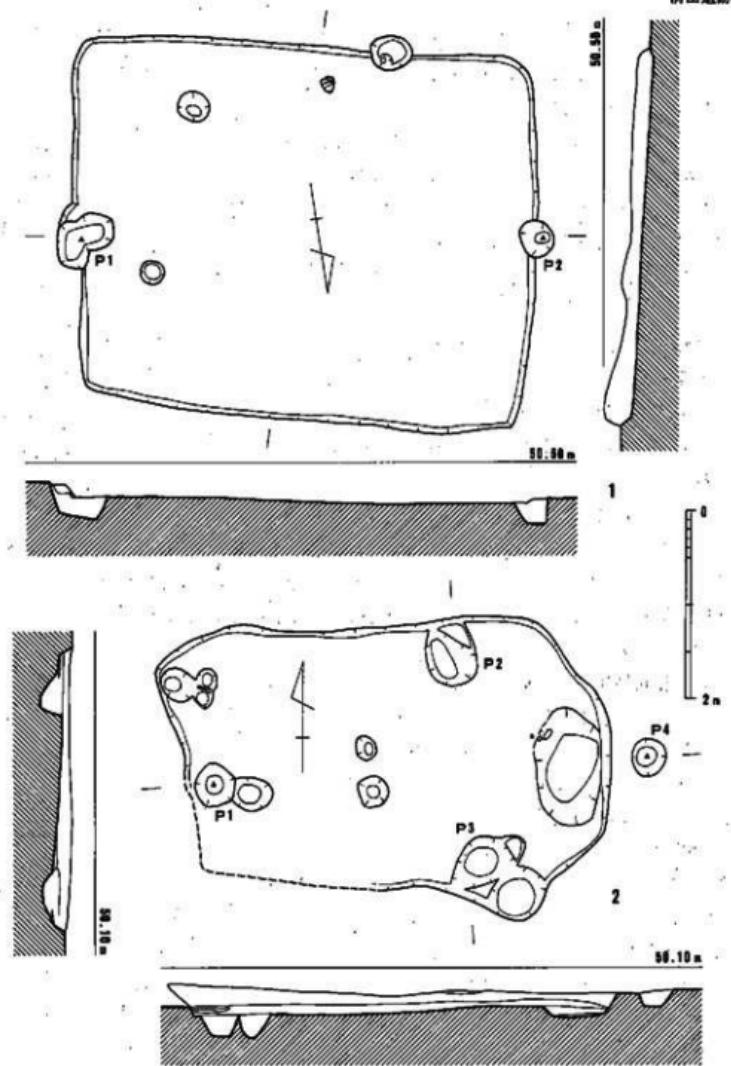
前田遺跡



第51図 遺跡周辺地形図(1/2,000)



前田遺跡



第53図 1号・2号竪穴住居跡(1/60)

前田遺跡

た。平面形は隅丸長円形を呈するが歪んでおり、規模は南北長2.9m、東西長4.5m、壁高は北側で16cmを測る。主柱穴とするP₁と対応する柱穴が検出されず、柱位置と考えられる東壁部には長径120cm、短径70cm、深さ12cmの屋内土壙が存在するため、住居跡外に検出したP₁がP₁と対応する柱穴との考えも生れる。このことからP₁、P₂の柱穴はP₁の柱位置を考慮して、主柱を支えた柱穴ではなかろうか。埋土から土器1点が出土した。

出土遺物

土器（第55図）

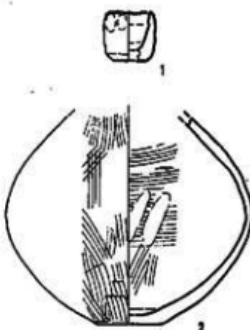
1は復原口径24.2cm、残存高3.5cmの高杯口縁である。内外面ともに刷毛目調整を行い、淡茶色で焼成は硬質である。

土玉（図版28、第55図）

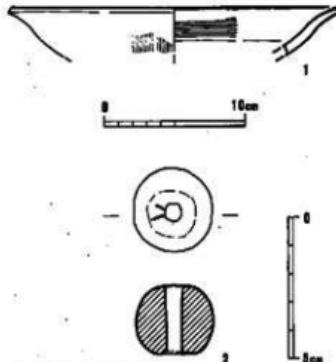
2は住居跡屋内土壙の西側床面上から出土した。球状の土玉で中央に径0.5cmの孔が穿たれている。穿孔を軸とすると、高さ2.5cm、最大径2.9cmを測る。土玉は火を受けておらず、自然乾燥によるものと思われ、所々にひび割れが観察できる。焼成は硬質である。

3号竪穴住居跡（図版22、第56図）

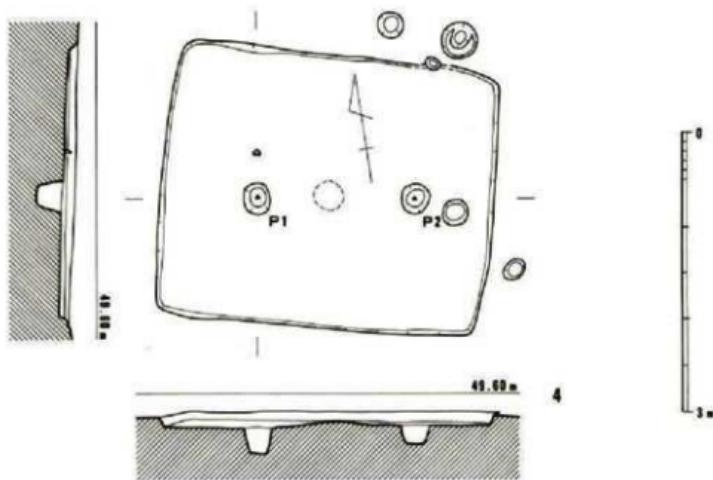
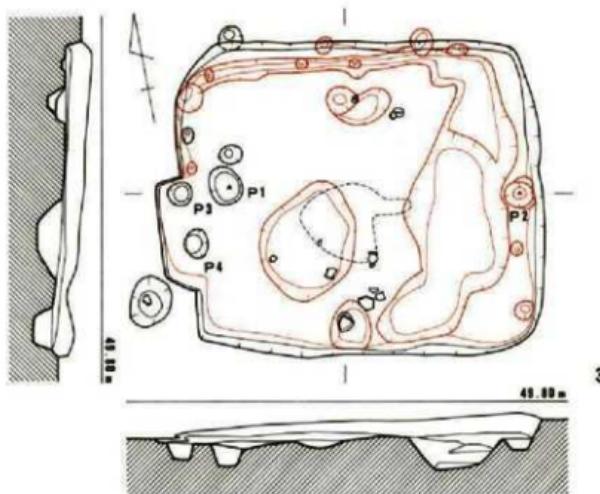
2号住居跡の西側に検出した。当住居跡もかなり削平されているが、平面形は略方形をなす。規模は南北長3.3m、東西長1.9m、北壁高18cm、東壁高21cmを測る。P₁、P₂が主柱穴で、深さ15~25cmである。西壁部に幅1.1mの張出し部があり、住居内にはP₁、P₂が検出された。張出し部は出入口と想定され、P₁、P₂はその支柱と考えられる。北壁を切込むように4個の柱穴が並ぶが、P₁、P₂に対する垂木と考えるには飛躍し過ぎであろうか。床面中央部には径80cm程の埋土があり、かなり加熱を受けた炉跡である。付近に土器片数点を検



第54図 1号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第55図 2号竪穴住居跡
出土土器・土玉実測図(1/4・1/2)



第56図 3号・4号竪穴住居実測図(1/60)

前田遺跡

出した。また北壁から東壁寄りに約10cmの貼床がみられた。北壁寄りでは幅約20cm、深さ5cmの壁小溝を検出し、その中に径10cm、深さ10cm程の杭穴が6個確認された。杭穴は貼床の前に掘込まれている。床面積約12.3m²である。

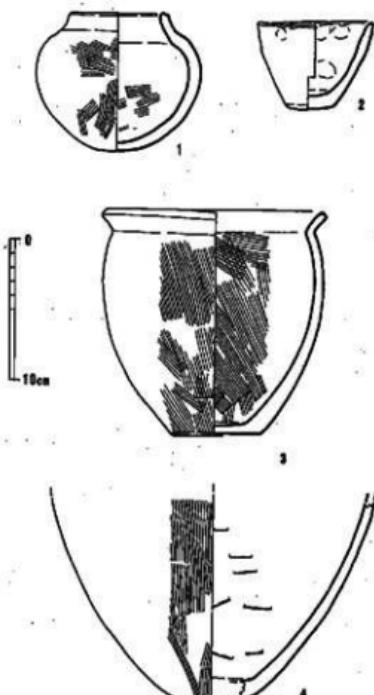
出土遺物

土器（図版28、第57図）

1は口径7.2cm、器高9.6cmの小壺である。器内は厚く、体部内外面は刷毛目の調整である。口縁部を内弯気味にや、薄くしており、ヨコナデ調整をみる。全体的に黒茶色を呈し、胎土中に雲母片を含む。2は口径8.5cm、底径3.8cm、器高6.2cmの手捏土器である。器内は底部から口縁部まで均一であるが、口縁端部をや、外反気味に作っている。内面の各所に指頭圧痕が認められる。底部はナデ調整による。胎土中に赤褐色の砂粒を含み、焼成は硬質である。3は口径16.3cm、底径6.5cm、器高15.8cmの壺である。口縁部はく字状に外反し、体部上位から底部にかけて器肉が肥厚する。口縁部はヨコナデ、内外体部および底部は刷毛目の調整である。外体部の一部に黒斑、煤等が付着する。胎土中に角閃石を含み、焼成は硬質である。4は体部上位を欠損する壺である。復原底径5.5cmで、外体部は刷毛目の調整。内面は工具痕が数ヶ所認められる。淡黒茶色を呈し、胎土中に角閃石、雲母片を観察できる。

4号竪穴住跡（図版24、第56図）

3号住跡の西側にあり、溝と切り合って検出された。住跡と溝との関係は明らかに住跡が後出するものである。削平の著しさは当住跡も同様で平面形は東西に長い長方形を呈す。規模は南北長2.9m、東西長3.6m、深さ10cmである。主柱穴はP₁、P₂の二本柱で、床面から深さ30cmを測る。床面中央部には径30cmの円形を呈する炉跡が認められた。床面積約10.5m²



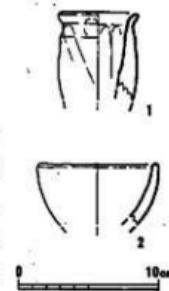
第57図 3号竪穴住跡出土土器実測図(1/4)

である。手捏土器が2点出土した。

出土遺物

土器（第58図）

1は底部を欠損する手捏土器の範である。復原口径8.8cmで、内外面共に粗雑なナデ調整を施す。全体的に黒茶色を呈し、胎土中に石英、雲母、砂粒等を観察できる。2は復原口径5.8cm、残存高6.2cmを計測する。口縁端部は強く外反し、体部下位へいくにしたがい器肉が肥厚する手捏土器である。口縁部はヨコナデ、内・外体部は強いナデ調整をみる。外体部に煤が一部付着する。全体に黒茶色で、胎土中に雲母、微石英等を観察できる。



4号竪穴住居跡出土土器
実測図(1/4)

(2) 捜立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第59図）

発掘調査区の東側に検出した東西2間、南北2間の建物である。柱間寸法は南北が約1.95～2.0m、東西が1.8m等間で、南側梁行の中央柱のみが若干南へ寄っている。東西長3.58m、南北長3.96mで南北が若干長い。掘方は径30～40cm、深さ20～40cmを測る。長軸の南北柱列で方位をとるとN-37°-Wである。

2号掘立柱建物跡（第59図）

発掘区中央部に検出した南北1間、東西2間の建物である。柱間は東西2間のうち西側の1間が1.8m等間であるが、東側1間は1.94mを測る。掘方は径約20cm、深さ約20～30cmであり、小屋根の建物であろう。長辺を主軸とすると方位はN-45°-Wとなる。出土遺物は1号建物同様発見されなかった。

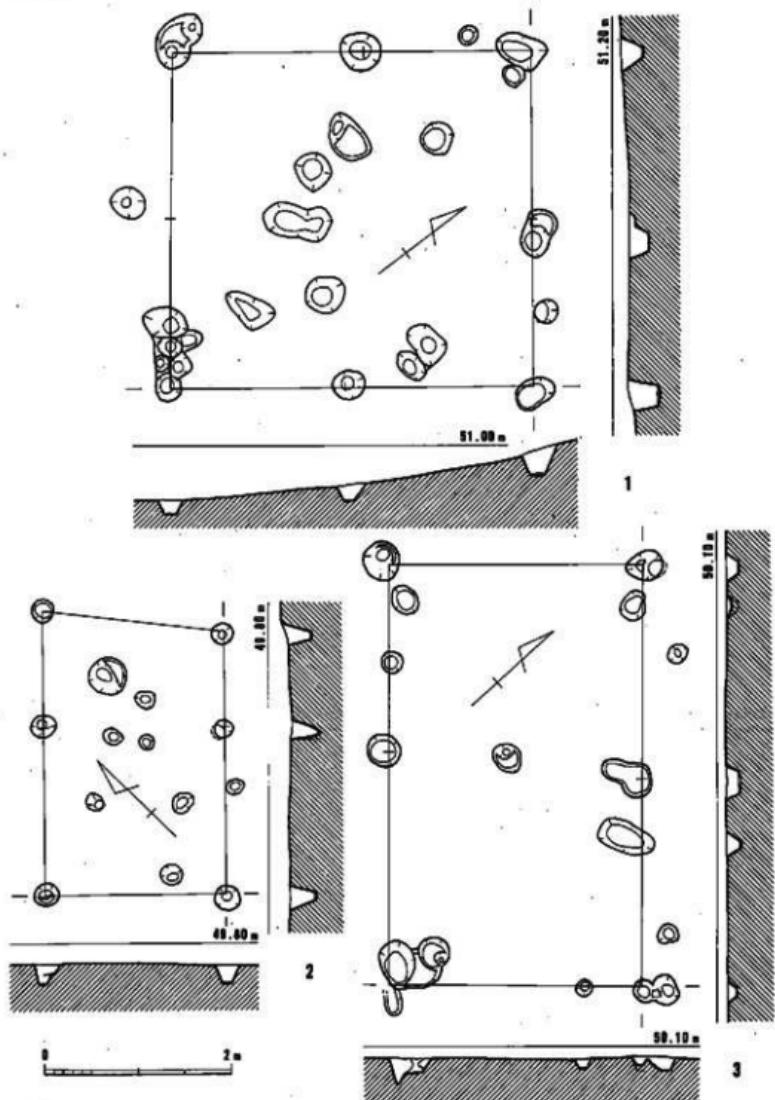
3号掘立柱建物跡（第59図）

2号建物の北側に検出した東西2間、南北1間の建物である。柱間寸法は南北梁間が2.7m等間であり、東西列は南側が2.0m、2.46m、北側が2.26m、2.2mと若干の出入りがある。掘方は円形で径20～40cm前後、深さ10～30cmを測る。建物は東西4.46m、南北2.7mで、2・3号建物の梁・桁行の列を同じくする。長辺を主軸とすると方位はN-46°-Eである。

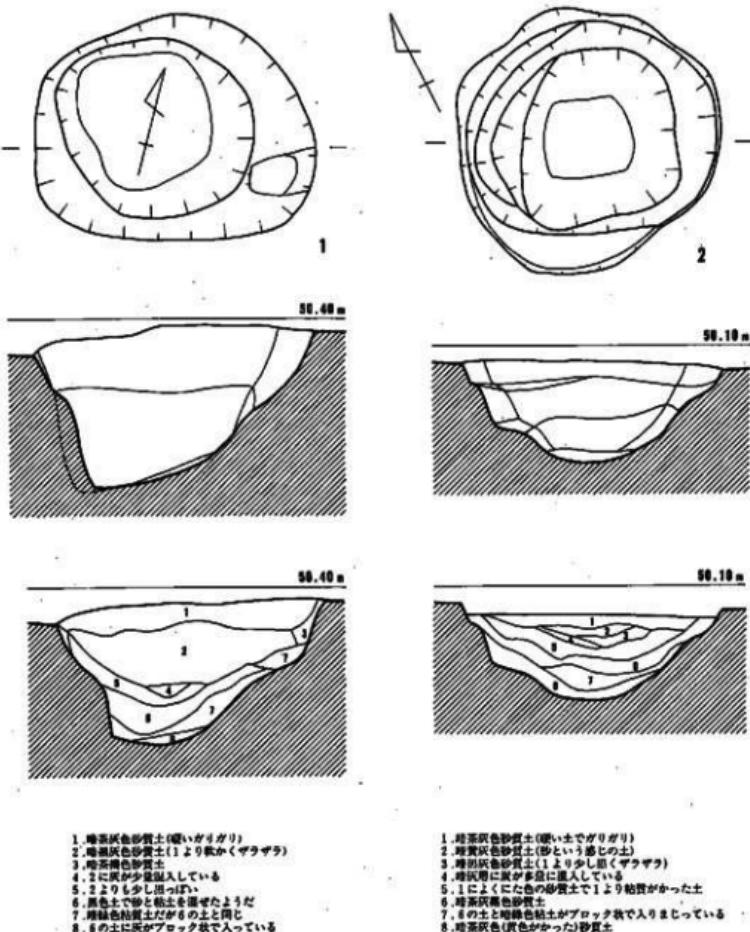
(3) 土壙

1号土壙（図版25、第60図）

前田遺跡



第59図 1号～3号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第60図 1号・2号土塁跡実測図(1/40)

前田遺跡

1号住居跡の西側に検出した。平面形は略椭円形をなすが、歪みが著しい。長径2m、短径1.6m、深さ1.1mを測る。掘方は2段に掘られ、上端から約50cm下位で狭くなり、底面は西方に深く傾斜している。土層は第60図に示すとおりであるが、最下層⑧に炭化物が認められたことから人為的に埋められたものであることが判る。出土遺物は認められなかった。

2号土壤（図版25、第60図）

1号土壤から西に約4m離れて検出した土壤である。1号と同様円形の平面形を呈し、長径1.9m、短径1.8m、深さ70cmを測る。掘方は西壁部で3段、東壁部で2段認められた。断面は摺鉢状で、底部は略方形で平坦である。土層は8層に分けられ、暗黄灰色砂質土、暗黒灰色砂質土の互層に粘土ブロックが混在する層で、④には炭化物が多量に認められた。

出土遺物

石器（第72図）

砥石(1) 硬質砂岩製の砥石片で、土壤上端部から出土した。砥面は3箇所あり、擦減った状況からかなり使用されたことが伺われる。また側面には鋭利の刃を研いだと考えられる4本の沈線を観察できる。

3号土壤（図版25、第61図）

1号住居跡の東南側に検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.15m、短辺0.8m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色で出土遺物はない。長辺を軸とするとN-50°-Eである。

4号土壤（図版25、第61図）

1号住居跡の南側に検出した。略方形の平面形を呈し、規模は長辺1.45m、短辺1.2mを測る。床面は歪んだ落ちが2ヶ所認められ、最深部で25cmである。方位はN-95°-Eである。

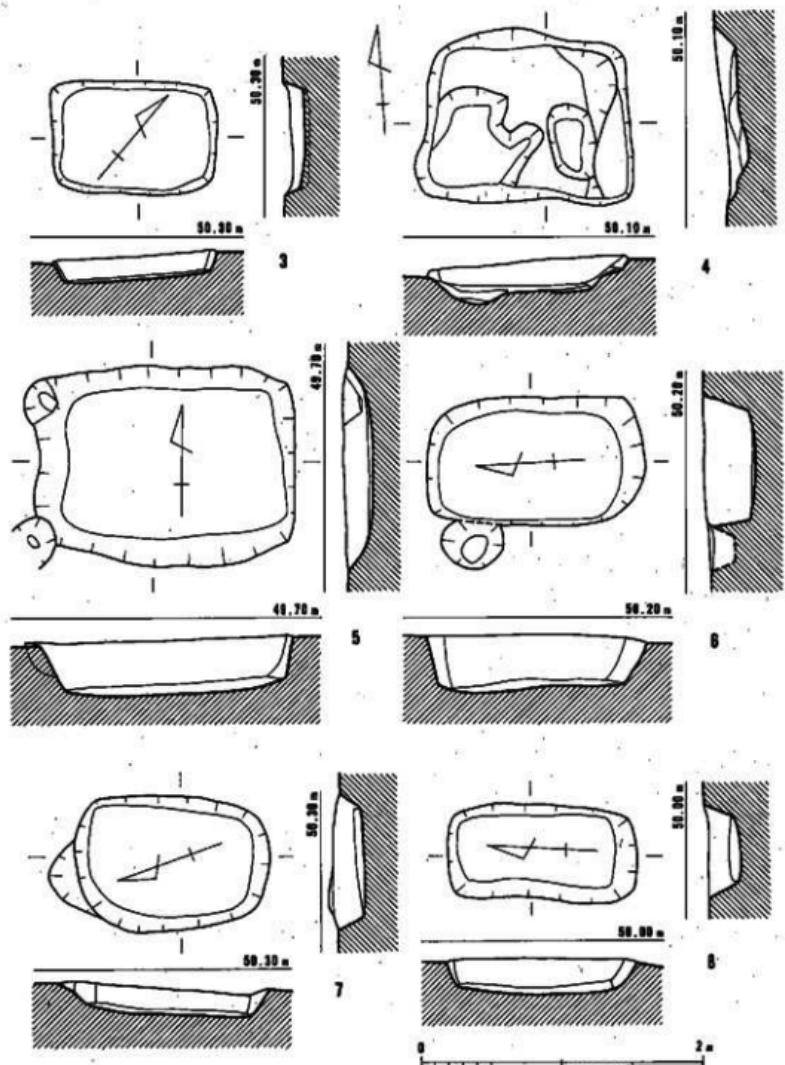
5号土壤（図版26、第61図）

4号土壤の南側に検出した。平面形は略長方形を呈し、規模は長辺1.8m、短辺1.4m、深さ40cmを測る。床面は平坦である。方位はN-90°-Eである。

6号土壤（図版26、第61図）

2号住居跡の東側に検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.55m、短辺0.9m、深さは中央部で35cmを測る。土壤の埋土は暗褐色土で遺物は認められない。方位はN-10°-Eである。

前田遺跡



第61図 3号～8号土壤跡実測図(1/40)

7号土壙（図版26、第61図）

6号土壙の東側に検出した。隅丸長方形の平面形を呈し、規模は長辺1.4m、短辺0.95m、深さ18cmを測る。埋土は黒褐色で、下層に炭化物が認められた。方位はN-20°-Eである。

8号土壙（図版26、第61図）

発掘区の東壁寄りに検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.35m、短辺0.68m、深さ24cmを測る。最下層に一部炭化物が認められた。方位はN-10°-Wである。

(4) 溝状遺構（第52図）

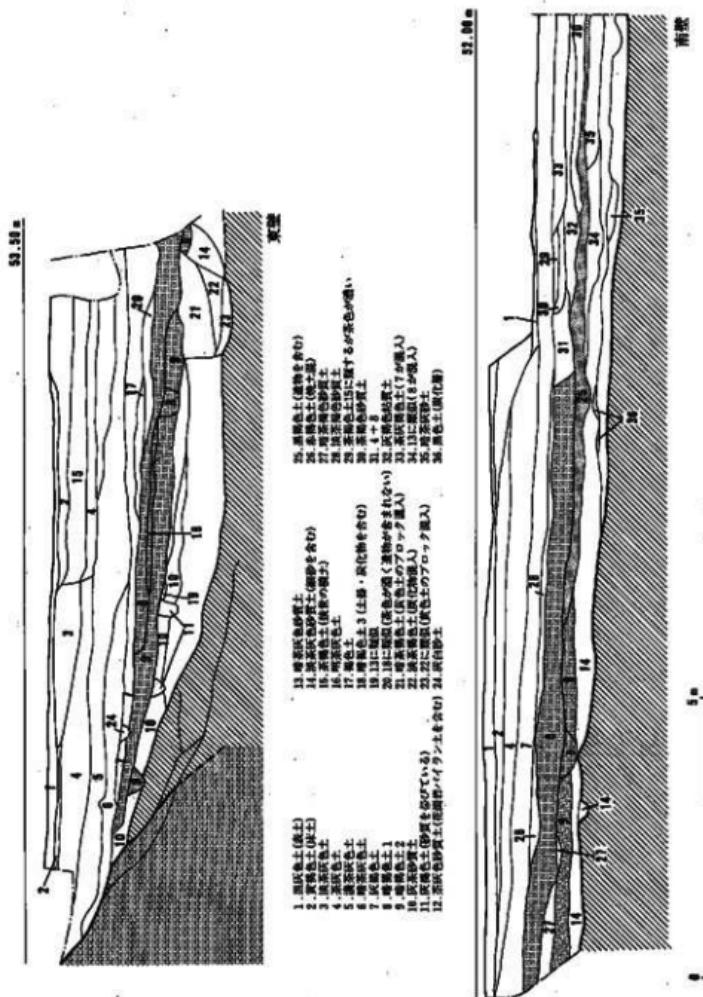
発掘区の南端に溝1条を検出した。溝は4号住居跡と切合い関係にあり、4号住居跡が後出する。溝は西から東南へ弓状に検出したが、南に行くにつれ徐々に幅広くなり、傾斜はゆるく西から東南へ流れている。西端部で幅1m、深さ28cm、中央部で幅1.5m、深さ51cm、東端で幅2m、深さ60cmを測る。埋土は上・下2層に分かれ、上層は黒灰色砂質土、下層は暗褐色砂質土で、共に出土遺物は認められなかった。

(5) 土層（第62図）

遺構面は北側（山裾）から南側にかけてゆるい勾配をなし、土層は東壁について観察した。詳細は第62図に示すとおりであるが、南側では表土から約3mで弥生時代の遺構面となり、かなり厚い堆積状況がみられた。

東壁は長さ約30mを観察した。地山は花崗岩バイラン土で、北側隅では一部露出し、南側へ約30度の勾配で低くなる。層は36層に分けることができた。表土直下約1.5mで暗褐色土となる。暗褐色土は弥生期の遺構面から約1m上に堆積し、北から南へ幅約50cmで帯状に広がりをみせていた。暗褐色土を細分すると3層（暗褐色土1～3）となり、最も土器を多量に含んでいた層が⑩暗褐色土3である。層序ではこの暗褐色土下層に⑨暗褐色土2、⑪灰褐色土等の柱穴を確認できるが、面上に遺構検出を図った結果、ピットを3～4個検出したのみで、主な遺構は検出されなかつたため出土遺物の採集にとどめた。⑨⑩の暗褐色土は遺物の混入は僅少で、出土した⑩暗褐色土3の遺物が歴史時代の須恵器、土師器を主体に出土していること、また暗褐色土が西半部への広がりがないことなどを考慮すると、山頂部に墳墓あるいは集落跡等の存在が考えられ、それらの跡地の土砂が後世堆積したものと想定される。遺構面は茶灰色砂質土で、遺物の含有はなく、住居跡、土壙等はこの層に切り込まれている。

さらに東壁の中間部から南側へ観察すると、表土から暗褐色土までの層序は同じであるが、東壁のほぼ中央から南方にかけて黒褐色土の堆積が認められた。この層は暗褐色土より下層で、最も堆積の厚い部分で約30cmあり、南方になるにつれて厚さが薄くなり約5cmを測る。黒褐色



第62図 東壁・南壁土層実測図(1/100)

前田遺跡

土から出土した遺物の多くは弦文式土器で、暗褐色土3とは明瞭に出土土器を分けることができた。この黒褐色土の包含層から約50cm下位が造構面となり、その間の淡茶灰色砂質土層には遺物は含まれないため、黒褐色土の堆積状況は先の暗褐色土1~3層と同様山頂部からの流れがあり、その堆積と想定するものである。

また、造構面（茶灰色砂質土）より下層は淡茶灰色砂質土が厚さ約130cm、青灰色砂土約50cmの層をなし、これより下層は黒色粘土となる。すべて遺物は含まれず、南端部ではそれがさらに深くなる。

出土遺物

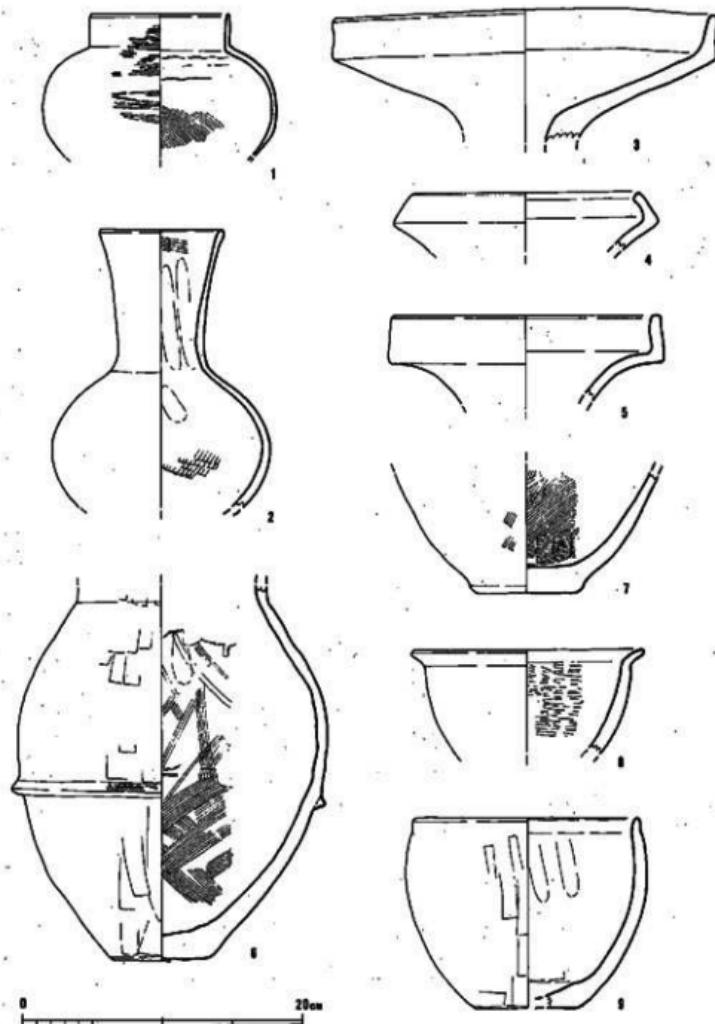
黒褐色土層出土

土器（図版28・29、第63~65図）

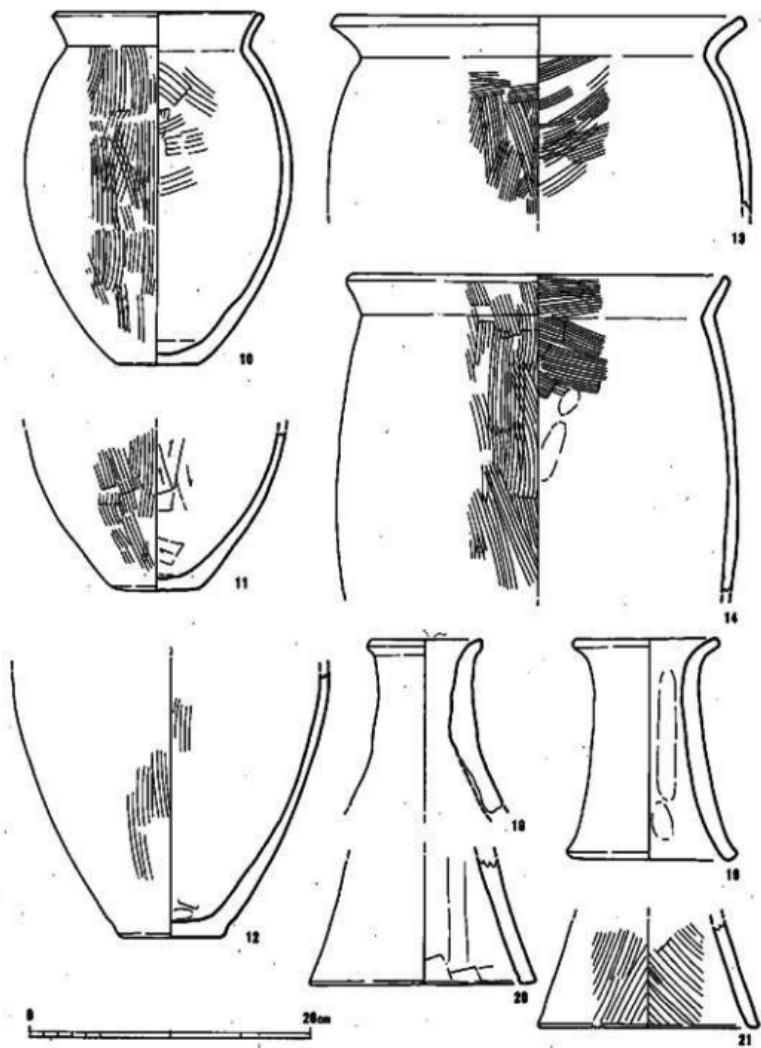
壺（1~7） 1は復原口径10.2cmの短頸壺である。口縁部は直立し、内面頸部に後が入る。体部の胴張りは強く、底部は欠損している。全体に0.5cmの器内で薄く仕上げており、口縁部はヨコナデ、外体部はヘラミガキの調整である。内面上位に粘土紐の痕跡が観察できる。淡茶色で胎土中に赤褐色細砂粒および雲母片を見る。2は復原口径9.2cm、残存高19.4cmで底部を欠損する長頸壺である。頸部から胴体部にかけなめらかな曲線で仕上げており、頸部と内面の一部に刷毛目痕が残っている。また頸部は指ナデ調整である。全体に器肉は薄く、胎土中に石英、雲母片を含み、焼成は硬質である。3~4は壺口縁である。3は復原口径27.9cmで、高杯状の器形をなすが頸内部は底状の器形でないため口縁部として報告した。全體に磨滅しており赤褐色を呈す。4は口縁をく字状に内弯し、復原口径16.6cmを測る。淡茶褐色をおび胎土中に角閃石、石英等を含む。5は復原口径19.6cmで、口縁は比較的直立する。口縁部はヨコナデ調整で内面に指圧痕が目立つ。6は口縁を欠損する壺である。くびれ部の径を復原すると13.9cmとなる。胴体部上位が最大径となり21cmである。底部から10.5cm上位に断面三角形の突帯が巡る。外体部全体に工具痕がみられ、内面は強い刷毛目調整である。胎土中に赤褐色の細砂粒を含み、赤茶色を呈す。焼成は硬質である。7は6に類似する壺の底部である。底部径は6と同様7cmを測る。

鉢形土器（8） 復原口径17.0cmで、口縁部をく字状に強く外反する鉢状の土器である。体部の器肉は比較的厚く、工具で叩いた後にナデ調整を行っている。胎土中に石英、雲母片を含み、全體に赤褐色を呈す。

壺（9~14、15~17） 9は復原口径16.5cm、器高13.4cm、底径7.9cmの広口壺である。底部の器肉をや、厚く作り、口縁部は体部をや、振み上げた様にわずかに外反気味の口縁を作っている。内外面共に体部は工具痕とナデ調整をみる。胎土中に雲母、石英片を含み、全體に淡茶白色をしている。10は復原口径15.4cm、底径5.9cm、器高24.7cmの壺である。口縁はく字状

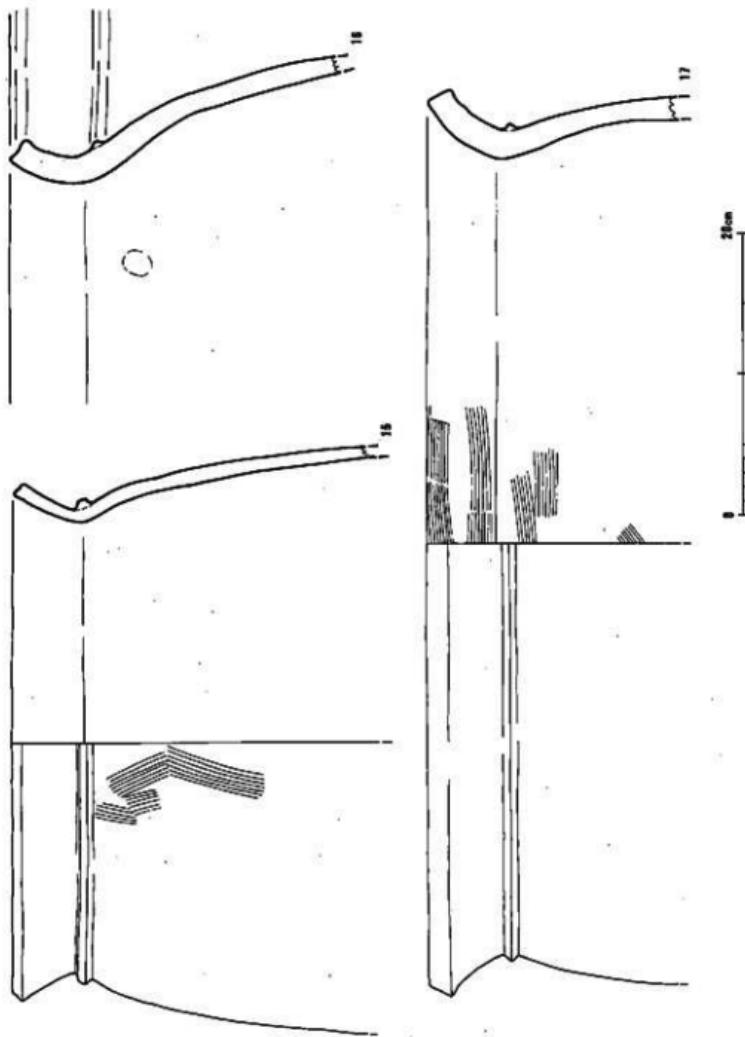


第63図 黒褐色土層出土土器実測図①(1/4)



第64図 黒褐色土層出土土器実測図②(1/4)

第65圖 黑褐色土層出土土器共四圖③(1/4)



前田遺跡

に外反しヨコナデ調整をみる。内外体部は丁寧な刷毛目の調整である。胎土は雲母片等を含み、焼成は硬質である。11、12は10の器形に類する底部である。11は外体部に黒斑が目立ち、強い刷毛目調整をみる。共に焼成は硬質で11から復原底径6.8cm、7.6cmを測る。13、14は胴体から口縁部の破片である。復原口径は順に29.4cm、27.8cmを測る。13は口縁をく字状に強く外反させ、胴体部の張りも強い。13、14共に外面は丁寧な刷毛目調整を施し、14には指圧痕と黒斑が観察できる。15~17は頸部に断面三角形の貼付けの突帯を有する比較的大きな壺片である。15は復原口径35.6cmで、胴体部の張りはなく、数ヶ所に刷毛目調整痕をみる。16は頸部が弓状に外反し、器肉の厚い壺である。17は16に比較して口縁部を強く外反する。頸部に小さな貼付け突帯を有し、器肉は厚い。復原口径63.9cmを測る。15~17共に淡黒茶色を呈し、焼成は硬質である。

器台（18~21） 18は体部中位でくびれて、受け部がわずかに聞く器台である。下端は欠損しており、受け部復原径8.2cmを測る。受け部はヨコナデ調整、内外体部は指圧の強いナデ調整である。胎土は赤褐色の細砂粒、雲母片を含み、焼成は硬質である。19は体部上位でくびれ、受け部は強く外反する。規模は受け部径10.8cm底径12.8cm、器高15.6cmを測る。くびれ上位の受け部周辺はヨコナデ調整で、開脚する内外体部は縱方向の指ナデ調整である。また脚端も受け部同様ヨコナデ調整である。胎土に白色、赤褐色の微砂を含み、全体に淡茶色を呈し、焼成は硬質である。20、21は脚部片である。20は復原底径16.4cmで内外体部の調整は工具の後に指ナデによっている。21は復原底径16.0cmを測る。内外体部は放射状に丁寧な刷毛目調整を観察できる。共に砂粒、雲母片等を含み、焼成は硬質である。20、21の器形は脚部が若干狭くなるかもしれない。

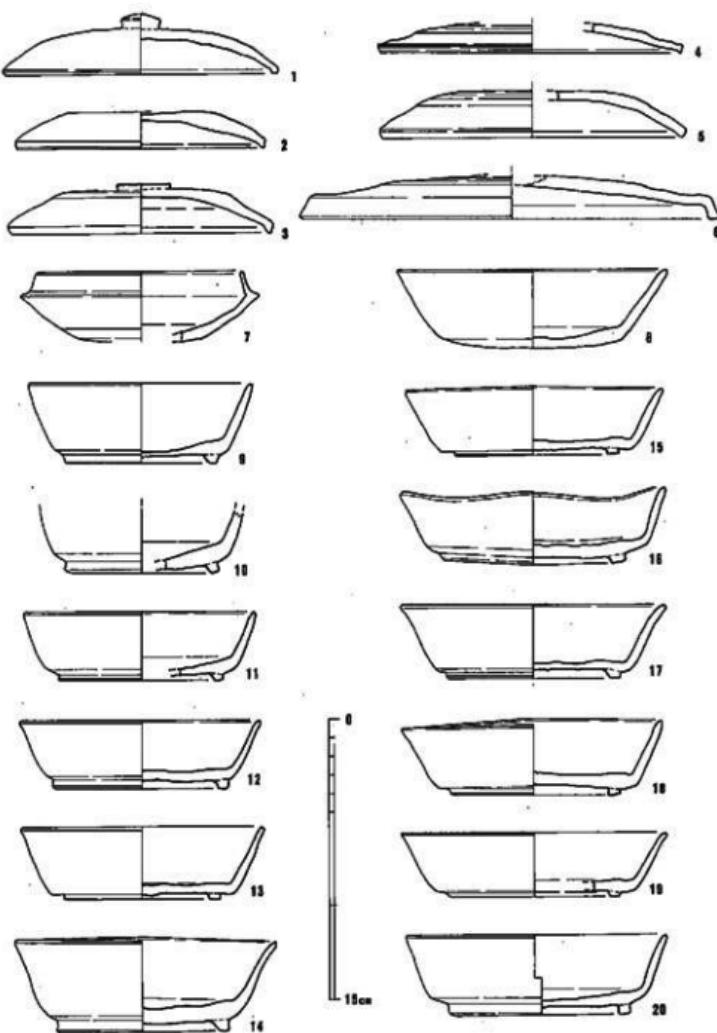
石器（第72図）

砥石(2) 粘板岩製の仕上げ砥石で、かなり薄くなるまで使用したものである。一部に煤が付着し、胎土は暗緑灰色で外面は黒灰色である。

暗褐色土層出土

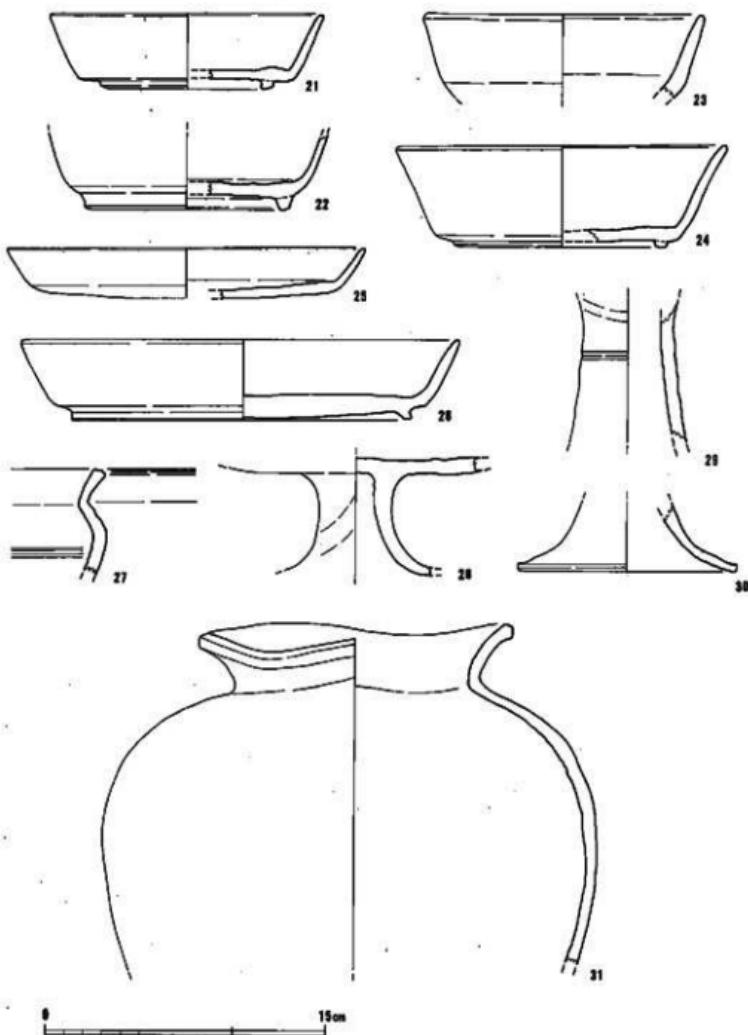
須恵器（図版30・31、第66~68図）

坏蓋（1~6） 1は天井部に宝珠形の擦を貼付する蓋で、復原口径14.9cm、器高3.2cmを測る。口唇部は丸く、内側に稜線が入る。外体部はヨコナデ、内面はナデ調整をみる。胎土中に大粒の石英粒を含む。2は口径13.1cm、器高1.9cmで擦を欠損する。3は偏平な擬宝珠形の擦を貼付し、口径14.1cm、器高2.6cmを測る。2、3共に焼成は硬質である。4、5は小片の蓋で、口径は4が16.0cm、5は15.8cmである。4は器高が低い。6は復原口径22.4cmで、天井部の擦を欠く。口縁端部は屈曲し、天井部はヘラ削り、外体部中位から内面はヨコナデ調整で



第66図 暗褐色土層出土土器実測図①(1/3)

前田遺跡



第67図 暗褐色土層出土土器実測図②(1/3)

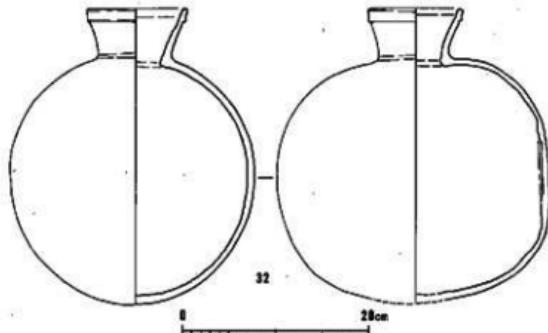
ある。胎土中に細砂粒を含み、焼成は軟質である。

坏身（7～24） 7は復原口径10.5cm、器高3.7cmを測る。受け部の張りはなく、口縁は薄くや、内弯気味に立上る。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、体部は強い横方向のヘラ削りである。受け部のある坏身はこの1点だけであり、おそらく混在したものであろう。8は口径14.3cm、底径7.9cm、器高4.2cmを測る。内面底部に浅い稜をもつ。体部から口唇部は直線的に立上がる。内外体部はヨコナデ、底部は粗雑なナデ調整である。胎土中に白色砂粒を含み、焼成は硬質の無高台坏身である。9から24は高台付坏身で、口径の大きい順に配列した。9は復原口径12.1cm、器高4.25cmで内底の器肉が薄く、底部から体部に立上る箇所が肥厚する。高台は低く直立する。10は破片で、体がもう少し外側に開く器形となろう。11は復原口径12.3cm、器高3.6cm、12は復原口径12.8cm、器高3.6cmを測る。12は体部延長上に丸みの高台が貼付し、口縁は薄くや、外反する。底部はヘラ切離しで、焼成は硬質。13は復原口径13.1cmと前者（9～12）に比較して若干大きくなる。貼付高台は低く、外底の内側に付く。外体部に自然軸が一部認められる。14は口径が14.2cmとなる。体部から口縁にかけ外反し、薄く仕上げている。底部は肉厚で、丸味をもつ高台が貼付され、胎土中に石英粒を含む。15～20は口径が順に13.5cm、14.0cm、14.2cm、14.1cm、14.3cm、13.8cmとほぼ平均した数字で、器高も3.5cm～4.2cmを測る。貼付高台は低く内側に八字形状に付くもの15～17、ほぼ直立するもの18～20がある。また口縁部が外反するもの17、19、20がある。これらはすべて焼成は硬質で、胎土中に白色砂粒を含み、内面はナデ、外体部はヨコナデ、底部はヘラ切離しの調整が観察できる。21～23も前者と同様である。21は復原口径14.5cm、器高4.0cmで、高台は内側に付き、ほぼ直立に貼付する。調整は前者と同様である。22、23は破片で、22は復原底径11.1cm、23は復原口径14.8cmを測る。24は一回り大きい高台付坏身である。復原口径17.4cm、器高5.4cm、底径11.2cmを測る。高台は低く貼付による。体部から口縁部にかけて器肉は均一であるが、口唇部がやや外反する。胎土に細砂粒を含み、焼成は硬質。

皿（25、26） 25は復原口径19cm、器高2.6cmの皿である。底部は磨滅が著しいが、ヘラ削り調整である。全体に黒灰色で焼成は軟質。26は外向する低い貼付高台を有する大皿である。復原口径23.6cm、底径18.3cm、器高4.4cmを測る。底部は1.3cmと肥厚する。胎土中に白色石英粒を含み、焼成は硬質である。

壺（27） 広口壺の破片である。口縁部と体部はく字上に屈曲し、口縁端部は若干肥厚する。内外面共にヨコナデ調整を施し、黒灰色を呈す。

高坏（28～30） 28は坏部、脚部を欠損する。形態からみて坏部の径は大きいものであろう。脚部は八の字状に開き、外体部ヨコナデ、内面はナデ調整を観察できる。焼成は硬質。29、30は脚部片で、29は自然軸が施され、中央に一条の沈線が入る。30は八の字状に開脚する脚で、復原底径11.6cmを測る。



第68図 暗褐色土層出土土器実測図③(1/6)

要 (31) 口縁部は強く外反し、全体に歪んでいる。頸部から張出した体部の最大径26cmを測る。外体部はカキ目調整、内面は同心円文の叩き痕が観察できる。口径は16.0cmで、ヨコナデ調整。胎土中に大粒の砂粒を含み、焼成は硬質である。

提撰 (32) 口径10.4~11.0cmとや、歪んでおり、器高31.2cmを測る。口縁部は直ぐに立上り、肩部から胴部にかけて平行の叩きがあり、その上を底部までナデ調整で仕上げている。内面はナデによる。口縁部は丸く仕上げており、外部に下向気味の低い三角形の突帯状のものが巡る。ヨコナデ調整である。胎土中に砂粒を含み、色調は暗灰色で焼成は硬質である。

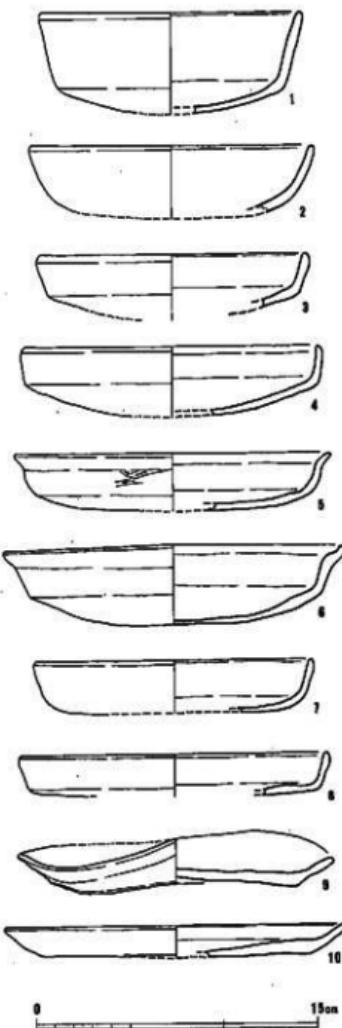
土師器（図版31、第69~71図）

环身（1~6）1は復原口径14.2cm、器高5.3cmで、底部は丸底風に作っている。器肉は薄く、口縁端部を丸く仕上げ、胎土中に雲母、石英を含み、淡褐色を呈する。全体に磨滅が著しいため調整は定かでないが、外体部はヨコナデ、内面はナデ調整であろう。2は底部から体部にかけ丸味をもって立上り、復原口径15.4cmを測る。淡褐色を呈す。3、4は底部を丸底風に作り、体部はやや内弯気味に立上る。口径は3が14.4cm、4は16.2cmを測る。共に磨滅が著しく調整は明らかでないが、底部は削り調整、口縁部はヨコナデによっている。淡褐色で赤褐色の砂粒を所々に見る。5、6は口縁部をゆるく外反する特徴をもち、特に6は外反する。口縁端部を内側にかるく掘み、丸く仕上げている。共に器肉は薄く、内部ナデ、外体部ヨコナデ調整で、底部は削り仕上げである。5は口径17.7cm、器高3.0cm、6は口径が18.1cm、器高4.3cmを測る。共に胎土中に雲母、砂粒を含み、焼成は硬質で淡褐色を呈する。

皿（7~10）7、8は底部を平坦にし、体部は斜立する。全体に薄く仕上げ、磨滅が著しい。7は復原口径15.0cm、器高2.8cmを測るが、ここでは口径に対して器高が低いこと、底部が平坦なことから「皿」であると報告した。8は復原口径16.7cm、器高2.3cmである。焼成は

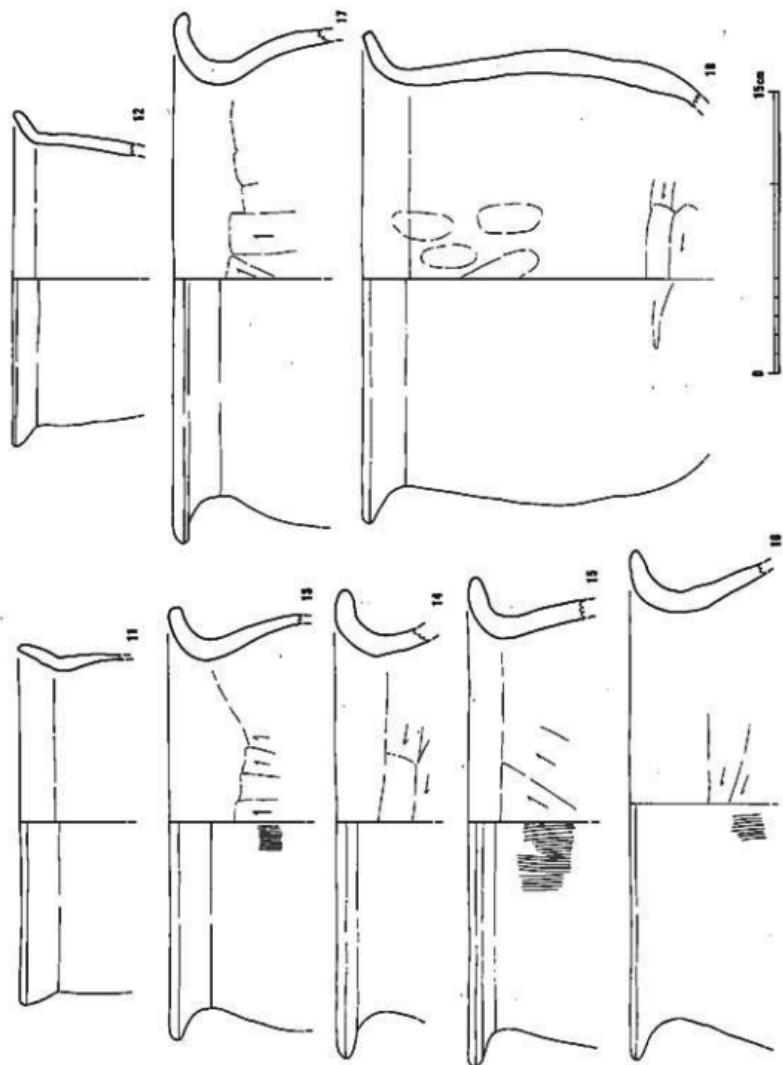
良好で共に淡褐色を呈す。9、10は体部がかなり低い皿で、9は歪みが激しい。口径16.9cm、器高2.4cmで胎土中に赤褐色、白色の砂粒を含み淡褐色を呈する。一部に煤が付着。10は復原口径18.1cm、器高1.7cmを測る。口縁、体部はヨコナデ、底部は削り調整である。淡茶褐色を呈し焼成は硬質である。

甕 (11~26) 11は復原口径19.3cmで、口縁はやや外反する。脛曲部がやや肥厚し、胴体部の張りはない。12は口縁部を強く外反し、胴体部の張りはない。内外面はナデ、口縁部はヨコナデ調整で、一部に煤が付着する。胎土中に赤褐色の砂粒を含む。11、12の器形をのぞく他13~25は器形が類似するものである。13~17は口縁部がく字状に強く外反し、端部は丸く仕上げている。口縁部は内外共にヨコナデ調整、外体部は刷毛目、内面は頸部下位から削り調整が観察できる。13から順に復原口径23.2cm、25.0cm、26.1cm、27.2cm、28.2cmを測る。共に赤褐色の砂粒を含み淡褐色を呈す。18は胴体部の器肉が厚く、下位底部を欠損する。口縁は胴体の器肉に比べやや薄く仕上げヨコナデ調整を施す。外体部は粗雑に削り調整、内面上位に指押え圧痕が残る。復原口径26.2cmを測る。19は胴体下半を欠く。口縁部は強く外反し、胴部の張りがやや目立つ。外体部は赤変し、磨滅が著しく調整は明らかでない。内面は削りで斜方向に下から上へ削っている。焼成は硬質。復原口径28.8cmを測る。20~25は口縁部の器肉が前者に比べ若干肥厚するものである。20は

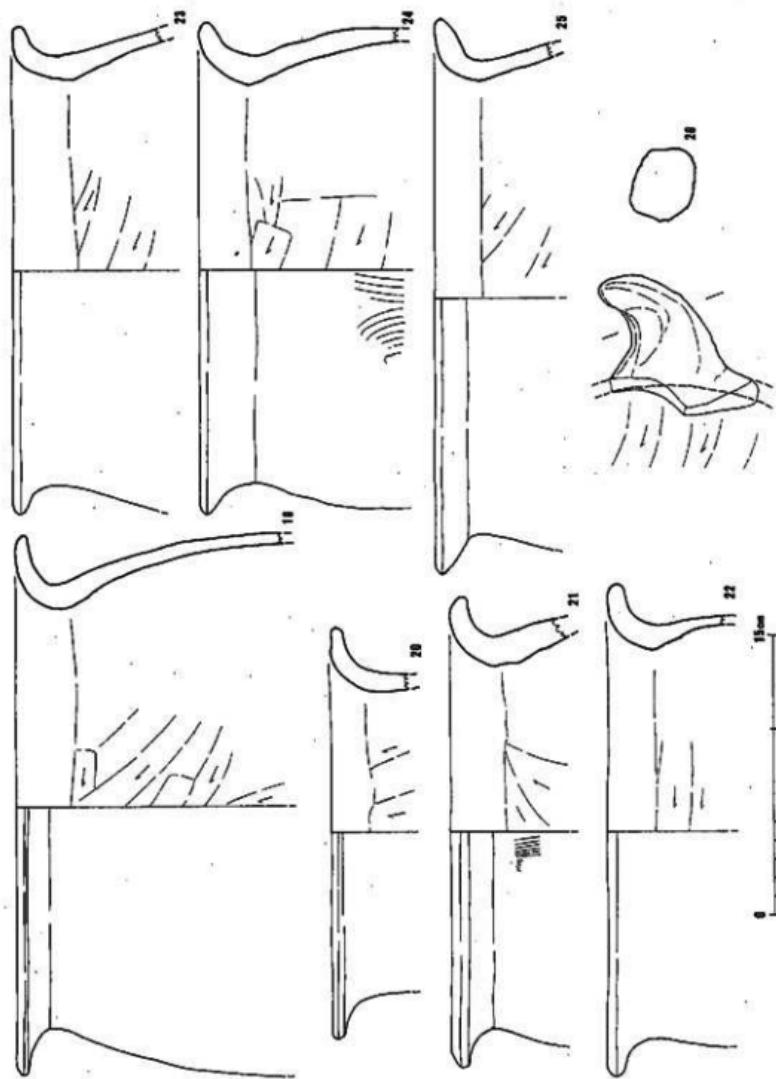


第69図 暗褐色土層出土土器実測図④(1/3)

前田遺跡



第70図 暗褐色土層出土土器実測図⑤(1/3)



第71図 暗褐色土層出土土器実測図⑤(1/3)

前田遺跡

復原口径22.0cm、21は25.2cm、22は26.3cmを測り、特に21は口唇部が強く外反する。23~25の復原口径は順に26.0cm、26.2cm、28.8cmである。共に胎土中に赤褐色、白色の細砂粒を含み、茶褐色を呈し焼成は硬質である。26は壺の把手で丁寧なナデ調整で、胎土中に大粒の砂粒を含み、焼成は比較的硬質である。

土製品（第72図）

土鍤(3) 約4.3cm程で両端部を欠損する。中央の孔は計0.8cmを測る。胎土に石英粒を含み、焼成は軟質である。

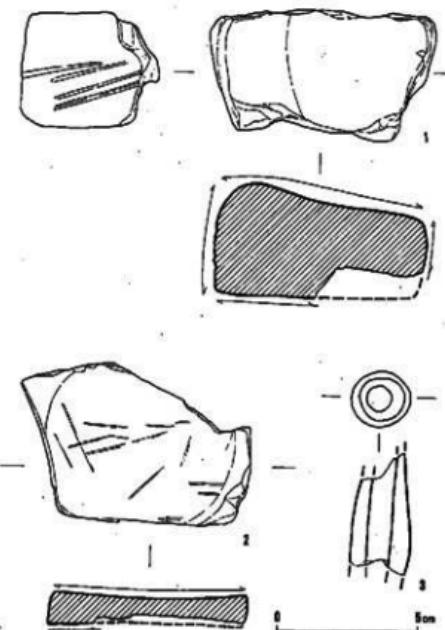
3. 小結

今回の調査で、弥生時代の住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝等が検出された。

遺溝の検出状況は稀薄であったが、山裾に弥生時代の集落跡が確認され、遺溝はさらに南方に広がりをみせている。住居跡の規模・構造等は一般的な二本柱を主柱穴としたもので、住居からの出土遺物は削平が著しく、時期を示す資料に欠けるが弥生時代中期後半頃と考えられる。また、住居あとからの出土遺物はミニチュア土器、手捏土器等が検出されたことから、祭祀的な生活の一端を想定することができる。掘立柱建物跡、土壙等も住居跡と同時期と考えてさしつかえあるまい。

黒褐色土層および暗褐色土層から多量の土器が出土したが、今回検出の遺溝に伴うものではない。黒褐色土層出土土器は弥生時代中期のものであり、暗褐色土層出土の須恵器、土師器は8世紀前半を中心とするものである。これらは本文中にも触れたように山頂部に弥生時代、奈良時代の遺溝の存在が想定され、古い時期に崩れ堆積されたものと考えられる。

さらに本遺跡周辺を調査することにより、遺跡の性格が明らかになろう。

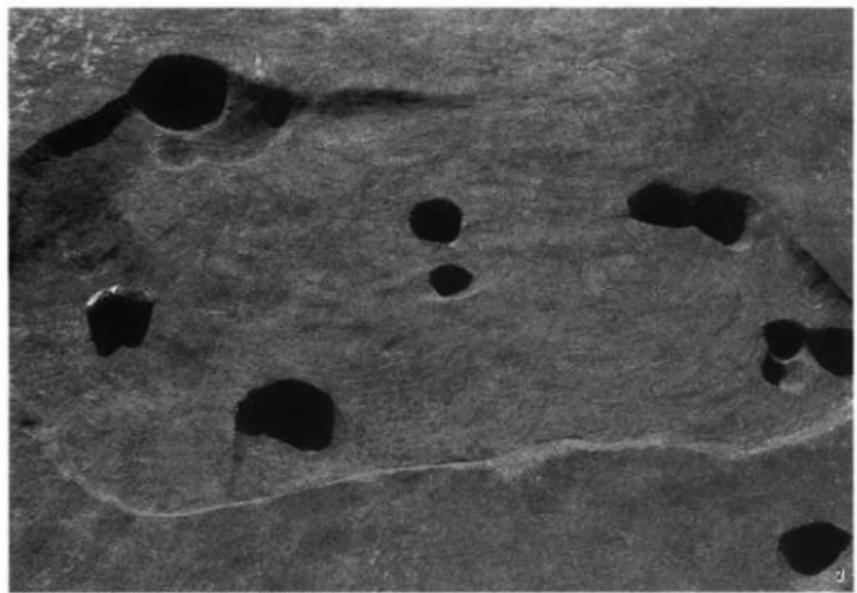


第72図 1・2号土壙、2 黒褐色土、
3 暗褐色土出土土磁石、土鍤(1/2)

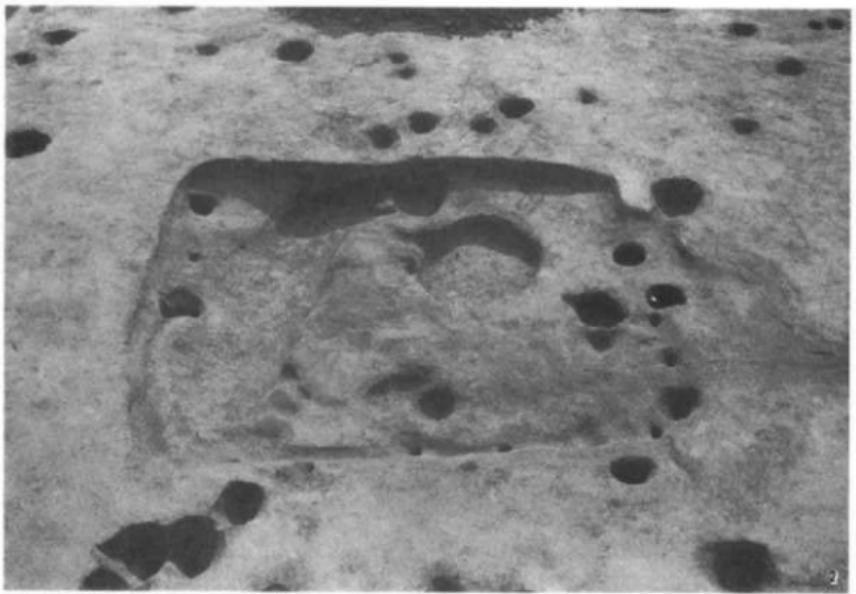
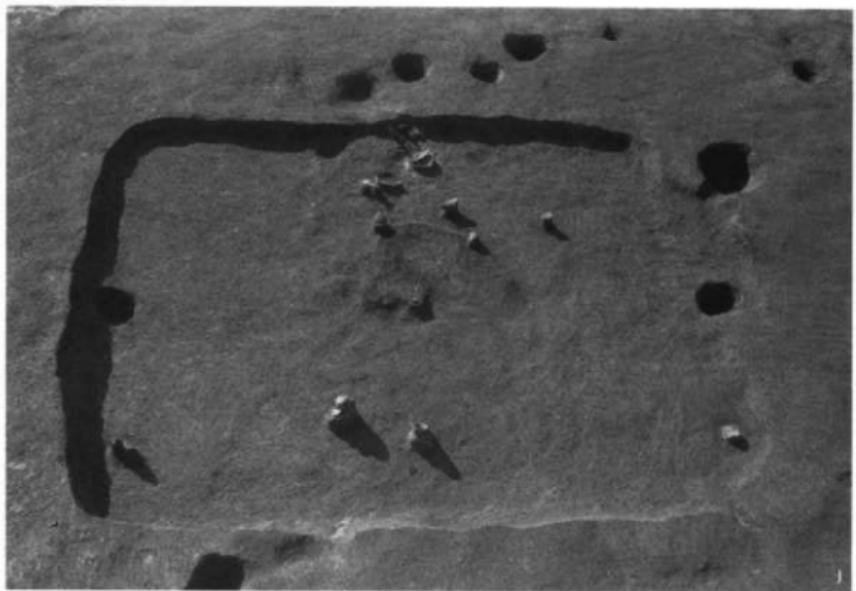
図 版



発掘調査区全景(空中写真)



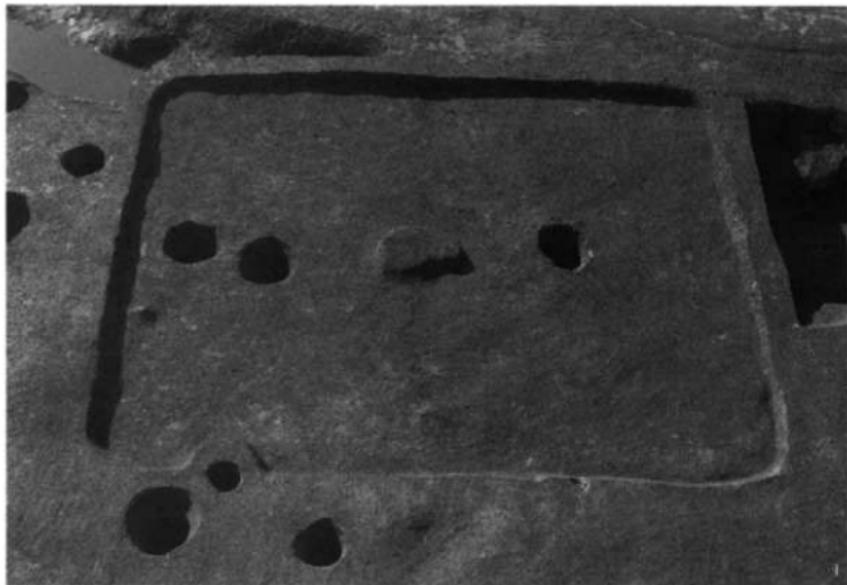
(1) 1号住居路(南から) (2) 2号住居路(北から)



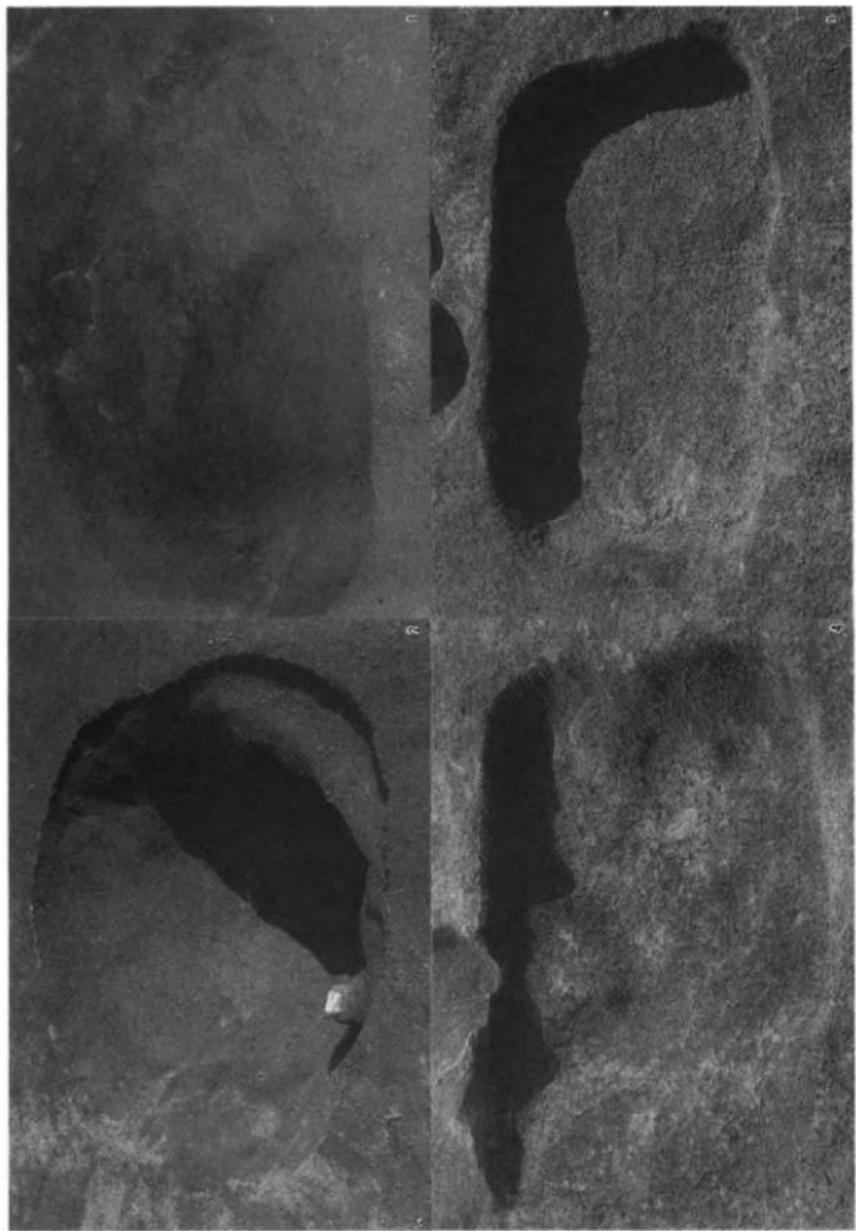
(1) 3号住居跡(北から) (2) 同上下層(北から)



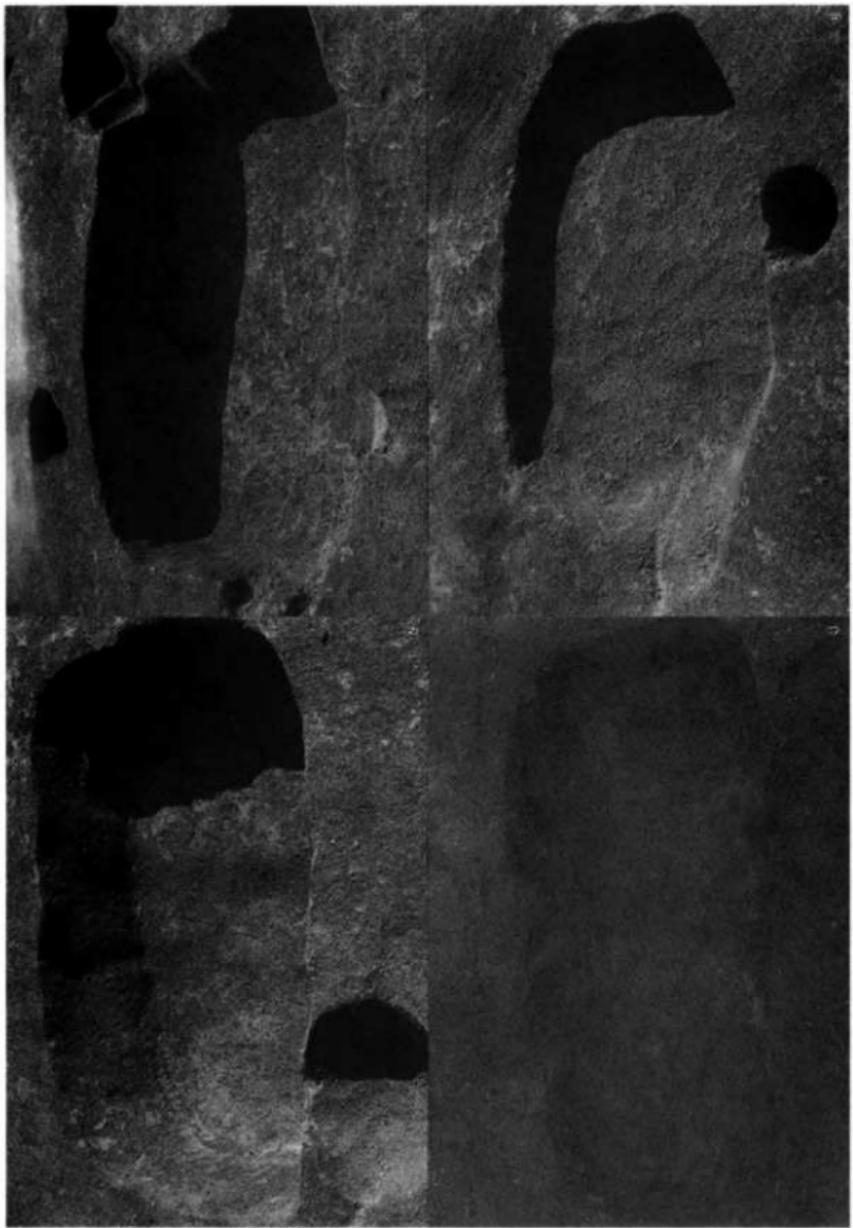
(1) 3号住居跡土器出土状態(北から) (2)同 上



(1) 4号住居跡(北から) (2) 1・2号土塙(南から)



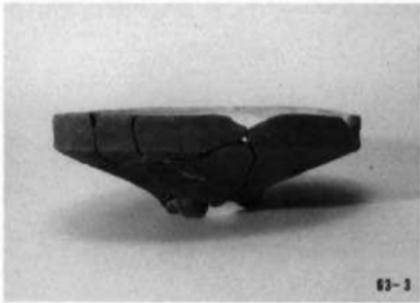
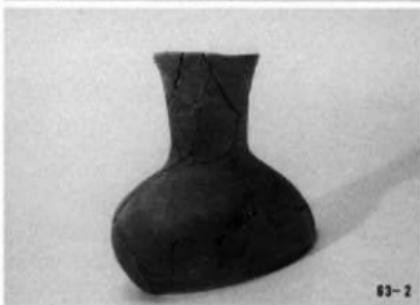
(1) 1号土壤(南から) (2) 2号土壤(南から)
(3) 3号土壤(北から) (4) 4号土壤(北から)



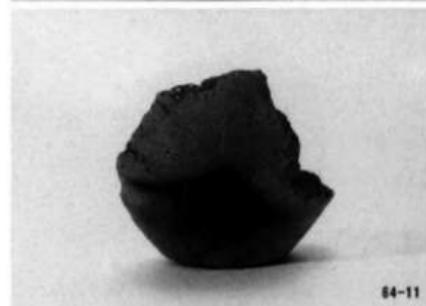
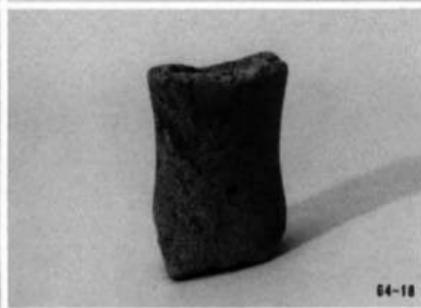
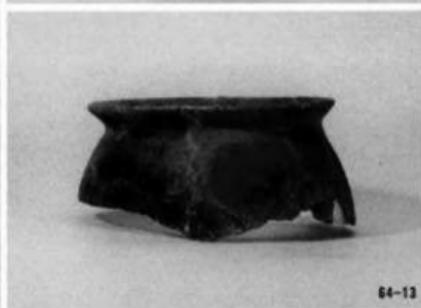
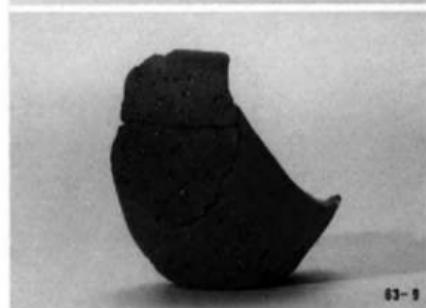
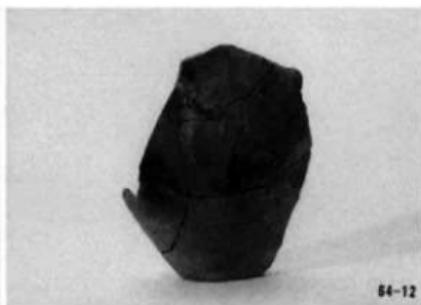
(1) 5号土壤(北から) (2) 6号土壤(西から)
(3) 7号土壤(西から) (4) 8号土壤(西から)



(1)東壁土層(西から) (2)同 上



2·3号住居跡 黑褐色土層出土土器



黒褐色土層出土土器



1



5



3



15



8



16



12



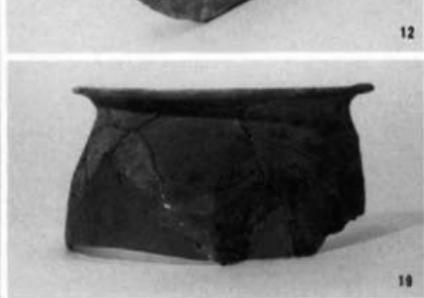
17



14



18



III 発掘調査の記録

3 西ノ迫遺跡の調査

1. 遺跡の概要

西ノ追遺跡（杷木インターC地点）は、福岡県朝倉郡杷木町大字池田字西ノ追に所在し、九州横断自動車道の杷木インター・チェンジから200m日田寄りに行った位置となる。

北側の古処山系連山から南へ派生する尾根の先端に、秋月氏の端城である三ヶ月城跡（標高190m前後）があり、それから更に南方の筑後平野に向かってつき出た多くの舌状尾根がある。それらは殆どが柔かい真砂土の基盤のために、やせ尾根になっており、そのうちの小尾根上に西ノ追遺跡が占地している。決して大きく目立つ尾根ではなく、どちらかというと、谷奥へ登りつめて、更に枝分かれした小谷に挟まれた、マイナーな小尾根である。当時としても、平野からははるか上方に見えるが、さてどこから登ったらいいかわからないという場所を選んだものと思われる。

今回発掘調査の対象としたのは、標高131～100mの範囲で、うち遺構を検出したのは131～123mの高い部分である。これは、下方の杷木町現市街地あたり（筑後川北岸沖積平野）が40～45mほどの高さであるため、実に比高差90～85mを測る。西ノ追遺跡にとっての母集落が、この南～南西側山裾の沖積地～低位段丘（現在の杷木中学校～前田遺跡付近）にあると想定されるため、この間の比高差は、実に高地性集落の名に値する。

最終的には、図示した住居跡と環濠を中心とした部分について精査したが、尾根線上の環濠から下方についても、重機により表土剥ぎしで遺構確認をしたが、検出できなかった。また、西側尾根上も同様に試掘したが何もなかった。更に、東側尾根については、手掘りのトレンチを入れたが何ら発見できなかった。いずれもひどいやせ尾根であったせいもあるが、西ノ追遺跡と類似する遺構が全く周辺に見られなかったことは、かえって当遺跡の独立・特殊性を補強する結果となった。

さて、調査は順調に進み、その間、環濠をもった高地性集落とのことで、調査担当者のみでなく、県文化課あてでの期待を受けて、検討・助言がくりかえされた。その結果、重要遺跡であるとの認識を共有するに至り、報道関係への発表を計画した。佐原真氏（現奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）と、小田富士雄氏（現福岡大学人文学部教授）にお願いして、現地視察と同時に6月14日記者発表を行った。調査担当者が、環濠・住居跡の出土土器から年代を2C後半（A.D.150～180年）と考えたことについて、両先生と若干意見の相違があったが、遺跡の意義深さには全面的に賛同して下さり、無事に世に公表することができた。両先生には心から感謝申し上げたい。

その後、現地説明会も実施したが、研究者各位をはじめ、地元及び一般の方々の反響が意外と大きく、度々現地案内を行った。県文化課としては、これに応えるために、のろしの実験等

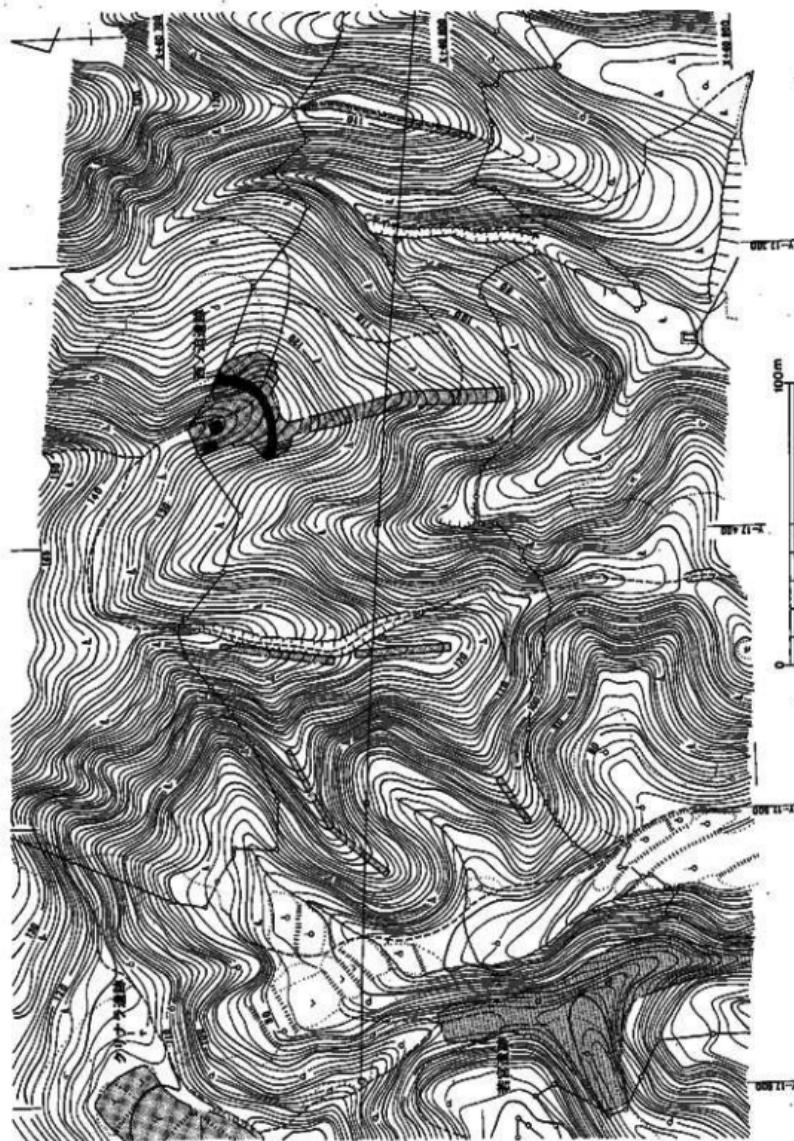
西ノ追跡



第73図 西ノ追跡點から筑後平野東半部への眺望(140度の視野)

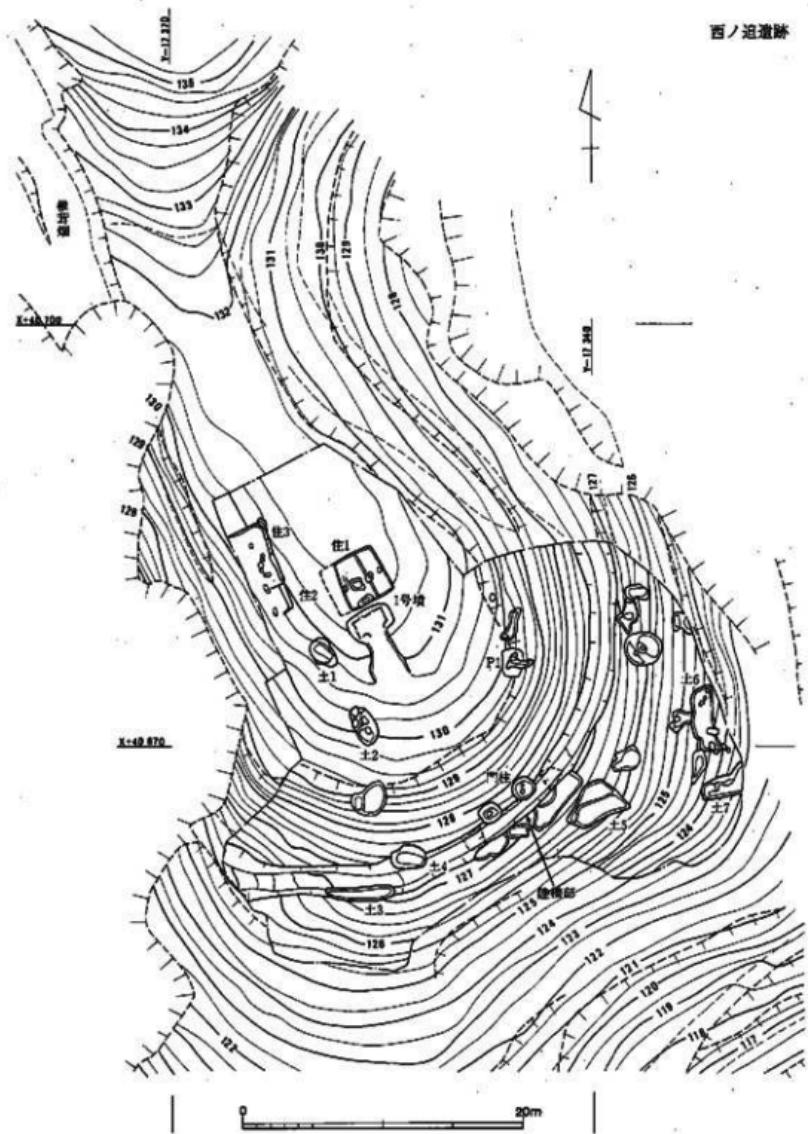
西ノ追迹跡

第74図 西ノ追跡跡地形図(1/2,000)





第75圖 西ノ追跡地形測量図 (1/600)



第76図 西ノ迫遺跡遺構配置図(1/400)

西ノ追遺跡

を含めて、講演会を企画・準備した。8月30日に奈良大学教授水野正好氏による文化講演会を、遺跡の登り口にあたる杷木町立体育館にて実施した。水野氏のわかりやすく興味深い講演の後、全員で西ノ追遺跡に登り、現地説明のあと、のろし体験を行った。杷木神籠石→西ノ追遺跡→杷木町役場裏庭（母集落想定地）→日永遺跡→高山の順で着火し、通信の速さや煙の見え具合を参加者一同で確かめた。台風前日で、風が強く、煙がかなり流れましたが、どの地点も良好に、すく確認することができた。

9月29日には、N H K 福岡放送局 T V によるのろし実験の収録が行われ、発掘作業員一同の多大な協力のもとに無事終了した。これは、10月15日(木)の19:30から「九州730」の番組の中で放映された。

これらの盛り上がりの中で、遺跡保存の協議も行ったが、路線変更不可能との結論を得て、最大限の記録保存を図る方向で、遺跡模型の作製を行った。

以上多くの方々の御支援・協力を賜った調査であった。関係各位に心からの感謝を申し上げたい。

2 弥生時代の遺構と遺物

本遺跡の弥生時代の遺構は、尾根先端上面とその西斜面に営まれた竪穴住居跡3軒と、それらを鉢巻き状にとりかこむ環濠とがある。環濠には埋め戻された陸橋部と、そのすぐ内側に検出された門柱跡がともなう。

以下、各遺構別に報告しておきたい。

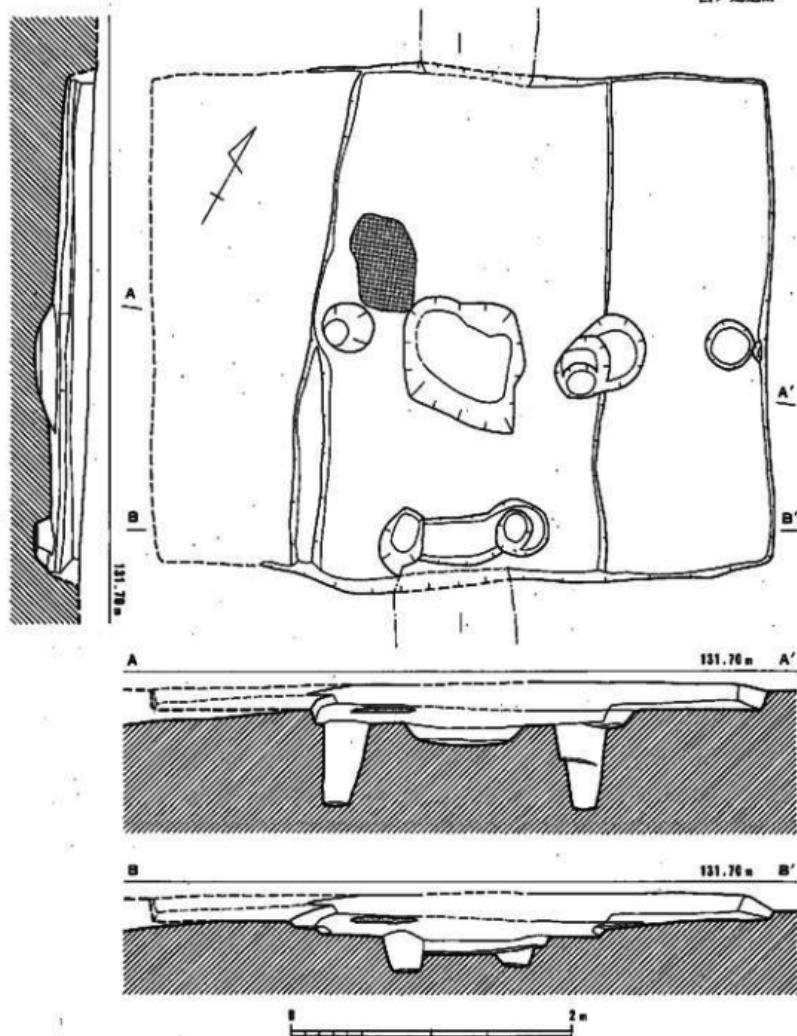
(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第77図、図版35）

第1号墳の北側に墳丘・周濠の確認を行うために設定したトレンチにひっかかる初めて住居の存在に気付いたものである。まさかこんな高所に竪穴住居があるとは、夢にも思わなかつたために、住居のど真中を断ち切ってしまい、トレンチ壁面の土層確認の際にからうじて確認した次第であった。

標高131.5mに作られた方形住居で、南北最大幅が3.75m、東辺が3.4m、深さ0.3mとなる。西辺付近は尾根上で土が流れたせいか、残っていない。東西方向幅は、主柱穴・炉等の位置から復原すると、4.4mほどと推定され、住居の面積は約16m²前後となる。この期の方形住居としては中規模のうちでもやや小ぶりの類となる。

西ノ追跡跡



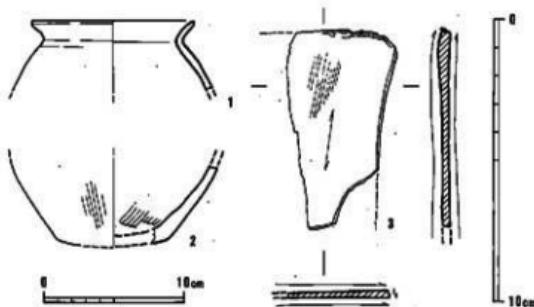
第77図 1号竪穴住居跡実測図(1/40)

西ノ追遺跡

東辺沿いに幅1.1~1.25m、中央床面からの高さ約6cmのベッド状遺構を削り出している。西辺沿いも同様のベッド状遺構と考えられる。床面中央には炭や灰の多くつまつた炉があるが、底・壁面は焼けていない。中央炉西隣の床面が焼けて硬化しているが、その理由は判断に苦しむ。主柱穴は2個で、中央炉を挟んで東西に配置され、深さ60cmとしっかり埋め込まれており、2柱間の心々距離は180cmとなる。

当住居で特徴的なことは、この時期の普通のベッド付住居では例外なく検出される壁際土壙が認められず、かわりに南壁際に2個の浅めの柱穴状の穴とそれらを連結する浅い掘り込みが発見されたことである。この2柱穴は直径25~40cm、深さ14~25cmで、両者の心々距離は80cmである。この壁際遺構の性格については、第1に入口部の構造を支える支柱を考えられる。入口が外方へ突出した形態であったならば、この南外方にも痕跡があった可能性もあるが、古墳の築造によってその付近が残存していないので明瞭にできない。また、この遺構の方向は、丁度尾根先端方向、つまり、最も見晴らしのいい方角を向いており、下方の環濠中途の陸橋部及び門柱の方向とほぼ軌一にしている。そういう意味でも、この壁際遺構が入口の支柱であるという考え方、明解で妥当な線と思われる。第2に考えられることは、これを壁際土壙の一種と考え、何らかの小柱状のものを両端に立てたものであろうという説である。ベッド状遺構を有する古い段階の住居（福岡県糸島郡古賀町久保長崎遺跡第2次調査分等）では、壁際土壙が壁ラインより内側へ離れて位置し、その両端に小穴を有するものがある。また、福岡県糸島郡築城町十反遺跡では、壁際土壙の内側に1小穴をもつ例が多くあり、報告書中ではこの土壙の聖域説を考えた。以上の例から、この西ノ追第1号住居跡の壁際遺構は、2柱で祭壇あるいは、依り代としての神木を立てたものと考え、聖所である壁際土壙の一類と判断できるかもしれない。以上2説のうち、入口部支柱説がより明解であるが、後の聖所説も抹殺し得ない可能性を有していると考える。

出土遺物は少量で、環濠内の土器出土状況と同じであり、常時、長期間の生活が営まれる性



第78図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4・1/2)

格の住居ではなかったことを明瞭に示してくれている。

出土遺物(第78図)

壺(1・2) 1は、頸部内面に稜をつくり、胴部中位で張る器形となる。1/5のみの残存であるが、復原口径11.8cmの小型壺で、胎

土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で淡黄茶色をなす。内外面ともに器表の剥落が著しいが、特にハケなどの状況は認められない。口頭部外面はやや強い横ナデを施す。2は、外面が凸レンズ状となる底部片で、復原底径8cmとなる。底部と体部との境は明瞭である。腹部下半で張るような器形とも推定され、壺の可能性もある。内面は大部分が器表剥落しているが、わずかに粗い縦ハケが認められる。外面も同様である。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成不良で淡褐色を呈するが、胎は黒色をなす。

砾石（3）淡緑灰色で良質の粘板岩製仕上げ砾である。現存長7cm、幅3.9cm、厚さ0.2~0.4cmと極めて薄手で、とてもよく使い込んでいることがわかる。表裏、各側面ともに使用されているが、裏面は削りた後に再研磨したものかと思われる。

以上の出土遺物と、住居の形態からみて、弥生時代後期後葉の時期が考えられよう。ただ、住居内の壁際土壤が通有の形態をなしていないことを古い様相と見なすならば、土器の形状も後期終末に近いものではないことからも、後期中葉により近い後葉の所産と判断できよう。

第2号竪穴住居跡（第79図、図版35）

尾根先端の第1号竪穴住居跡から西へ2.5mの緩斜面に、第3号竪穴住居跡に切られた状態で位置する。このため、東南コーナー部分を残すだけの状況で詳細は明確にできない。壁際には周壁溝を有するところから、竪穴住居跡であることは間違いないから。

第3号住居跡に切られた外側は、南北長で2mしかないが、北端の切合部分で周壁溝が直角に曲がっていることから、住居内での区画部分を示していると思われる。おそらく、住居東南隅の東壁に沿った幅1m、長さ2mのベッド状遺構と推定される。

柱穴は2ヶ所に検出されたが、北側のものが位置からみて主柱穴の1つになる可能性があるが、浅いため確定はできない。床面も当初部分が残るのは東壁沿いあたりだけで、西側はほとんど流れている。西側発掘範囲のすぐ外側は急な崖となって谷へ落ちている。基盤が極めて脆弱な花崗岩風化土壤であるため、狭い尾根の両側は常に崩落をくりかえしている状況で、遺跡も残りが悪い結果となっている。

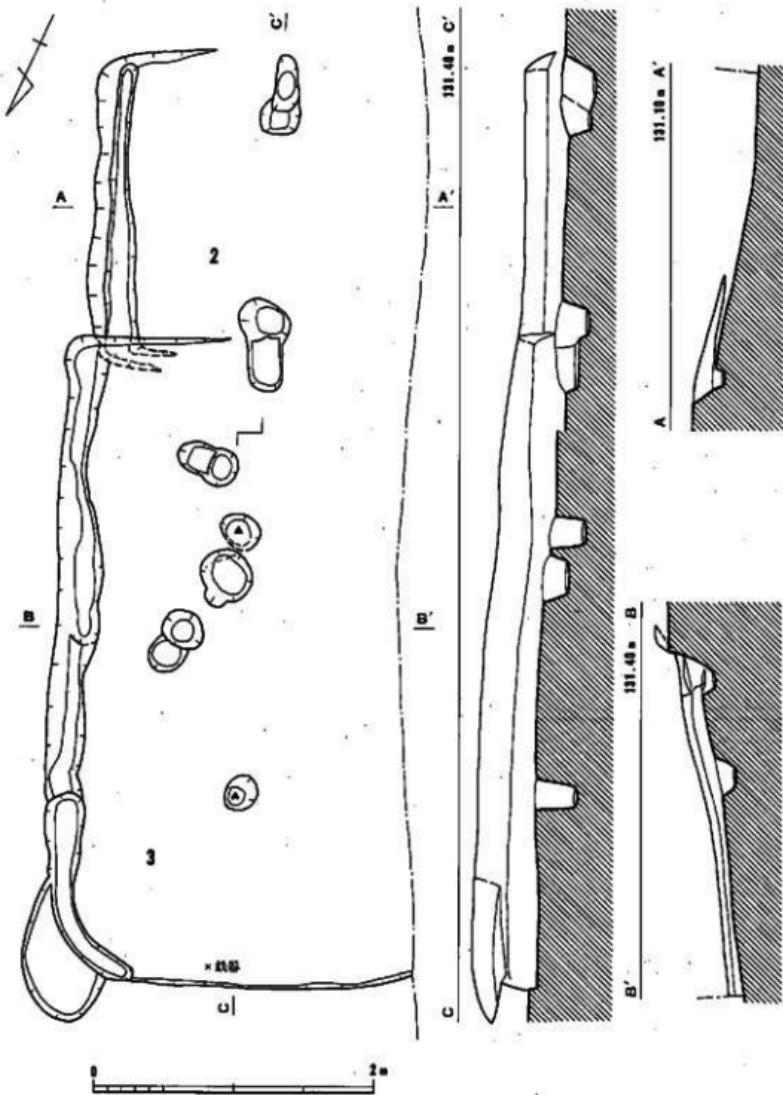
出土遺物も無く、時期は明確にできないが、第1・3号住居跡とは同時期の、連続した営みであろうと思われる。

第3号竪穴住居跡（第79図、図版35）

尾根の西側斜面に、南側で第2号竪穴住居跡を切って営まれている。第1号竪穴住居が東西棟であるのに対し、こちらは南北棟と考えられるが、配置状況からみても、同時存在は可能であろう。

南北の長さ4.6m、東西は2.6m以上あるが、西半は大きく流れしており、全容は明らかでない。

西ノ追迹跡



第79図 2号・3号竪穴住居跡実測図(1/40)



第80図 3号竖穴住居跡出土遺物実測図(1/4・1/2)

床面の南北方向に対となる2柱穴(図中▲印)があり、主柱穴となる可能性がある。ただ、東壁側へ寄っているため、4主柱となることも考えられる。2柱間は190cmある。

床面にベッド状造構は残っておらず、本来存在していたかどうか確認はできない。東壁沿いに、やや幅の広い周壁溝が巡る。中央炉、壁際土壙等は残っていない。

出土遺物は、北端床面から鉄器がみられ、他に土器片が少量出土した。出土遺物量の少なさは、本遺跡各造構に共通しており、本遺跡の性格を如実に示しているといえよう。

出土遺物(第80図)

発(1) 脚部上半の破片であるが、長脚気味の中位に最大径を持つタイプとなりそうである。内外面に細かい縦ハケを施し、内面下半には炭化物が付着している。胎土は石英・角閃石・雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。

発(2) 底部小片で、底外面は凸レンズ状のふくらみをなすものと思われる。内外面ともに磨滅著しく、調整は不明である。胎土に、石英・暗赤褐色・角閃石等の細砂粒を多く含む。焼成軟質で、内外面ともに肌色をなす。

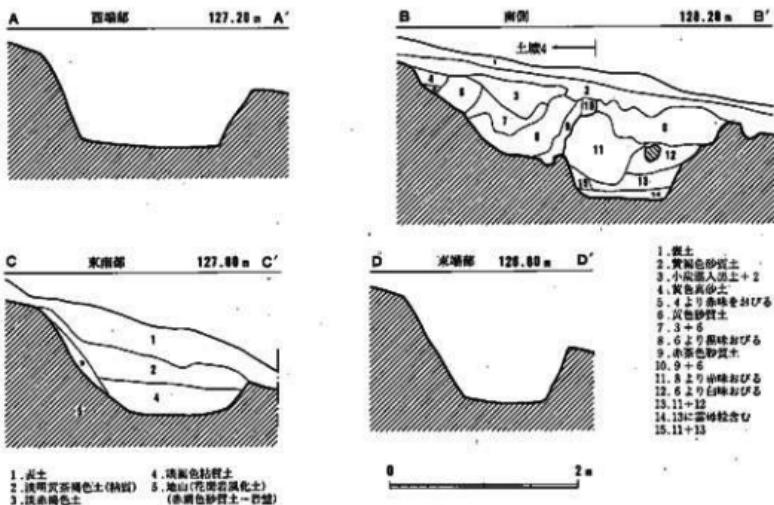
鉄器(3・4) 两者ともに、出土当時は単純に鐵鎌或いは刀子かと判断していたが、銹落とした結果、慎重な検討が必要となった。3は、現存長1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmの、右刃が片刃となるもので、無茎鐵鎌と考えておきたい。ただ、左刃が生きているように思われ、片刃の工具の一種とも考えられる。4は、現存長11.7cm、幅1~0.7cm、厚さ0.5~0.3cmで、断面は長方形をなす。両端が欠損しているので確定はできないが、鋸あるいは鑿等の工具となると推定される。

以上の出土遺物から、この第3号住居跡は弥生後期後葉のものと判断できよう。ただ、造構の詳細が把え得ないため、第1号住居跡との性格の比較ができなくて、残念である。

(2) 環濠

発掘調査にとりかかった当初、1号墳の在る尾根頂部へ登る間に、その直下に幅4mほどの平坦なテラス面がぐるりとまわっているのに気付いていた。あたかも大円墳裾部の削り出し状を呈していた。当山塊の北方に在る中世山城に関連する造構なのかなとも思っていた。

西ノ迫遺跡



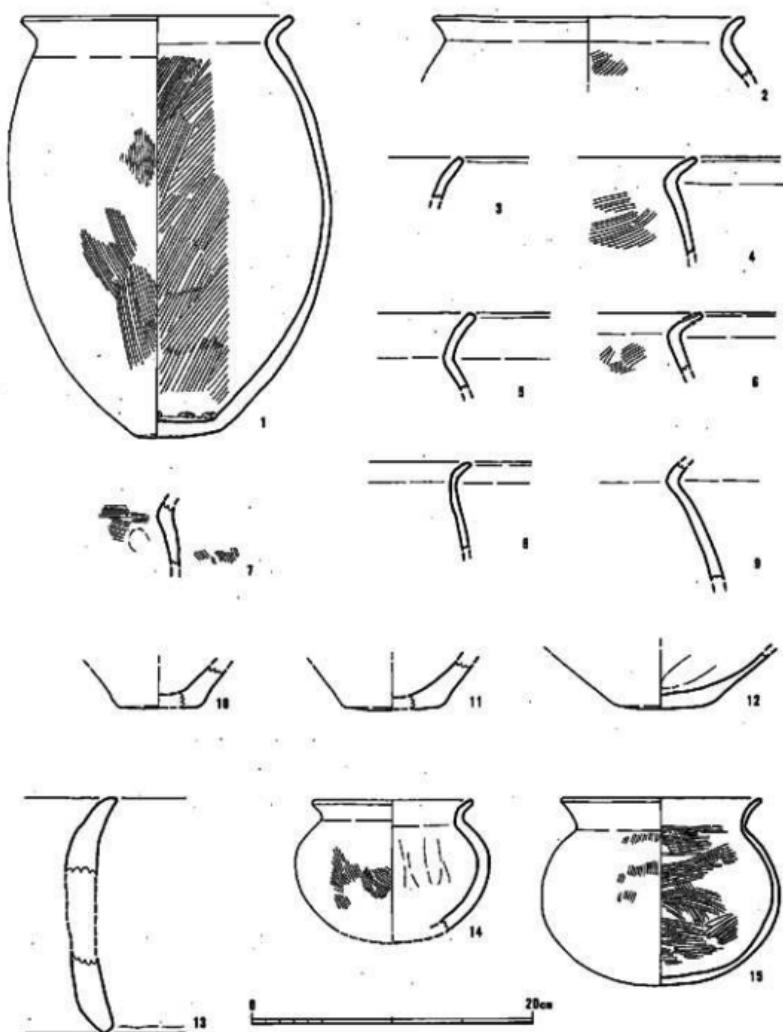
第81図 環濠各部断面実測図(いずれも左方が内側)(1/60)

その後、尾根頂部に第1号竪穴住居跡を検出するに及んで、ひょっとしたらとの冗談半分の気持で、トレーナーを入れてみた。東南部の、後に陸橋部が検出されたところより北側で、第81図のC-C'がそれにあたる。ここに溝が存在していることが判明したために、全面的に表土剥ぎを行い、溝の全周を確認した次第であった。

環濠は、尾根斜面に沿って掘り込まれた、いわゆる鉢巻き状に築造されている。全長46mを発揮したが、西端は自然の崖方向へ抜けており、東(北)端は道路用地際まで調査したが、まだ北方ヘテラス部分が続いていることから、等高線に沿ってかなり延びているようである。

深さは、東端で内側1.13m、外側0.6m、南側で内側1.43m、外側0.8m、西端部で内側1m、外側0.6mとなる。幅は、陸橋部付近が最も狭くて1.3m、西端で2.35m、東端で1.8mとなる。この数字のみでみると大したことのないように思われるが、環濠の内側はどの部位でも30度以上の急斜面になっており、斜面下に掘り込まれた環濠の防御面での有効性は非常に大きいものとなっている。ちなみに、急斜面上端線から溝底部までの比高差は、東端と西端で4.25m、中央付近で3m程度となっている。

環濠の断面形は、図に示すとおり、どこでも逆台形状をなしている。下端の2本のラインは明瞭な角に掘り出されており、東半の下位では軟質岩盤においても同様に掘り込まれているこ



第82図 環濠内出土土器実測図(1/4)

西ノ追遺跡

とをみると、かなり意図してこの形状に固執したことがうかがわれる。

底面は、陸橋部下付近が最も高く、西端部に向かっては1.6m強も急激に下がってゆく。東北方向へはゆるやかに0.4mほど下がってゆく。これからみても、正面にあたる陸橋部付近を当初から意識して、環濠の設計がなされたことが読みとれる。

発掘した部分の環濠を平面図でみると、半径20~22mの円弧状となり、そのコンパスの中心点は、第1号竪穴住居跡内に求められ、この両者の配置関係が、極めて計画的であったことを推定させる。後述する陸橋部・門柱と住居の関係についても、計画性が充分うかがわれ、当遺跡全体に用意周到な企画検討がなされたことがわかる。

出土遺物は、完形に近い壺・壺が各1点、底面から浮いた埴土中から出土したが、他の土器類は小片が多く、また溝出土としては極めて異例に少量で、当環濠の特徴を示している。埴土の状況からも、竪穴住居群同様、短期間のうちに放棄せられたものと判断される。

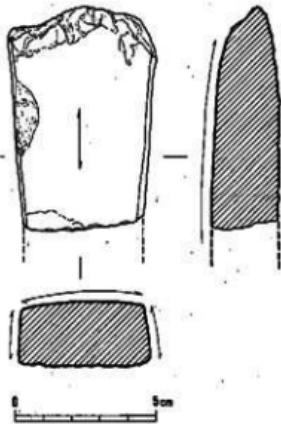
なお、西半側で、第3・4号土壙によって切られており、このことから、奈良時代には明らかに完全に埋まって環濠の跡形さえみえない状況であったことも判かった。実際には、柔らかい基盤の土質と埴土状況からみて、廃棄後、数年のうちに埋まってしまったのではないかと考えられる。

出土遺物（第82・83図、図版43）

壺（1~11）1以外はいずれも小破片で、器形の全容が明確でないが、少なくとも、胴部が張らず、長胴形態となって後期終末期の様相を示すものは見られない。大旨、頸部の屈曲がまだ強く、胴中位で最大径をとるタイプが多いようである。1は、口径19.4cm、器高29.8cm、胴部最大径22.9cmで、口縁部から胴部上半は2/3を欠いている。口唇外端は面をなし、頸部内面にはかなり明瞭な稜をつくる。底部は径6cmの小さめの不安定な凸レンズ状となる。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面は粗い綫・斜位のハケ調整が施されている。外面は全面に二次火熱を受けて赤変し、かなり器表が剥落している。頸部外面にも全局に煤が付着しており、明らかに煮沸に用いられた生活土器であることがわかる。胎土に粗石英・角閃石粒を多量に含み、焼成良好で、外面は赤茶色、内面は暗黄~茶褐色をなす。2は、頸部でやや丸味を帯びて屈曲反転する口縁となる。全周の1/6のみ残存し、復原口径20.6cmとなる。全体に器表の磨滅が著しいが、胴部内面には斜めハケが残っている。胎土に石英・角閃石の細粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。3は、口縁小片で、5のタイプと同じく口縁の長い頸と考えられる。内面上半は横ナデ、下半は丁寧にナデしており、外面は磨滅して調整不明である。胎土に石英等の細砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内外面ともに暗橙褐色をなす。4は、頸部内面に稜をつくらず、壺部を丸くつくる頸で、口頸部内面は横ナデ、胴部内面は横~斜位ハケを施す。外面は器表磨滅して調整不明。胎土に石英・角閃石の微細粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。5は、長めの口縁が外傾気味に開き、胴部上位で張るもの

で、鉢状の器種となるかもしれない。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は磨滅して調整不明。胎土に石英・白色粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗赤橙褐色、内面は暗赤橙褐色をなす。6は、屈折して強く開く口縁となる類で、胴部内面には斜めハケが施されている。他面はすべて磨滅して調整不明。胎土に石英・角閃石の微砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。7は、環濠の西南側下層出土品で、小甕になると思われる。胴部はあまり張らず、内面は横ハケの上をナデ消している。胴部外面には縦ハケを施す。胎土に石英・雲母細粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗灰橙色、内面は淡灰灰色をなす。8は、あまり張らない胴部に、ゆるやかに屈曲外反する口縁をつける。全面が器表剥落しており、調整は明らかでない。胎土に石英・雲母・暗赤褐色粒等を多く含み、焼成良好であるが、全体に脆い。9は、胴中位で張る器形で、内外面ともに磨滅して調整は不明である。胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗橙褐色をなす。10は、底外面が僅かなふくらみをみせる底部片で、復原底径5.3cmとなる。内面はナデかと思われるが、外面は磨滅のため調整不明。胎土に石英・暗赤褐色粒等の細砂粒を多く含み、焼成は良好で、内外面ともに橙灰褐色をなす。11は、底径6.4cmで、中央部寄りがわずかにふくらみをみせる。内外面ともに磨滅して調整は不明である。胎土に石英・暗赤褐色粒・角閃石等の砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗赤橙色、内面は暗橙灰色をなす。

壺(12・14・15)12は、底径6cmで凸レンズ状にふくらむ底部で、内外面ともに磨滅しているが、内面はナデと思われる。胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒等を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗橙褐色をなす。14は、環濠西南側の下層出土品で、全周の1/8が残るのみである。復原口径10.8cm、器高10.2cmなどとなり、胴部上半で張る器形となる。全体にやや厚手で、口縁内外面は横ナデ、胴部内面上半は指ナデ上げ、下半は丁寧なナデ、胴部外面はハケ、下端近くは板ナデ状となる。胎土に石英・雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに暗黄灰色をなす。15は、口径13cm、器高13.3cm、胴部最大径15.8cmとなる薄手精製の丸底壺である。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はナデの上を横ヘラ磨き、外面は縦ハケの上をナデ消している。胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒・雲母等の微細砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗黄橙色をなす。



第83図 環濠内出土石器実測図(1/2)

西ノ追遺跡

器台(13)上下が接合しないが、同一個体片で、17cm程の高さになろう。肉厚の粗製タイプである。内面下半には横ナデがみられるが、他面は磨滅して調整不明である。胎土に石英・雲母・暗赤褐色粒等を多く含む。焼成軟質で、内外面ともに橙灰色をなす。

砥石(第83図)西南側の環濠内下層出土の砂岩製粗砥である。現存長8cm、幅5.2cm、厚さ2.4cmで、表面と左右両側面を使用している。裏面は敲打調整はしているが、研磨は全くされていない。第1号住居跡出土の仕上げ用砥石と併考すると、鉄器の手入れに怠りなかった当遺跡の性格が彷彿としてくるようである。

以上の環濠内出土遺物は、時期的に幅を感じさせず、短期間の所産と考えられる。よって、第1・3号住居跡とはほぼ同時期の弥生後期後業が環濠掘削・使用的時期と比定できる。

(3) 陸橋部と門柱

環濠の中央付近に陸橋部(土橋)と1対の門柱跡と思われる柱穴を検出した。(第84図)陸橋部は、長さ9mの間が、環濠掘削直後に埋め戻されたもので、当初から埋め残されたものではない。発掘中途の環濠掘り下げの際に気付いたもので、この部分だけが上面での輪郭線が不明確で、赤色の粘質土が埋まっており、他の環濠部分の砂質で黄褐色土系の土と全く異なっていた。よってこの部分の当初環濠の掘り下げにも、土が固くて地山との境目がはっきりせず、かなり苦労した。

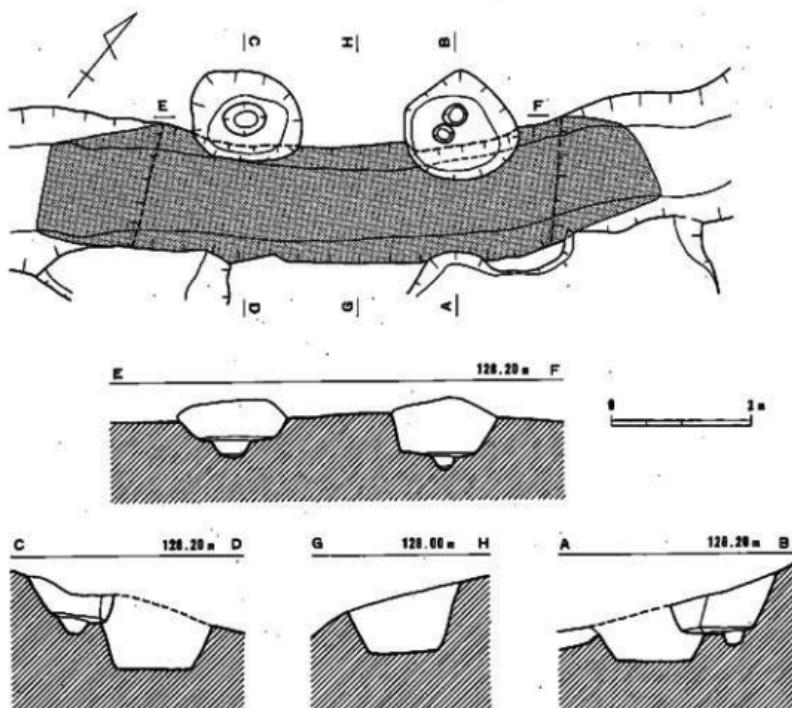
環濠全体の中で、この陸橋部分が最も幅が狭く、しかも底面のレベルが高いことは既述したが、このことは、陸橋部設置計画が環濠掘削完了後に立案されたものではなく、掘削工事未完成の中途で実施されたものと推定できる。環濠掘削と同時に堅穴住居建築も開始され、その作業上の不便さからも、出入りの設置の必要性を認めたものであろう。

この陸橋の位置については、第1号堅穴住居跡からまっすぐの方向にあること、特に住居南端の2小柱穴が入口の支柱だとすると、まさに直線上にあるという、強い関係がうかがえる。また、尾根線上に位置し、下から登ってくる時に、どこからでも急斜面であるといえ、他の面の「崖」的な登はん絶望の如き様相とは明らかでも異なるこの部位を選んだものであろう。

この陸橋部の前面が1m強の平坦面になっているが、この部分の土が乱れており、何らかの施設があったかと想定して精査したが、残念ながら、凹凸のある瘤み状の連続が在っただけであった。陸橋・門柱の工事の際や、出入りの激しかった時の踏み固め等の痕跡なのである。

門柱は、明らかに陸橋部を埋め戻した上面から掘り込まれており、埋土の状況から、他の新しい時期の土壤等とは異なり、弥生期のものと容易に判断し得た。

門柱掘形は西側のものが、東西1.5m、南北1.3m、深さ0.6m、東側のものが、東西1.65m、南北1.55m、深さ0.85mの規模である。掘形底面中央には、さらに20~25cmの深さで柱根差込



第84図 環濠陸橋部と門柱跡実測図(1/80)

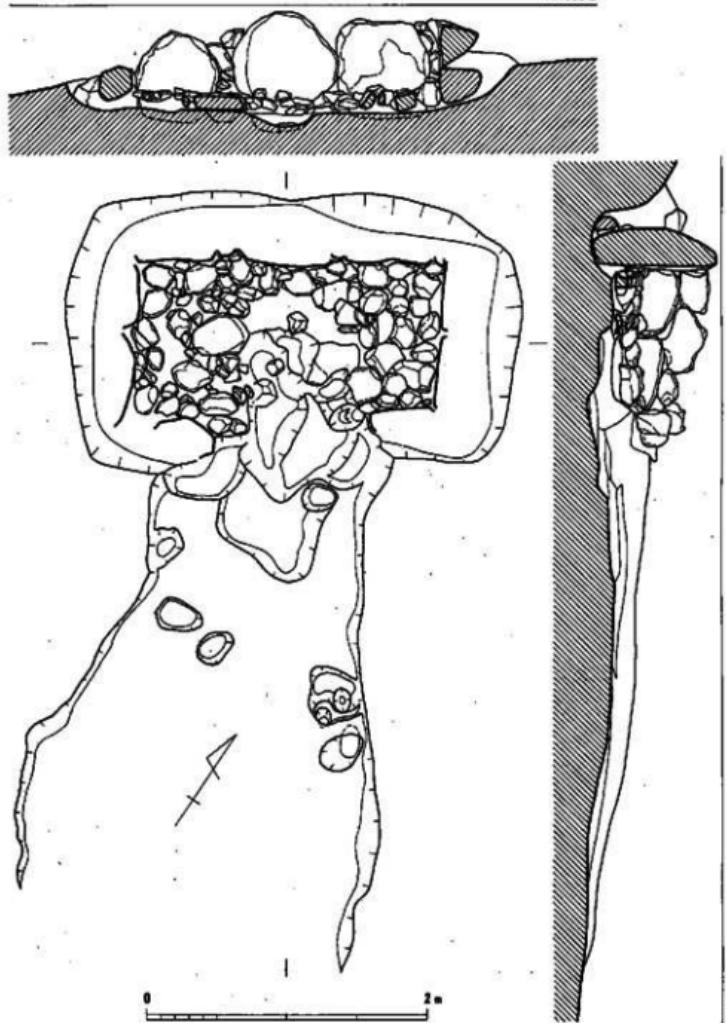
み孔が検出された。この孔の直径は30cmほどで、柱の大きさをうかがい知ることができるが、上方では更に太くなっていたであろうから、確實に30cm以上のぶつとい柱を立てた、頑丈な門柱であったことがわかる。また、2本の門柱だけが立っていたわけではなく、当然それに伴う門扉や、上方には横位の桁材が渡されており、島居状を呈していたであろう。柱が当時としては異様に太いため、或は両柱の上屋構造として、後世の櫓門の機能を持つ構造物が乗っていたとしても不思議ではない。

また、東側の掘形内には大小の2孔がみられるが、柱の建て替え、或いは添え木の可能性も考えられる。なお、両柱の心々間の距離は、3mを測る。

この門柱痕跡の大きさは、後世律令期の中央官庁の柱穴に比肩できるものであり、弥生期の住居主柱の大きさが最大20cm弱であることを考えると、当時としてはまさに異様の大きさであ

西ノ追遺跡

131.88m



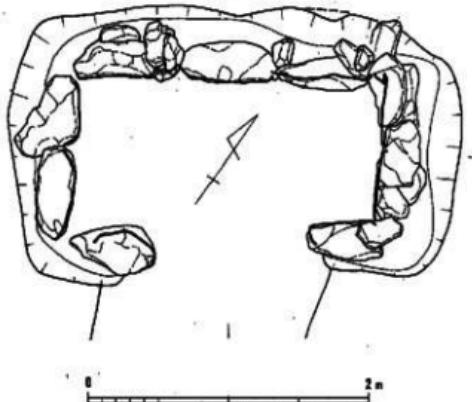
第85図 西ノ追1号墳石室実測図その1(1/40)

ると言わざるを得ない。防衛施設の強化のために腐心していたことを覗い知るところである。

なお、この2柱を、谷下方とロープで難いで登降の便に供する、いわゆる材木おろしのケーブルと同様に考えて、ケーブル支柱ではないかとの意見もあったが、ここでは無視しておく。それよりも、気になるのが聖域入口の鳥居説である。環濠を聖城区面として全体を純粹に宗教施設ととらえる意見である。柱の頑丈さは、単に防衛のためだけに由るものではないのかもしれない。集落にとって大切なものを、シンボリックな「鳥居」によって護ったのかもしれない。心を大事にした一族であったのかもしれない。ただ、この説に対しては、門柱部から上の住居までの急斜面における階段の有無、環濠から下方斜面における道や階段・切り通し等の有無を幅広く精査したが検出できなかった。參照等を意図した造成は行われていなかったと言わざるを得ない。また、祭祀的性格の遺物の出土も、発掘範囲に限っては皆無である。以上のことから、門柱=鳥居説に魅力は感ずるが、それを否定する状況の方が指していると考えられる。

3 西ノ追1号墳

昭和62年冬に、高速道路工事計画の進行に従って、杷木町中心部北側の路線内遺跡について調査を進めることになり、現地踏査を再度実施した。杷木インター建設予定地周辺は、やせ尾根が入りこんで、当初の遺跡地点番号も付されておらず、一見して遺跡の立地など到底考えられない状況であった。山歩きの過程で、西ノ追の小尾根上にひとかかえもある石材が数個立てられているのが発見され、終末期墳の横穴式石室古墳と判断された。この地点を杷木インターC地点として本調査対象にとりあげた。以上のような次第で、調査実施のきっかけとなつたのが、まさにこの古墳



第86図 西ノ追1号墳石室実測図その2(1/40)

西ノ追跡

の露出した腰石群なのであった。

石室（第85・86図、図版38）

埋葬主体部としての石室は、小規模横長の横穴式石室と、形だけ設けてあつたろう墓道部と、浅く広がつた墓道部分とからなる。玄室部は、幅3.25m、長さ2mの横長の長方形墓壙を掘り込み、その中に構築している。腰石は、その上面レベルを揃えるように、墓壙内部を掘り盛めて据えている。

奥壁は3個の長さ50~80cmの大きめの石材を立てている。中央の鏡石にあたる石材は、左右両側のものよりいくらか大きめではあるが、特段に大きいものを意図したものではない。

左右両側壁は、各々2個の石材を横位に据えており、奥壁の様相とは異なる。右側壁で2段目までが残っており、その上面は、奥壁腰石上面と揃っている。2段目も横長に石を積んでおり、結果として妻側への控えの長さが短くなり、構造力学的に壁の保持が弱いつくりとなっている。これはまさに、壁内面の見ばえのみを整えた手抜き工事と言えるが、この高い尾板上に石材を運び上げた苦労を考えると、より少ない石材でまかなおうと工夫した知恵の表われと判断することもできよう。

玄室床面は、20cm大の角砾を敷きつめるが、大きさはまちまちで、敷き方も極めて雑で、上面はそろっていない。長さは右側壁沿いで1m、左側で1.1m、幅は奥壁沿いで2.2mとなり、縱：横の比が1:2となる。

床面中央から墓道部にかけて、大きく擾乱痕がみられ、玄門部の原状、仕切りの樋石の有無、墓道側壁の積石の状況等は全くわからない。墓道部掘形が外方へ70cm強の間だけまっすぐ延びて、それ以南で広がっている状況からみて、甘木市柿原I古墳群でみられたものと同様に、短く、とて付けたような形式的な墓道部積石を行っていたのではないかと思われる。

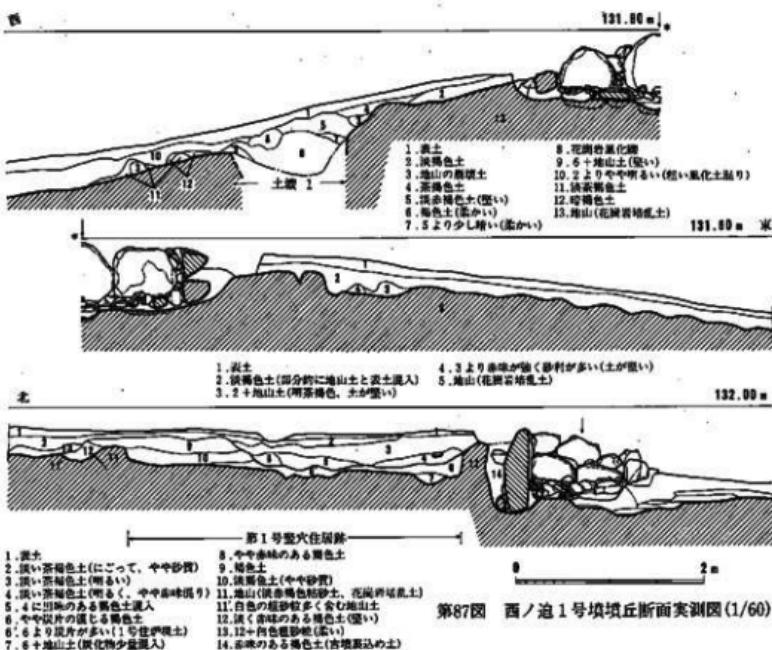
墓道部分は浅く広がっているだけで、地山に深く掘り込む類ではない。玄室床面下の地山面とほぼ水平を保っている。

この石室に用いられた石材は、すべて花崗岩である。うち、床面の敷石は脆くて風化しかかつたものが多く、谷下方から運び上げたものではなく、墓壙の地山掘削の際に母岩を崩したものを使用しているようである。

石室—墓道にかけての出土遺物は皆無である。次項に述べる墳丘中からも出土遺物は無いが、斜面側の表土中から須恵器壺胴部小片2点（第93図9・10）が出土しており、本来当古墳に伴うものであった可能性も考えられる。

墳丘（第87図）

結論から言って、墳丘は残存していなかった。というよりも、通常の古墳でみられるような、周溝を掘ってその内側に盛り上げるという状況ではなく、小型石室の上部だけに盛った土饅頭的な形状であったと考えられるのである。



第87図 西ノ追1号墳丘断面実測図(1/60)

石室主軸に沿って左右東西方向と、奥壁裏側の北側へ墳丘土層観察用のトレーニングを入れた。図に見る如く、東西方向では周溝とおぼしき掘り込みは無い。西側トレーニングで周溝かと思われた掘り込みがあったが、不整形の第1号土壙にあたったものであった。

北側のトレーニングでは、炭片を多く含んだ大きな掘り込みがみられたが、これが結局、第1号堅穴住居発見となった。ただ、図中の太線で示した、奥壁裏直後から2.65mほどの間の、堅穴住居土に切り込んだ造構は、この古墳墳丘造築に關するものと思われる。この土層3~5・8は、明るい地山土(真砂土)を掘り上げたものであって、石室上位の盛土の流入土と考えられる。そして、この掘り込みは、斜面上位側だけを三日月状に切り込んで周溝状とする、群集墳の所作と共通するところと考える。ただ、ここで他の古墳例と異なるところは、この掘り込みが左右方向へ拡がっておらず、周溝の形状をなさないものであるという事である。これは、石室と連続するような、すぐ裏側の土を適当に掘り上げて、ほとんど石室上面だけに乗せた、小規模な、形態化した墳丘形成のあり方を示している。石室東西側に、墳丘盛土の痕跡が無いことも、それを裏付ける。このような簡小化した終末期石室における墳丘の様相を示唆していく

西ノ追遺跡

れた点でも、当古墳の意義は大きい。

占地

当古墳は標高131m前後の高い尾根上にあり、近隣尾根上には古墳の存在はみられず、単独の古地をみせている。墓道は尾根筋下方から入るもので、尾根線をたどって登ってくるわけであるが、現在の杷木町体育馆のあたりまでの、水平距離で110m、比高差で30mほどの間は、自然地形を残しているにも関わらず、古墳の存在は認められない。当古墳の古地は、特に有力古墳であるというわけでもなく、むしろ小型の終末期個人墓的な石室を持つという点からも、特異なものである。全く個人（家族）の遺志・思いつき的希望により、この高所が選ばれた可能性が強い。現地は深山の静寂の地であり、更に極めて見晴しのいい場所である。このことは、弥生後期の高地性集落、奈良期の烽火場所としての遺地と全く共通する理由を有していたと考えられよう。

時期

当古墳の石室・墳丘等からの出土遺物が皆無であり、築造・使用年代の決定が明確にできない。よって、石室の形態・規模等から推定してみたい。

甘木・朝倉地方では、最終段階に近い墳の横穴式石室形態として、小規模・横長の石室と、正方形プランの石室の2種が知られている。前者では、積石壁はせいぜい50cmほどの高さまでしか残っておらず、本来高い天井があって羨道部から何度も出入りできるような構造ではなく、玄室の広さからみても1人を葬るのがせいいっぱいで、元来の「横穴式」の意味の無くなったり、形骸化したタイプである。甘木市柿原古墳群でこの類がかなり発見されているが、副葬品も少なく、追葬の痕跡も見当たらない。

後者の单室正方形プランの石室は、規模自体は小さめにはなってくるが、壁の高さもかなり残存しているものが多く、羨道部もきちんと設けられている。副葬品も後期群集墳と同じように出土しており、その中には追葬と認められるものもありある。7C後葉を中心とするが、中には8C代の副葬品もみられる。よって、この類は後期横穴式石室の機能をしっかり残した家族墓の最後の形態と判断できる。

西ノ追1号墳の石室形態は、前者に属するが、出土品から年代を決定できる他類例が稀少である。单室正方形石室と明らかな前後関係を認めることは困難であり、時期的に併行関係にあつてよいのではないかと考える。以上のことから、当古墳の築造は7C後葉前後と考えておきたい。

4 歴史時代の遺構と遺物

ここでは、時期の明らかな歴史時代の焼土壙と、時期不明の土壙、表土中出土の歴史時代遺物、表土中出土のその他の遺物等について報告しておきたい。

(1) 土 壙

第1号土壙（第88図、図版39）

第1号壙の西側緩斜面に位置する長梢円形気味の不整形土壙である。長さ2.35m、最大幅1.5m、深さ0.8mとなり、全体の形状からは人為的掘り込みと考えられる。上層に淡赤褐色土、下半に褐色土が埋まっており、土層の関係から東隣の古墳より新しいものではない。

出土遺物もなく、時期・性格は明らかにできない。

第2号土壙（第88図、図版39）

第1号土壙南方の緩斜面に位置する。南北に長い不整形プランで、長さ2.95m、幅1.5m、底面までの深さ0.8mで、底面中央に更に0.4mの深い小ピットがある。全体に凹凸が著しく、あまり人為的掘削とも思えない。埋土の状況は、第1号土壙と類似し、第3号土壙以下の歴史時代土壙のものとは全く異なる。出土遺物も全く無く、時期・性格は明らかにできない。

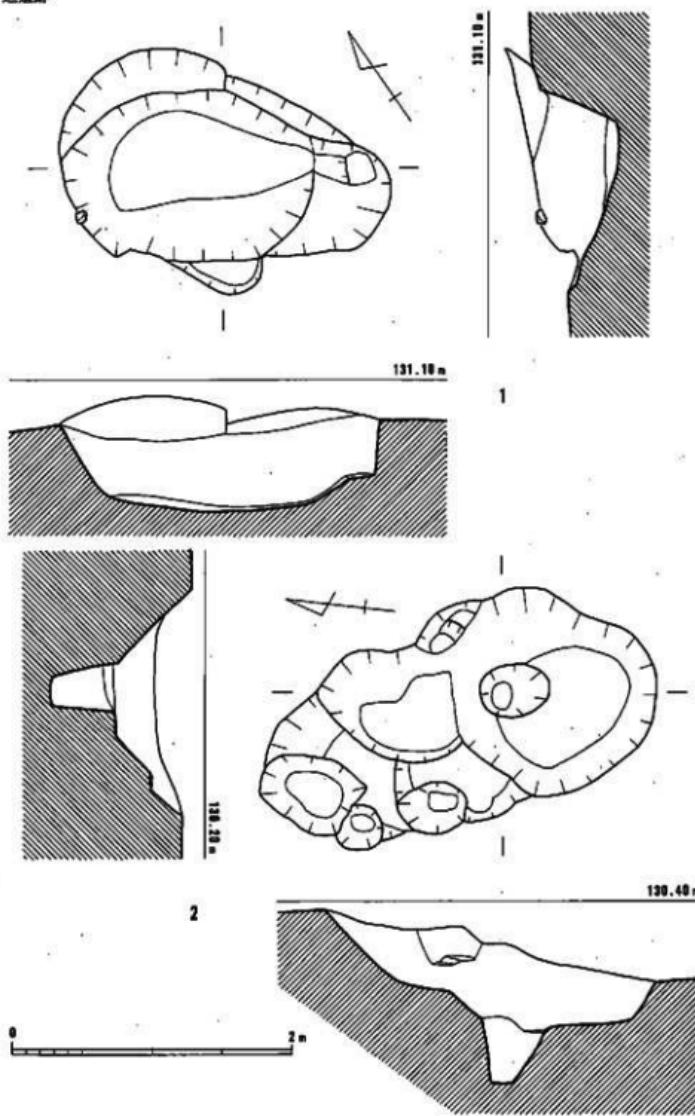
第3号土壙（第89図、図版39）

環濠の西側近くで、環濠外縁部を切って掘り込まれた細長い土壙である。東西に4.96mと長く、幅0.85m、深さ0.3mとなる。底面と北側面は各所で焼けており、東半では最下層に、西半では埋土の大半に炭と灰の層がしっかり残っている。底面は全体に西方へ傾斜しているが、これは、この部分の地形自体の傾斜に符合している。西端部付近で土師器杯小片が出土したが、図示に耐えるものではない。ただ、この周辺の表土剥ぎの際に、第93図3～8の土器片が出土しており、この土壙に伴う確証は無いが、大旨これららの土器と同時期の平安中期（11C代）の土壙ではないかと考えられる。明らかな焼土壙であり、窯や炭焼き等の穴とは考えられない。

第4号土壙（第89図、図版40・41）

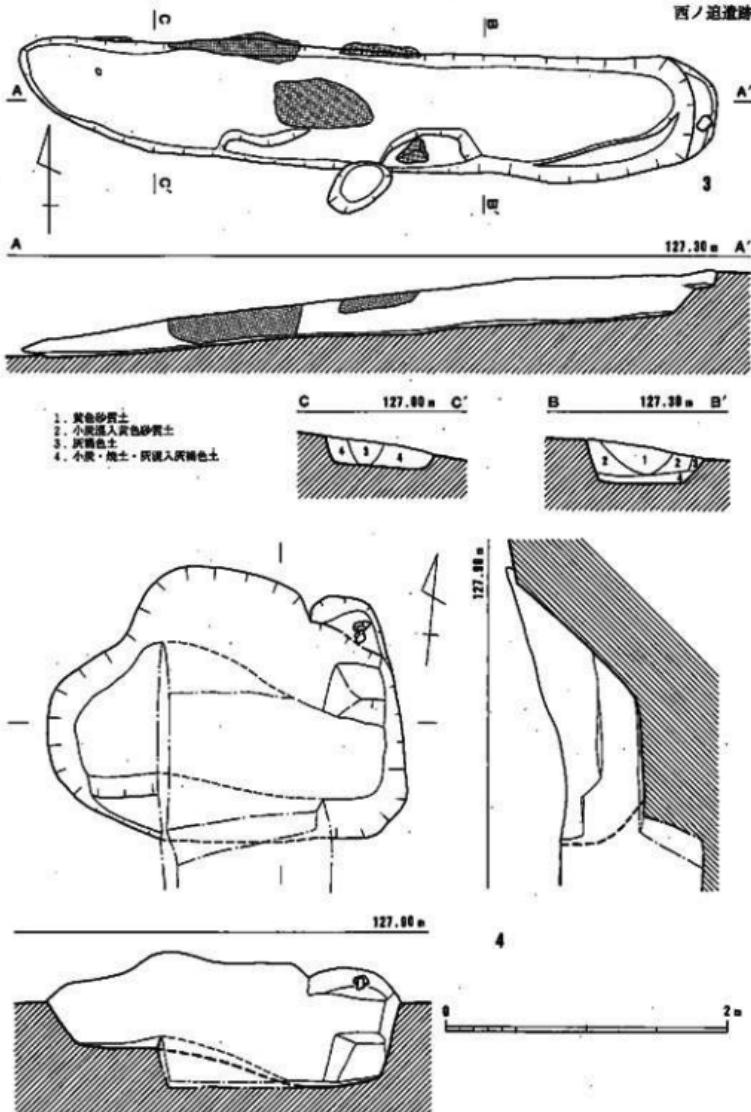
腰掛部の西側のはば環濠中におさまるように環濠を切って掘り込まれている。環濠との切合を示す土層断面は第81図に示したが、環濠内の自然堆積状況と比べると、かなり乱れており、短期間に埋められた形跡がある。壁等が焼けた痕跡は無いが、底から20cm以上の埋土に小炭片

西ノ追迹断



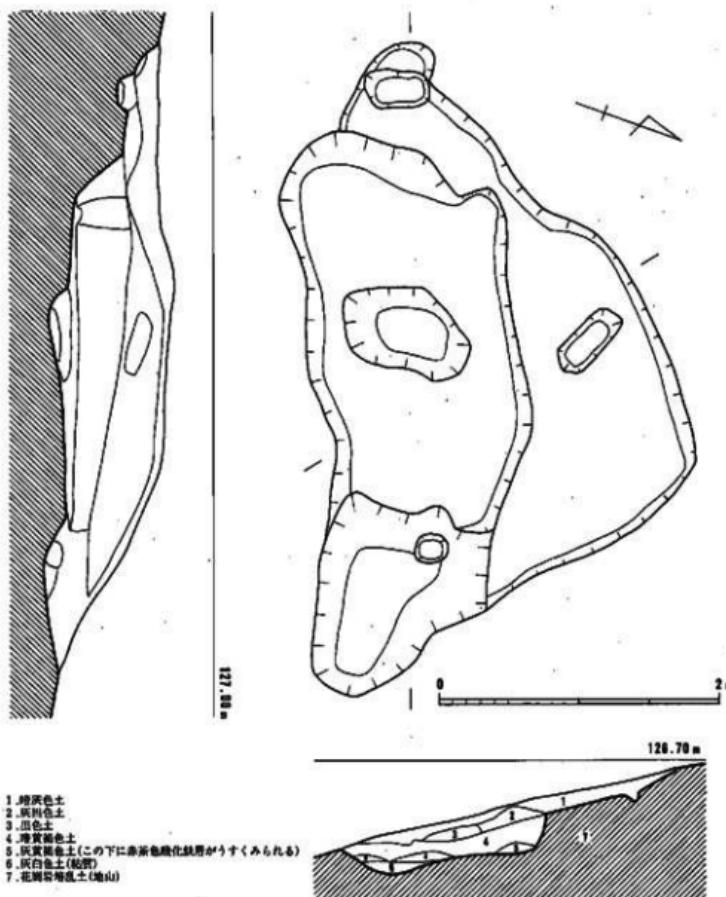
第88図 1号・2号土坡実測図(1/40)

西ノ追造跡



第89圖 3号・4号土壙実測図(1/40)

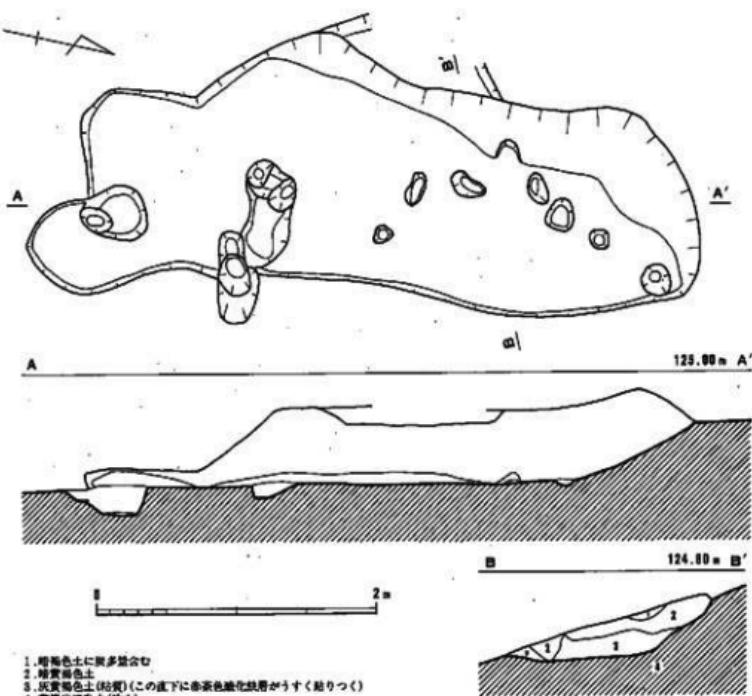
西ノ追迹体



第90図 5号土壤実測図(1/40)

を混入した黒色土がみられ、第3号土壤と同様焼土壤と考えられる。ただ、深くて底面が平らでないのが他の焼土壤と異なる。東西にやや長い平面形をなし、長さ2.55m、幅1.95m、深さ0.95mとなる。

西ノ追塗跡



第91図 6号土塙実測図(1/40)

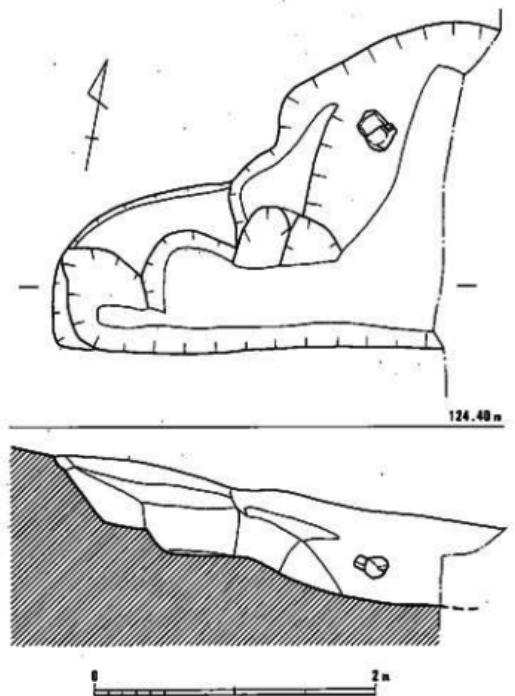
出土遺物(第93図)

須恵器(1) 杯蓋の小片1点のみである。鳥嘴状口縁で、屈折部外側の後はシャープである。焼成良く、淡灰色をなす。胎土も精選されている。この土器は、奈良前半期を前後する時期であり、この第4号土塙をとりあえずこの期のものと判断しておこう。

第5号土塙(第90図、図版41)

環濠の外側の陸橋部の東側に位置する。ちょうど、環濠外縁にある狭いテラス面から斜面へ落ちる際に掘り込まれている。東西に長く、長さ4.6m、幅2.6m、深さ0.75mとなるが、何回か掘り直しているようで、中途で段になったり、小さな掘り込み等もみられる。南半部の底面はほぼ水平で、こういう斜面に意識して平坦につくるのは後述する第6号土塙と同様である。

西ノ追跡跡



第92図 7号土壙実測図(1/40)

埋土には炭・灰層が全体に認められるが、土層断面図に見る如く、少なくとも3回の使用が明らかになった。当初の掘り込みで火を焚き、溜まつた灰が6層で、その上に5層の灰がのっている。5層直下には赤茶色酸化鉄層が図示できない程に薄く水平面を形成している。5層の燃焼の直後に4層の土がかぶせられ、その上を整地して、3回目の2・3層の焚火が行われている。以上のような、わざわざ底面を水平にし、火を焚いて土をかぶせ、3回も同一所でその作業を行っているということは、単なる焚火の偶然が重なった痕跡とはとうてい考えられない。

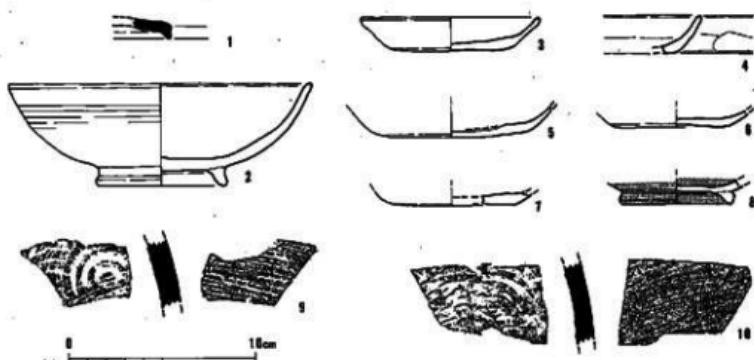
出土遺物（第93図）

土器器碗(2) 復原口径16.2cm、器高5.4cm、高台径6.8cmの低い高台を付ける類である。胎土は極めて精良で、焼成軟質、内外面ともに淡橙色をなす。全体に丸底状の体部に、短いがやや外方へ踏ん張り気味の高台を付けるが、瓦器碗の系譜へ繋がるものと思われる。体部外面上半にカキ目風の沈線がみられるが、他は前面磨滅して、調整は不明である。

この土器からみて、第5号土壙は、10C以前には通り得ず、11C代後半もしくは若干下降する時期のものと考えられる。

第6号土壙（第91図、図版42）

環濠の東側斜面に、他の部位の急傾斜よりもいくらか緩やかな面が12mほどの間見られたた



第93図 4号土壙(1), 5号土壙(2), その他出土の歴史時代土器実測図(1/3)

め、そこを拡張して調査を行った。第5号土壙から北東へ1.5mほど下がった所に、この第6号土壙が検出された。南北に長く、傾斜面を削り込んで水平面を作ったという感じで、明らかに丁寧な人為的掘削が行われている。長さ4.8m、幅1.75m、深さ0.55mで、下位側の東縁はほとんど掘り込まれていない。底面には小穴がかなりみられるが、いずれも浅く、柱穴にはならない。埋土状況も第5号土壙と酷似している。即ち、当初掘込面(地山直上)に赤茶色鐵化鉄層が薄く貼りついており、その上に灰を主体とする粘質土が堆積し、その焚火を土でかぶせている。更にその上で焚火をして炭が多量に残っており、都合2回の燃焼が行われている。

出土遺物が無くて、時期の決定ができないが、造構の形状と焚火の状況が第5号土壙と酷似しており、時期的にも同時代と考えられる。ずれたとしても、季節あるいは年度が変わった程度の数年間の幅ではないだろうか。

第7号土壙(第92図、図版42)

前述の第6号土壙のすぐ南東隣に位置する。東西に長く、東側下方へ底面も下がっていく。長さ2.8m以上、幅2.3m、深さ0.6mで、中途に段を多くもち、底面も不整形である。埋土に炭等の混入は無く、火を焚いた痕跡は無い。

出土遺物も無く、時期・性格ともに明らかにできない。

(2) その他の造構・表土中出土遺物(第93~95図)

土師器(第93図3~7)いずれも南西環濠上面表土中出土品である。位置的に丁度第3・4号

西ノ追遺跡

土壙の上面付近であり、両土壙と関連あるものと考えられる。3は、口径9.6cm、器高1.8cm、底径6.6cmのヘラ切底小皿である。胎土に暗赤褐色粒を少量含むが精製されており、焼成良好で肌色をなす。内面中央のみナデツケている。4は、器高2cmの小片であるが、体部外面上半から内面にかけては横ナデであるが、外面下半から底外面にかけては手持ちのヘラ削りを施している。胎土精良で焼成やや良好、外面は暗黄灰色、内面は暗黄灰褐色をなす。5は、底径8cmの杯であるが、全面器表が剥離して調整はわからない。胎土は精良であるが、暗赤褐色粒をやや多く含み、焼成良好で、内外面ともに明橙色をなす。6は、底径5.6cmで、内外面ともに器表が磨滅して調整は不明である。胎土は精選されているが、暗赤褐色粒を少々含む。焼成良好で、暗橙灰色をなす。7は、復原底径6.6cmで胎土に暗赤褐色粒をやや多く含む。焼成良好で淡橙色をなす。ヘラ切底で、3と同様の小皿となろう。以上の土師器は、4が異類調整で趣きが異なる他は、ヘラ切底で3の時期と同様であろう。3は、11C前～中葉ごろと考えられ、第5号土壙出土の高台椀とほぼ符合し、このことから第3・5・6号土壙が同時期のものと推定できる。

黒色土器（第93図8）これも南西環濠上面表土中出土品で、全面黒灰色にいぶされている。高台径5.7cmで、胎土精良、焼成良好である。この黒色土器は上記土師器より古相をみせ、焼らか透る可能性がある。

須恵器（第93図9・10）9は、1号墳の東側斜面表探品である。内面はやや太めの青海波あて具痕、外面は横位の平行条線状敲きが施されている。胎土は緻密で、焼成堅綴で灰黒色をなす。

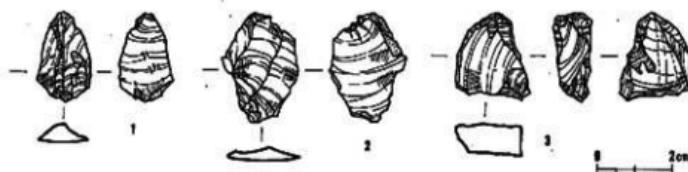


第93図 P-1, 表土中出土遺物
実測図(1/4・1/2)

10は、1号墳の北西側表土中出土品で、内面は青海波、外面は平行条線状敲きを施している。胎土に石英粒を少々含み、焼成堅綴で、内面は黒灰色、外面は灰かぶりして暗灰色をなす。以上の壺片は、出土位置からみて1号墳に伴う可能性もあるが、2点ともに外面は横位の平行条線状敲きで、8C以降の年代が考えられ、むしろ第4号土壙に関連した遺構に伴つたものと推定できる。

弥生土器（第94図1）1号墳東側の斜面落ち際の不整形の穴P-1から出土したもので、復原底径9cmの底部片である。底外面はいくらくかふくらみをみせる。器表は磨滅して、調整不明である。焼成不良で、外面は淡赤橙色、内面は橙灰色をなす。胎土に石英・雲母・暗赤褐色粒等多く含む。弥生後期の住居・環濠に共通するものであろう。

磁石（第94図2）北西側表土中出土品で、やや多孔質の淡褐色粘板岩製仕上げ砥石である。現存長4cm、幅3.4cm、厚さ



第95図 表土中出土石器実測図(2/3)

1.4cmで、自然縦風の形態であったと思われる。

石器（第95図）いずれも1号墳の南側表土中出土の黒曜石片である。1は、不純物をかなり含む黒曜石縦長削片で、明瞭な使用痕は無い。長さ2.4cm、幅1.5cmで、下端一部に自然面を残す。表裏で剝離方向が異なる。2は、漆黒色良質の黒曜石縦長削片で、主要剝離は表面と逆方向から行っている。使用痕は見られない。長さ3cm、幅2.1cmで上方側面に自然面を残す。3は、漆黒色良質の黒曜石石核で、剝離方向はかなり不規則である。長さ2.8cm、幅2cm、厚さ0.8cmとなる。

以上の黒曜石削片等は、剝離技法等から縄文～弥生前期のものと思われるが、時期的に符合する土器や遺構が全く見られない。少量とはいえ、削片があるということは、この高所で石器製作を行っているわけで、常識的には、おそらく縄文後晩期の短期キャンプ跡と考えられる。これは、西方の尾根2つむこうの谷斜面に縄文後晩期のクリナラ遺跡が発見されていることから、充分推定できるところである。更に、あえて筆者の感觉的疑問を示すと、可能性として弥生後期の黒曜石製石器の使用があるのではないかということ。つまり、本遺跡をはじめ、朝倉～杷木町へと横断道内の遺跡調査を進めるうちに、縄文期遺跡も多かったけれど、黒曜石片が弥生遺構に混って出土する例も多かったことから、ひょっとしたらとの思いがある。今後検討を進めたい。

5 小 結

(1) 高地性集落について

西ノ追高地性集落の特徴

見はらしが抜群 丘陵下北側の沖積平野から比高差90mの高さにあり、筑後平野東半部すべてを見渡すことができる。このすばらしい眺望は、「物見やぐら」的功能に最適の条件となろ

西ノ追跡跡

う。また、後述する『のろし台』設置の要件としても、必須のものであろう。

どこから登ったらいかわからない。筑後川以南の平野からみると、すぐ場所はわかるが、いざ登りかけてみると、小さな谷がいりこんでしかもへ現地は全く見えない。谷の奥まったどんづまりの小さな尾根である。この迷い込みそうな地形は、侵入者を防ぐ選地の基本であっただろう。

登るのにふ一ふ一言う この遺跡は見はらしが良いのはいいが、なんせ急斜面で、やっとよじ登るといった具合である。環濠直下のあたりは一番緩やかな所でも30度強という急傾斜である。外敵に対しては絶好の防禦地であった。これこそ『天然の要害』の地として最適の立地である。

深い溝をめぐらす 遺跡周囲の急峻なことに更に加えて、当時としては大工事であったろう環濠（空堀）の掘削を行っている。たった数軒の家屋を守るには、あまりにも大がかりである。死守しなければならない『とりで』としての性格を強く示している。あるいは、それ以上にもっと大切な守るべき何かがあったためか……。

陸橋と門柱 環濠の一部を埋め戻し、通路としている。しかもその内側にがっしりした太い門柱を立てて、入口部分を守っている。ここの施設がいかに厳重に守られなければならなかつたかを如実に物語っている。門柱跡の発見も極めて稀な、貴重なものである。

生活裏がない 出土品が少ない。駐在に必要最少限の必需品だけしか持ち込まなかつたせいだろう。鉄製武器を磨いた砥石だけは、しっかりとセットで持ち込んでいる。手入れに余念のない有様が目に浮かぶ。もちろん、農具などの生産用具は全く無い。

「集落」ではない 家屋数軒と環濠・門柱だけの、すぐれて単純な組み合わせの施設である。生産・埋葬・定住生活を欠いた、目的遂行のためだけの『特別施設』である。

短期間で終えん 弥生後期後業の1時期のみで、後に連続していない。住居跡に1回の切り合いがあるので、20~30年続いた可能性はあるが、土器型式からも殆ど時期幅は認められない。弥生後期の、政治的に最も緊張した時期を示す歴史的遺産であろう。

のろし跡の可能性 残念ながら、ここでは環濠・住居跡と同時期のものとはっきりわかる焼土壙は検出されていない。ただ、裾部には奈良・平安時代中期ののろし跡と考えてよい焼土壙が発見された。これらは、東南方向2kmの杷木神籠石と関連するのかもしれない。また、住居跡の現状が、上半を大きく削平されていることから、本来住居前面の高い所にのろし跡の焼土壙があった可能性も強いと思われる。

九州の高地性集落

今まで、「九州には弥生後期の高地性集落など存在しない」と極論を述べる意見すらあった。しかし、今回西ノ追跡跡ではっきりと確認されたことになり、再度当該時期のものについて検

討をやりなおす必要が生じた。西ノ追跡跡調査以後、いくつか新発見例もみられるので、それらも含めて、ここで検討を加えてみたい。

湊中野遺跡⁽¹⁾（佐賀県唐津市） 標高127～176mの上場台地の山丘上に位置し、「壱岐・唐津湾・糸島地方が一望できる」好地を占めている。A・B・C地区に分かれ、C地区には住居跡16軒、小堀廻塚墓のみ7基、焼土塙11基がみられ、かなり集中した様相を見せる。しかし、A・B両地区は各々6・8基の焼土塙のみで、様相が異なる。弥生中期初頭から古墳時代初頭までのうち4期にわたって断続的に形成されているが、各時期の規模はそれぞれ小規模なものである。漁撈・採集活動は行っているが、稻作農耕具に関する磨製石器は伴っていない。これらのことから、報告者は、「母村」は別にあって、「小規模の集団が長期にわたり、断続的に特定の目的を持って、高地に集落を形成した」と考え、その目的として「軍事的緊張状態の時点を中心とした、通信機能を負うこと」としている。母村が直下の海岸平野にあるとすれば、西ノ追跡跡とは問題にならない程、簡単に往復することはできず、家族ぐるみの定住、食糧の現地調達も必要であったに違いない。長期にわたることも、壱岐・糸島を望む重要な地点であり、歴史的な当地域の各時期にわたる活発な交流活動からみて、首肯できるところである。ただ、軍事的緊張に対してだけではなく、対海外も含めて、交流にたけた「末廣」のクニの平時の通信活動も大きかったのではないかろうか。

白岩遺跡⁽²⁾（大分県

玖珠郡玖珠町） 標高390

mの山頂にあり、玖珠の盆地を眼下にのぞみ、比高差90mを測る尾根斜面を幅1.5～3mの断面逆台形の環濠が、鉢巻状にめぐる。山頂部は平坦に地山整形され、焼土塙も検出されている。門柱らしき柱穴も発見されており、出土遺物が少ないのも西ノ追跡跡と共通する



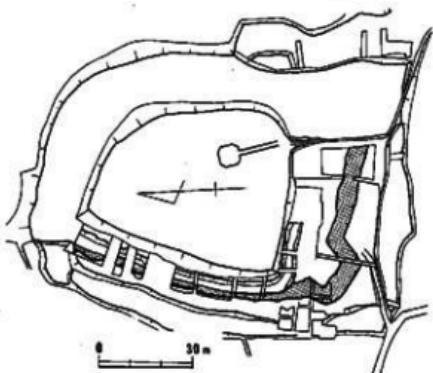
第96図 白岩遺跡の環濠

特徴である。弥生後期後半の遺跡で、河原石を利用した石投弾と考えられる挙大の石が200個以上、磨製石鏃1点が出土しており、戰術的施設としての性格も強くうかがわれる。以上、時期もきちんと符合し、西ノ追跡跡と極めて類似する様相をみせ、しかも、白岩遺跡から西方の日田盆地を抜けて県境を越えると、すぐに西ノ追跡跡へ通じるという近隣性も有している。満

西ノ追遺跡

査担当の村上氏は、のろし台との視点から、西方への繋がりとして、白岩遺跡→北北西方向の牧の平→日田市と天瀬町境の月出山岳→日田市西方の高井岳の通信ルートを考えておられ、この更に西で西ノ追遺跡と繋がる可能性を考えてもよかろう。東方へは、白岩遺跡→玖珠町内東方の嶺ヶ岳、或いは北東方向の糸子山から中津市八面山へと繋げる考えもあるよう、瀬戸内方面への通信網も可能となりそうである。西ノ追遺跡方面のルートについては、今後とも大分県側と協力して、追求を継続してゆきたい。

宇土城西岡台遺跡⁽⁴⁾（熊本県宇土市） 標高37.5mの千畳敷と呼ばれる主郭部分の一段下に、標高約34mのテラス状部分が巡っており、その部分の調査で、城に起因する濠に切られて、断面V字濠が巡っていることが確認された。出土土器から、4C末～5C初頭の布留式土器期の、環濠を持つ高地性集落であることが判かった。環濠内部の住居群等の様相は、未調査のため不明であるが、立地は絶好であり、当該期の高地性集落例として貴重である。注目すべきは、南



第97図 宇土城西岡台遺跡の環濠
(宇土市教育委員会「宇土城(西岡台)」1977から)

西隅の環濠がコの字状に突出していることで、北関東地方の古墳時代居館跡の環濠調査で、近年度々見られる形状と共通している。また、弥生期においても、吉野ヶ里で検出されていることは周知のとおりである。このような例をみても、このコの字状突出形態は、弥生期に九州で発生し、継続され、他地方へ伝播したものと考えられる。西ノ追遺跡とは、時期も違うし、集落内容も明らかになっていないため、比較のしようがないが、肥後の地についても古墳時代初頭期に防衛を主目的とする高地性集落をつくらざるを得なかった社会背景があったことがわかる。あるいは、階層分化の進展に伴った、母集落から独立した居館的な存在を考えていよいのかもしれない。

城山山頂遺跡⁽⁴⁾（鹿児島県国分市） 岬下に国分平野はもちろん、錦江湾を一望に見渡せる眺望絶好の山頂に位置する。平野からの比高差180m前後で、遺構は5C初頭の成川式土器を伴う方形竪穴住居52軒、8C初頭の隼人の反乱に関連付けられる遺構群、16C中頃の山城等が主なものである。これらのうち5C初頭の集落は、52軒すべてが同時併存でないとしても、拠点集落的規模の大集落であり、これだけの平野端にそびえ立つ山頂部という占地から考えて、極めて異例と考えざるを得ない。熊襲征討の際に数百人規模で長期間の抵抗のために立てこもっ

たものであろうか。記紀に伝える熊襲征討は、年代からみて、当該期に符合すると考えられ、中～南九州域における争乱の痕跡を探求することによって、この事件が裏付けされてゆくと思われる。以上のことから、西ノ迫遺跡や白岩遺跡と全く異質な、防禦を最重視した高地性軍事集落と考えられる。おそらく実際に戦闘の場面もあったに違いない。

以上の九州各地の高地性集落発掘調査例の他に、遺物が採集されていたり、簡単な調査が行われている弥生後期の高地性集落及びその候補も幾つか知られている。唐津湾にのぞむ佐賀県唐津市鏡山山頂遺跡は、通信網の一端としても重要な位置を占めると考えられる。また、八幡西区黒崎の黒ヶ煙遺跡も北部九州沿岸ルートとして、瀬戸内海方向へと繋がる通信上の重要地点の一つとなろう。

これらの九州の高地性集落は、個々に性格の若干異なる様相をみせており、一概にとりまとめできにくい。ただ、焼土壁のみられる湊中野遺跡や白岩遺跡は、通信施設の機能が濃厚で、西ノ迫遺跡の性格を考える上で参考となる。防禦機能としては、高地性であること自体にその性格を自ずから有していると考えられる。ただ、何を守るのか、施設か、集落の成員か、によって、その規模・選地等に大きな差が見出せることが判かった。更に、これらの選地については、中世山城と強い共通性を有することがわかり、マイクロウェーブの中継地・現代の町を見おろす展望台を含めた公園地としても重複していることがわかった。

以上の九州例や、関西・瀬戸内沿岸地方の著名な各高地性集落と、西ノ迫遺跡との比較検討から、西ノ迫例が極めて単純な構造で、規模も必要最小限の典型例を示すものと考える。生活臭も無いが、強い直接的軍事性もあり感じられない遺跡であり、環濠・門柱を持つ閉鎖性からみて、機密性の強い施設であったと結論付けられよう。施設の機能としては、軍事的緊張時の「砦」を想定した上での「見張り台」と「のろし台」が最も有力と考える。

註 (1) 唐津市教育委員会「湊中野遺跡」1985

(2) 大分県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 — 日田～玖珠間 — 第2集」1992 なお、調査担当の村上久和氏には、現地にての詳細な御教示を受けた。記して感謝したい。

(3) 宇土市教育委員会「宇土城跡（西岡台）」1977

(4) 国分市教育委員会「城山山頂遺跡」1985

(2) 環濠集落について

前節までに、高地性集落としての西ノ迫遺跡の特徴と問題点をとり上げたが、ここでは、具体的施設の個々の検討を行ってみたい。そこでどうしても避けて通れないのが、環濠集落論であるが、ここでは西ノ迫遺跡の検討という視点から、環濠集落の構造のうち、環濠・環濠内住居・陸橋・門柱等に限って類例比較を行いたい。環濠集落そのもの及びその他の諸施設につい

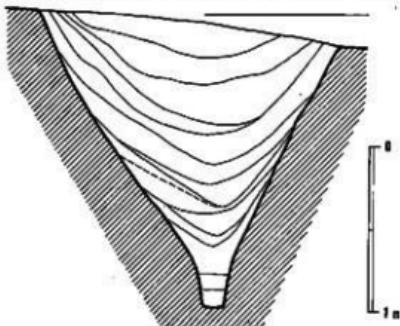
第2表 環濠（溝）の機能による選地

立地 機能	低地	低丘陵	高地
防禦	○	○	○
用（貯）水	○	×	×
排水	○	○	×
ゴミ溜	○	○	×
墓との区別	○	○	○
集団内区別	○	○	△
道路	×	○	○

(○: 効果大、○: 効果あり、×: 効果なし)

~終末（第3期）の3時期に集中する。（以下、本文ではこの第1~3期で呼称する。）また、北陸・長野・関東地方では第1期にはまだ伝播しておらず、中・四国地方では第2・3期には未発見のためか皆無に近いなど、地域差も大きいようである。

V字環濠は伝播した 弥生頭初期・北部九州で始まった拠点集落の環濠は一重で鋭い断面V字溝であった。また、貯蔵穴専用環濠として、葛川遺跡（福岡県苅田町）・光岡長尾遺跡（福岡県宗像市）・板付遺跡の弦状溝と環濠に囲まれた部分なども同時期の著名な例である。これらの環濠はすべて断面V字溝である。実際に発掘調査したことのない方には理解し難いかもしれないが、V字溝底は思いもかけず歩きにくいものである。深く鋭く切り込んで、底幅20cm以下に作られているV字溝であれば、身動きにも不便さを感じる。U字溝・逆台形溝と比べて、V字溝は掘削労力を少なくして、かつ、溝下半をさらに急角度に鋭く深く掘ることによって、



第98図 断面V字溝（前期後葉）
(福岡県横須山第7地点「横須山遺跡」)
1974 小都市教育委員会

ては、機を改めて踏することにしたい。

環濠集落の盛行 弥生時代は、確かに板付遺跡・有田遺跡の環濠集落が始まり、後期の高地性集落・方形区画の居館的周濠に至るまで、著名な遺跡の多くが環濠集落である。まさに『溝の時代』『環濠集落時代』である。しかし、弥生時代を通じて、日本全域の弥生文化の中で、のべつ環濠集落が行われた訳ではない。九州から畿内を経て、北関東まで伝播した環濠集落は、北部九州縦年に読みかえた前期~中期初葉（第1期）、中期末~後期前葉（第2期）、後期後葉

~終末（第3期）の3時期に集中する。（以下、本文ではこの第1~3期で呼称する。）また、北陸・長野・関東地方では第1期にはまだ伝播しておらず、中・四国地方では第2・3期には未発見のためか皆無に近いなど、地域差も大きいようである。

V字環濠は伝播した 弥生頭初期・北部九州で始まった拠点集落の環濠は一重で鋭い断面V字溝であった。また、貯蔵穴専用環濠として、葛川遺跡（福岡県苅田町）・光岡長尾遺跡（福岡県宗像市）・板付遺跡の弦状溝と環濠に囲まれた部分なども同時期の著名な例である。これらの環濠はすべて断面V字溝である。実際に発掘調査したことのない方には理解し難いかもしれないが、V字溝底は思いもかけず歩きにくいものである。深く鋭く切り込んで、底幅20cm以下に作られているV字溝であれば、身動きにも不便さを感じる。U字溝・逆台形溝と比べて、V字溝は掘削労力を少なくして、かつ、溝下半をさらに急角度に鋭く深く掘ることによって、防衛上の効率を高めようとする工法上の優位性が明らかである。掘削土量は、同幅・深さの断面箱形溝を掘るのと比べて半分以下となる。これらの特殊な技術から「V字溝は伝播した」と判断した。この底面を狭く整下半を急角度にする工夫は、まさに「陥り穴状構造」の意図そのものである。その共通する目的は、落ち込んだ動物（敵）の自由を束縛して逃げられなくなる事にある。

以上のように、V字溝はU字溝や

第3表 「V字溝は伝播した」

	北部九州	中・四国	畿 内	東 海	北陸・長野	南関東	北関東
	U						
前 期	V	V (U)	U - V	U			
	V	V U	U V	U			
中 期	V	V U	U V	U		U - V	U - V
	V U		U V	U V	V	U V	U V
後 期	U V		U	V	V u	V	V
	U V			U		U	

(V: 断面V字彫溝, ——: V字溝の伝播, -----: 多重溝の伝播, ○: 多重溝の範囲)

逆台形溝に比べて異質に規格性が強いことから、V字溝は伝播したと考えた。それは、弥生文化の東漸と軌を一にしている。前期後半期には、中・四国の西半まで一重V字形態が拡がる。畿内でも前期末までにはV字溝が受容されるが、そこでは既に多重溝という独特な形態で成立している。と同時に、沖積地の拠点の大集落においては、規格性と防禦性が強いV字溝を捨てて、掘りやすく容積の大きいU字溝を多重にめぐらす形態を採用している。この畿内で独自に成立したU字溝多重型は、前期末の間に、西は広島・愛媛、東は愛知・三重にまで拡がる。うち畿内・東海地方においては、この形態が伝統的に中期後葉～後期前葉まで盛行する。関東地方では中期後葉に初めて、しかも爆発的に環濠集落が創出するが、一重のV・U字溝双方が認められる。V字溝が優勢でより新しい傾向が見られる。この関東例は、畿内の高地性集落の発生に起因する形態をとる。このパターンは後期前～中葉で東海・北陸・長野でも見られ、後期後葉以降に引き継がれると北陸・中部・関東地方では一重V字溝が圧倒的となる。

これらと様相が全く異なるのが九州で、後期前葉段階で、伝統のV字溝に反してU字溝が導入され、以後の後期中葉以降古墳時代初頭に至るまで一重U字溝が圧倒的となる。古墳時代初

西ノ追遺跡

頭には全国的に方形プランのU字溝となるが、九州では既に弥生後期後葉段階で確実に方形プランのものが出現していることから、この後期中葉以降の九州でのU字溝圧倒性は、他地域からの影響というよりも、階層分化の進行に伴う先駆的現象として、新形態を先取りしたものと考えられる。

西ノ追遺跡の環濠についてふりかえってみると、形態としては一重の断面逆台形溝であり、九州の当該時期の様相と合致する。ただ、その規模や立地から、母村たる拠点の大集落のものとは、根本的性格が異なることは明らかであり、やはり、高地性集落の観点から、防禦機能を一番に考えるべきであろう。環濠の規模から言えば、昨今新聞誌上にぎわすような日本最大規模の環濠等と対極に位置する。日本最小の環濠（直径30m弱）と言えよう。ただし、機能最重視の最も合理的な、非の打ち所の無い、言うなれば『孤高の機能美に満ちた西ノ追環濠』なのだと強張したい。

環濠内住居グループ 環濠内住居の形態としては、各地域で特色のある中小の竪穴住居群、一つの群に1～2軒ある大きい竪穴住居、首長層の独立に至る経過の中で認められる掘立柱建物などがある。近年環濠集落の研究が盛んになってきたが、「環濠」の論究だけが目立ち、「集落」の方は進展が遅れがちである。注目すべき大環濠集落の多くは、集落の内容が殆ど未調査で、明らかにできないし、住居の切合いがひどくて分析が困難な場合も多い。末端行政の緊急調査では想像を絶する状況の中で、分析不能となる事を苦惱する毎日である。各処でしばしば見聞きする、机上研究者による無責任な調査員個人への非難も度を過ぎると如何かと思う。ともあれ、限られた資料の中ではあるが、とりあえず現状での検討をしておこう。

前期～中期前葉での環濠内住居構成がわかる例は少ない。横隈山遺跡第7地点（福岡県）では、竪穴住居3軒と貯蔵穴群とからなる。この遺跡は複数の環濠・非環濠の住居群が集まって大きな集落を形成しているので、この3軒は単位集団の一つと見てよい。しかも、この独立尾根上の半分は環濠がまわらず、貯蔵穴が群集しており、当初から貯蔵専用地区とされ、住居も管理棟的性格を有する。同様の状況は、朝田墳墓群第II地区（山口県）でも認められる。丘陵上の当期の環濠は扇谷遺跡（京都府）のように、谷を取り込むような大規模例を除き、一つの尾根の先端頂部をまるるものが多く、概して小規模である。住居単位を幾つも囲んで、それ自体が一つの完結した集落を構成することはない。上述の横隈丘陵遺跡群のように1～2単位の小グループで小環濠を有し、それと、非環濠の集落・貯蔵穴専用環濠等が複数集まって集落を形成する。これに対して同期の平地の環濠集落は、いずれも住居構成は不明であるが、板付遺跡・有田遺跡（福岡県）、唐古・健遺跡（奈良県）のように、その規模から、環濠内にいくつもの住居単位を擁しそれ自体で完結し得る拠点集落と想定できる。

中期後葉～後期前葉になると、畿内で前期に成立した多重形態の大規模環濠を繼承・盛行させて、さらに東海・関東にまで環濠集落の時代を出現させた。畿内の例では、沖積地立地の池

上曾根遺跡・亀井遺跡（大阪府）、唐古鍵遺跡などの大環濠内の住居構成は全く判からないが、この時期に登場した高地性集落において明らかである。東山遺跡（大阪府）では4グループに分かれ、1小期に全体で6～7軒で集落を構成する。平地の大環濠と違って、占地の特殊性による小規模さと判断される。関東のこの時期では、1小期30軒ほどの大規模なものが、大塚遺跡（神奈川県）で3グループに分かれ、朝光寺原遺跡（神奈川県）では大きく2グループに分かれる。大原遺跡（神奈川県）は中規模で、1小期に16軒ほどでそれが3～4グループに分かれる。小規模なものは殿屋敷C地区（神奈川県）で、2小期とすれば、1小期に6～7軒の集落となる。

後期後業以降の例をみてみよう。九州では、大南遺跡（福岡県）で6グループ各5軒として1小期に30軒、千塔山遺跡（佐賀県）で環濠内外に4グループあり1小期に全体で20軒弱と大規模なもののに他に、三國の鼻遺跡（福岡県）では16軒前後で1小期に集落を形成する。野方中原遺跡（福岡県）では8軒と小規模であるが、ここでは次の時期になると環濠を越えて急激に膨張する。関東の後期後業以降では、馬場北遺跡（埼玉県）で環濠内外合わせて1小期30軒ほどと考えられ、大規模である。日影平遺跡（群馬県）では、2小期として12軒の同時存在が考えられる。

中期後業～後期終末（第2～3期）についてまとめてみると、関東の中後期を中心とする時期の環濠集落は、大規模なものが多く拠点的集落になり得ること。そして後期終末期前後に大環濠集落自体が少くなり、分村化が進んだと考えられる。同時期の九州においては、環濠を持つ拠点的集落も多いが、持たない巨大集落の方が圧倒的に多く、集落の拡大と分村化も著しく進んだとみられる。

「大きい住居」は環濠集落にも多く見られる。東日本においては特大型住居が一目瞭然であるが、西日本、特に九州ではそれ程目立たない。2つのパターンに分かれ、まず、環濠のほぼ中央に1～3軒の特大型住居が位置する例は、関東例でみると中期後業～末前後に多く、次に各グループ毎に各々1～2軒の特大型住居を有する例は、中期後業～末前後にもあるが、後期後業前後に多くなる。この後者例の中から、東山遺跡（大阪府）のB居住区の最大住居の如く、優位に立つグループの中に集落で最大の住居を営むような格差が発生してくる。さらに、後期終末期になると、針江川北遺跡（滋賀県）のように、環濠内ほぼ中央にさらに卵形プランをした櫓を設け、その中と周辺に掘立柱建物が立つというような例が出現してくる。明らかに他の成員から質的に卓越していくながら、共同体首長が集落から独立する直前の、未だ環濠内にとどまっている段階を示している。

以上の住居グループ等の検討からみても、西ノ追遺跡の住居のあり方は、平地の一般的環濠集落とは全く異なることがわかる。グルーピングや集団間の格差等を論することは不可能であるのはもとより、意味のない作業とさえ言える。基本的には関西の高地性集落と共通する点も

西ノ追遺跡

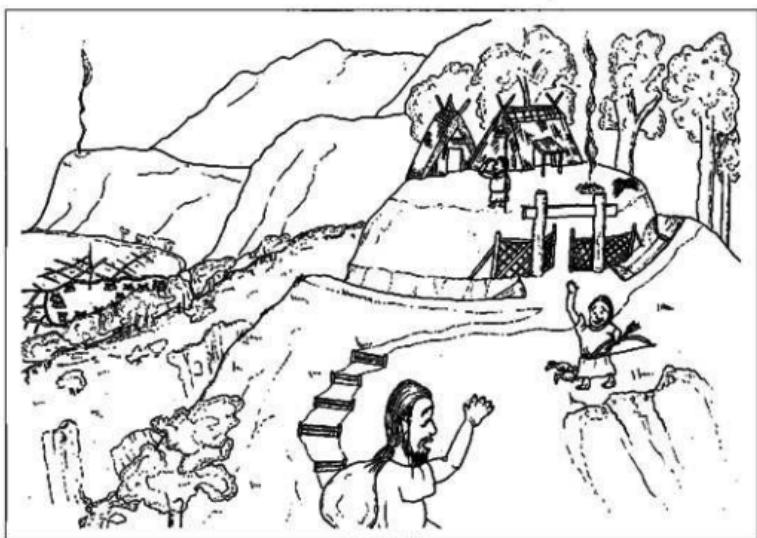
多いが、近隣の尾根上には試掘の結果からみても全く住居等は発見されておらず、しかも生活臭の殆ど無い西ノ追例とは比較すべくもないと思われる。そういう意味からも、西ノ追遺跡は「集落」ではないと言えよう。むしろ、特殊目的を持った「施設」との視点に立った方がよかろう。

陸橋（出入口） いわゆる土橋として、環濠中途を掘り残して出入口としたもの例は多い。環濠で閉鎖された集落では、出入口の位置と構造は極めて重大な意味を持ってくる。恒久的なものであるかそうでないか等の構造の違いは、個々の環濠集落そのものの性格を表すと考えてよかろう。

防禦を主眼とした場合、簡単に取りはずせる板橋などは効果的であろう。中期後業の四葉地区遺跡（東京都）B地区1・2号溝にみられる両岸に対となるピット群は、木橋の固定杭痕と考えられる。また、後期初頭の下山遺跡（東京都）では、溝の両側に直角方向に切り込まれたピットが対でみられ、橋がかけられていた可能性がある。また、和泉～鬼高郡の方形プランの居館のある環濠である成塚住宅団地内遺跡（群馬県）では、環濠の1ヶ所が、両側からコの字状に内側にせり出す形で掘り残されて、環濠がそこだけ狹くなっている。吉野ケ里遺跡（佐賀県）でも同様の部分があり、架橋のための計画的な技術と考えられる。以上の構造橋については、大がかりな規模のものは無く、いずれも狭くて簡単な構造のものであったと考えられる。閉塞性・防禦性を目的とする環濠集落の性格を示すところであろう。

陸橋部を有する環濠は、前期の板付遺跡からみられ、各期に多く発見されている。ただ、九州・関東では各期にみられるが、東海地方では後期初～前業のみに集中し、畿内では殆ど無いのが気にかかる。陸橋の方向からその設置目的をみてみると、まず、前期の光岡長尾遺跡（福岡県）では正反対側に2ヶ所、横隈山遺跡（福岡県）第7地点では3ヶ所あり、これらは、共同管理の貯蔵穴群に対して居住地方向の異なる複数の集団の出入りの便宜を配慮したものであろう。また、板付遺跡の近年発見された陸橋は、生産地である水田へ降りるために考えられる。さらに、後期初頭の朝日遺跡（愛知県）南環濠では、2重濠の内濠で2ヶ所陸橋があり、外濠の出入口と全くずれており、出入口の複雑な形態で防禦強化を工夫している。次に、後期後業（U字溝期）の千塔山遺跡（佐賀県）では、陸橋部が正面（平野側）ではなくて、丘陵裏から細く入り込む谷に向けて設けられ、外来者にはわかりにくくなっている。以上のように、陸橋部の位置には、個々に重要な意味があると考えられ、今後ともに調査に際しては注意しておく必要がある。

西ノ追遺跡の陸橋部は、尾根線上より東にずれた位置にあり、その直下は尾根線より急傾斜である。防禦性を高めるために、わざとずらした可能性もある。また、一度掘り上げた環濠を完成中途で埋め戻した陸橋であるが、後期後半の松木遺跡（大分県）でも、ある程度埋まつた時点で一部を踏み固めて陸橋とした部分があり、後に計画変更のあったことがわかる。また、



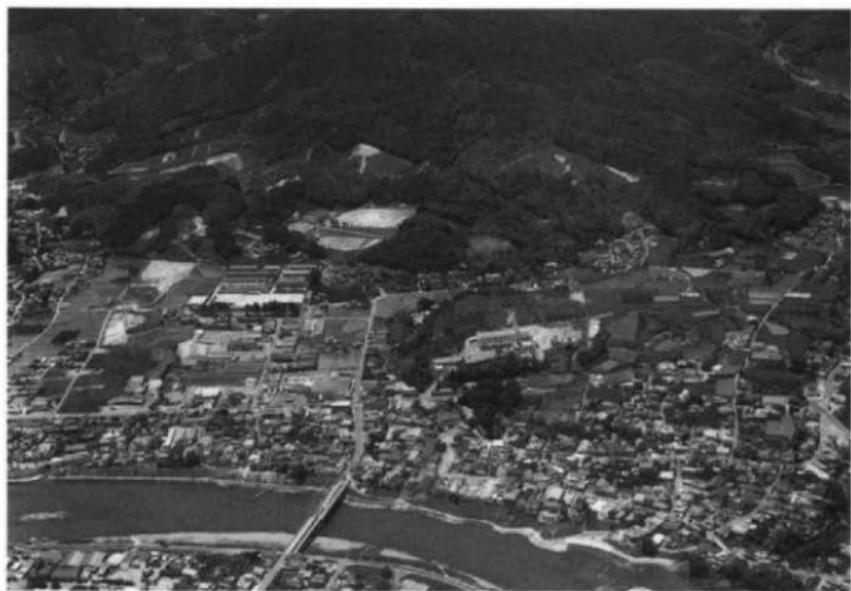
第99図 西ノ追遺跡のイメージ
「おーい、帰ってきたぞー。」「おや？ 高山にのろしが…」

西ノ追環濠では、陸橋部位下の環濠底が最も高くなっていると指摘したが、後期前葉の鶴松遺跡・伊場遺跡（静岡県）や、後期中葉の北大泉丸山遺跡（東京都）などでも、溝が浅くなる部分があり、通路として意図されたものと考えられる。

門柱 環濠集落における出入口には、その目的からみて門や扉などが必要となろう。ただ、出入口の例の多さにも関らず、そういう構造物の痕跡発見例は少ない。前期末～中期前半の尾根を切断する条溝に伴う注連引原遺跡（群馬県）の例は、陸橋部の内側に対となる門柱柱穴が残されている。また、後期前葉の四枚畠遺跡（神奈川県）では、環濠中途の陸橋部分の外側に1対の柱穴が発見されている。さらに吉野ヶ里遺跡でも類例がある。

西ノ追遺跡の門柱は、環濠の内側に太くてがっしりしたつくりであったことがわかるが、ひとえに防禦に対する目的意識が強かったことが考えられる。

図 版



(1) 西ノ追道路遠景(南から、手前は筑後川)



(2) 西ノ追道路造構全景(上空から)



(1) そびえ立つ西ノ道道路(南方上空から)



(2) 第1号墳付近(上空から)



(2) 古墳の石室が開けられた



(4) 環濠北東端付近の作業



(1) わらびもえ立つ山上で発掘開始



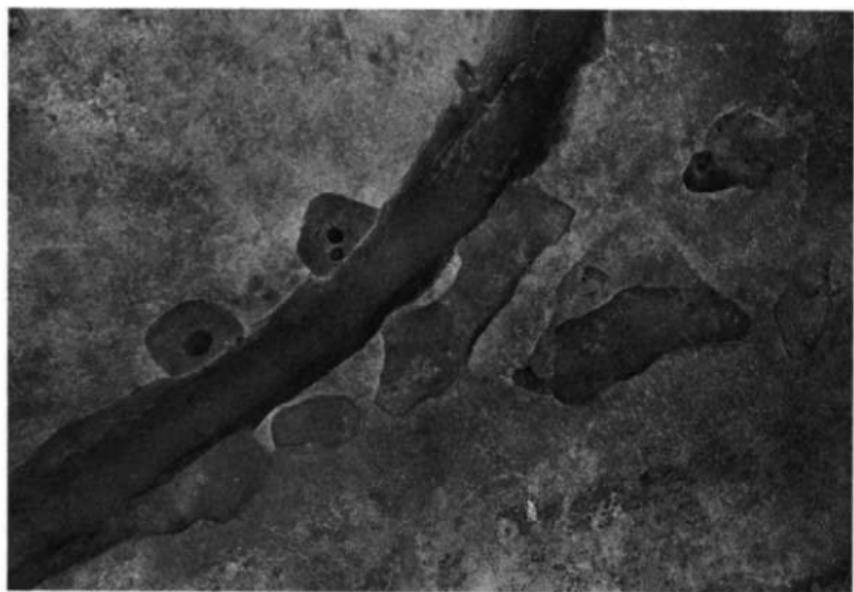
(3) 環濠南端付近で振りあぐむ



(1) 第1号竪穴住居跡(北から)



(2) 第2号・3号竪穴住居跡(北から)



(1) 環塗中央部の門柱跡と第5号土壙付近(上空から)



(2) 環塗内土器出土状態(北東から)

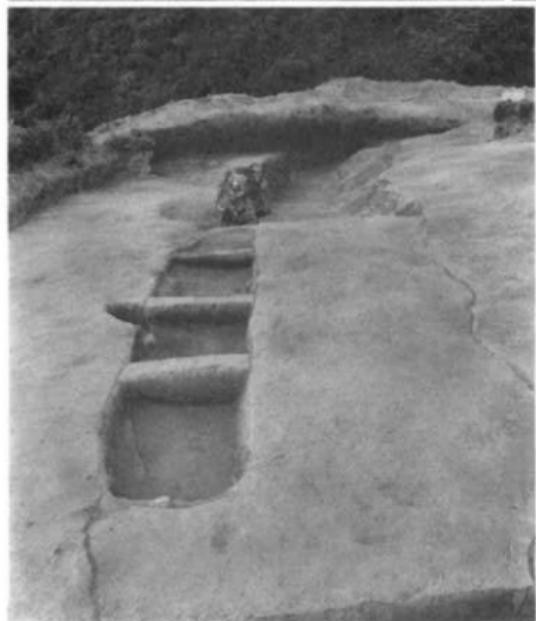
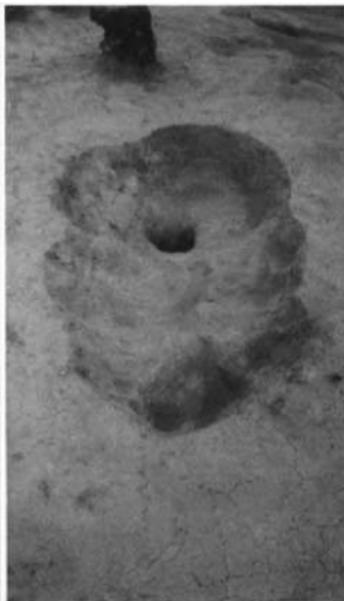




(1) 第1号墳全景
(南から)



(2) 第1号墳石室
(西から)



(1) 第1号土塚
(南東から)
(2) 第2号土塚
(北から)

③ 第3号土塚
(東から)



(1) 第3号土壙(北から)



(2) 第4号土壙(北から)



(1) 第4号土塁断面(環濠を切っている)(西から)



(2) 第5号土塁(南西から)



(1) 第6号土壤(北から)



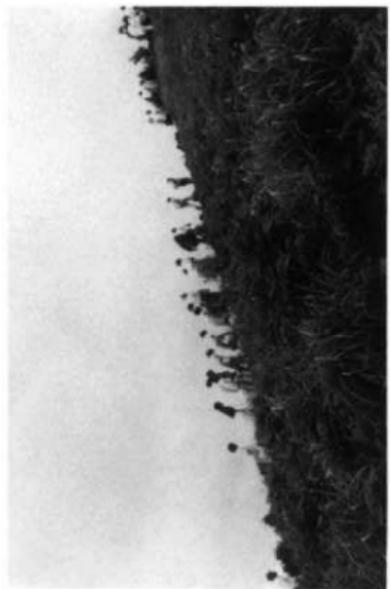
(2) 第7号土壤(西から)



(1) 左 環濠内出土
（2）右 “ ” 小型壺



(3) 左上 文化講演会
「倭國大亂」
(4) 右上 热弁をふるう
水野正好教授
(5) 左下 同会場の出土品展示



(1) 文化講習会の様、みんなで西ノ道へ登る



(2) 現地説明会(陸橋付近)



(3) 現地説明会(蘭潭西牛)



(4) 現地説明会(第1号住居跡)



(1) のろし体験：準備完了



(2) のろし体験：着火



(3) のろし体験：把木神龍石・沿岸裏からも発煙



(4) のろし体験：「見える、見える」



NHK収録時 のろし実験(草刈り、火起こし)



(1) 西ノ道にのろしが上がる



(2) 西ノ道にのろし(高山かみ)



(3) 西ノ道(右)と島山(左)(把木神籠石上から)



(4) 南側平地から望む西ノ道海岸

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

—25—

平成5年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 荣光印刷株式会社

福岡市東区松田1丁目9-30

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H 4	登録番号 1

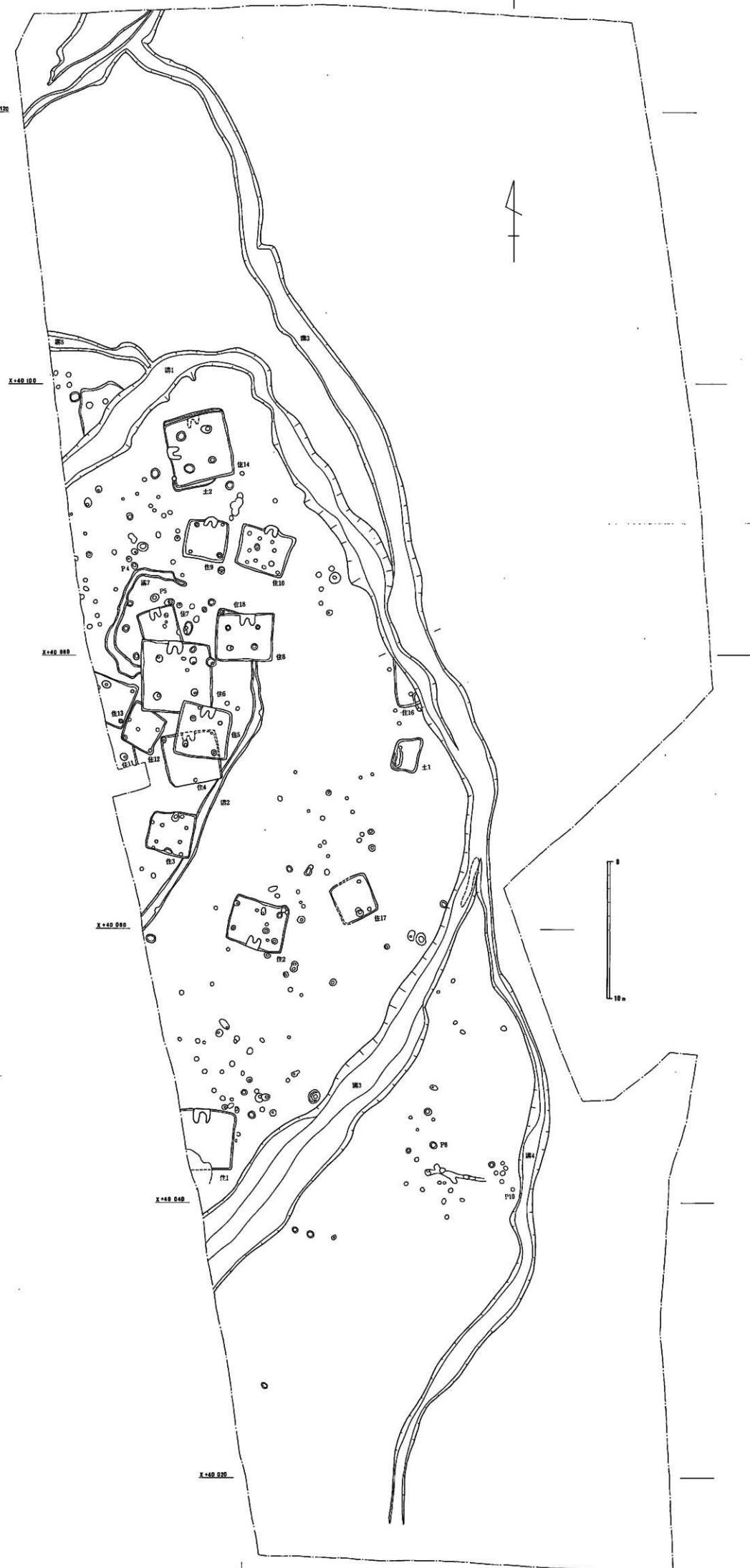
九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

—25—

鞍掛・前田・西ノ迫遺跡

付 図



付図 駿掛遺跡造構配置図(1/200)